

五ヶ庄二子塚古墳発掘調査報告

1992

宇治市教育委員会



五ヶ庄二子塚古墳発掘調査報告

1992

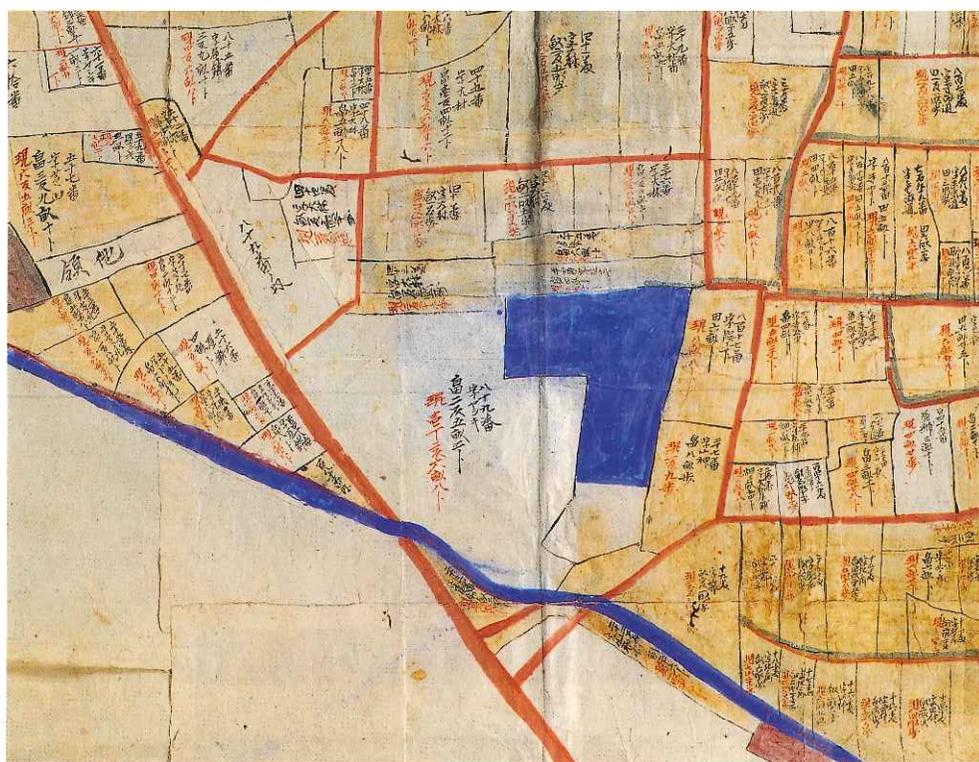
宇治市教育委員会



二子塚古墳と宇治川（南東から）



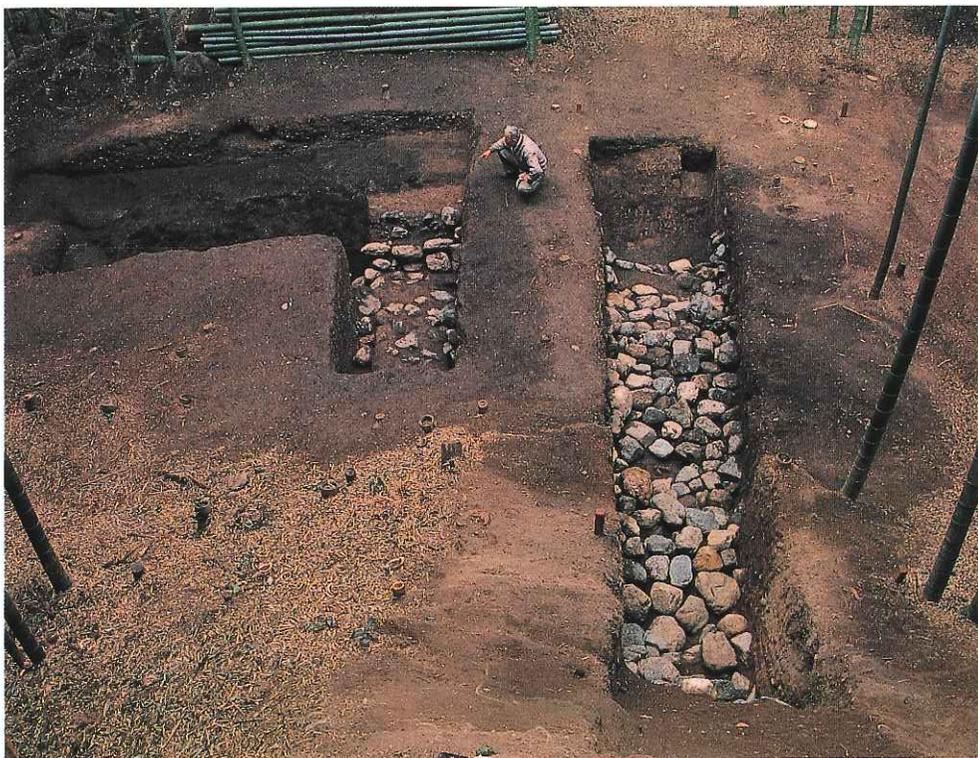
(1) 二子塚古墳近景（南西から）



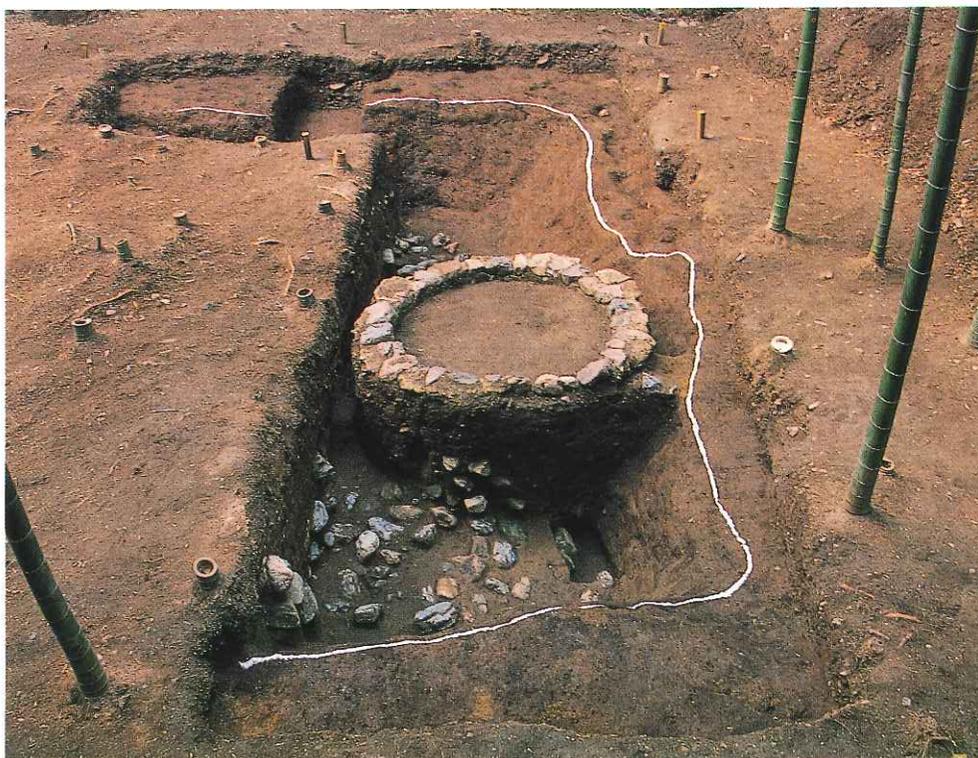
(2) 二子塚古墳周辺の地籍図（下が北）



後円部残丘と基礎礫群 (62-1 トレンチ)



(1) 62-1・63-1 トレンチ全景（南から）



(2) 63-2 トレンチ完掘状況（南から）

序

宇治市五ヶ庄に所在する二子塚古墳は、6世紀代における京都府下最大の前方後円墳であります。

宇治市教育委員会では昭和62年度より4年にわたって、国宝重要文化財等保存整備費補助金および文化財緊急保存費補助金の交付を受け、二子塚古墳の発掘調査を実施してまいりました。この調査は、古墳の周辺で開発が増加したのに伴い、二子塚古墳の規模や内容を確認し、今後の遺跡保護の基礎資料を作成することを目的としたものです。

4年間の発掘調査の結果、二子塚古墳は二重の周濠を有し、墳丘全長は112mに及ぶ大王級の古墳であることがわかりました。また、大量の礫を充填した石室の基礎を発見し、二子塚古墳が全国的にも珍しい施設を持った古墳であることがわかりました。

本書は、この4年間の発掘成果を1冊にまとめたものであります。本書が多くの方々の目にふれ、広く宇治の歴史を知る機会となり、文化財保護に役立つことを願うものであります。

最後になりましたが、調査にご理解とご協力をいただいた土地所有者の方々を始め、調査にあたりご指導を賜わった調査指導の先生方や関係機関・各位、そして調査に直接従事していただいたの方々に対し心よりお礼申し上げます。

平成4年3月

宇治市教育委員会

教育長 岩本昭造

例 言

1. 本書は宇治市五ヶ庄大林46に所在する二子塚古墳の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は昭和62年度から平成元年度、平成3年度の4年度にわたり実施した。
3. 発掘調査は、国から国宝重要文化財等整備費補助金を、京都府から文化財緊急保存費補助金の交付を受け実施した。
4. 昭和62年度から平成元年度調査については、各年度ごとに概要を報告した。しかし若干不統一な部分があるため、本書でこれらを統一した。また開発に伴って実施した調査成果の一部も合わせて収録している。
5. 本書で使用する方位は、すべて磁北である。
6. 本書の註については、Ⅰ～ⅤまではⅤの末尾に、Ⅵについては各論末尾に付した。
7. 本書に収録する写真は、遺構写真については宇治市教育委員会撮影分を使用し、遺物写真は写真家寿福 滋氏の撮影である。
8. 本書の執筆は、杉本 宏・荒川 史（宇治市教育委員会）・福島孝行（同志社大学学生）が行い、執筆分担は下記のとおりである。また付載については三辻利一氏（奈良教育大学教授）、横山明生氏に玉稿をいただいた。
杉本 宏……Ⅴ—4、Ⅶ—3
荒川 史……Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ—1・2・3、Ⅵ—2・3、Ⅶ—1、Ⅷ
福島孝行……Ⅵ—1、Ⅶ—2
9. 本書の編集は、宇治市教育委員会社会教育課が行い、実務を荒川が主担当し杉本がこれを補佐した。

本文目次

I	はじめに	1
II	位置と環境	3
III	過去の調査	7
IV	調査経過と調査体制	11
1	調査経過	11
2	調査体制	14
V	遺構	17
1	外濠	17
2	堤	21
3	墳丘	27
4	埋葬施設	39
VI	遺物	46
1	埴輪	46
2	土器	60
3	金属器・石器	63
VII	考察	66
1	墳丘の復元と築造企画	66
2	二子塚古墳の円筒埴輪について	69
3	五ヶ庄二子塚古墳と継体朝をめぐって	72
VIII	総括	80
付載 1	二子塚古墳およびその周辺の古墳出土埴輪の蛍光X線分析	81
付載 2	宇治二子塚古墳の葺石の石材	94

挿図目次

第1図	二子塚古墳位置図	2
第2図	古代の地形と主要遺跡	4
第3図	周辺の主要遺跡分布図	5
第4図	周辺地形図	6
第5図	二子塚古墳周辺地籍図（右下が北）	8

第6図	大正年間出土の埴輪（京都大学蔵）	9
第7図	宇治市史測量図	10
第8図	トレンチ配置図	16～17
第9図	昭和60年度外濠トレンチ実測図	18
第10図	平成3年度外濠トレンチ実測図	19
第11図	01—1・01—2 トレンチ土層図	22
第12図	01—3・01—4 トレンチ土層図	23
第13図	01—5・01—6 トレンチ土層図	24
第14図	01—7・01—8 トレンチ土層図	25
第15図	堤推定復元図	26
第16図	62—2 トレンチ葺石実測図	28
第17図	62—2・03—1 トレンチ実測図	28～29
第18図	62—3 トレンチ実測図	29
第19図	03—2 トレンチ実測図	30～31
第20図	段築テラス実測図	31
第21図	03—3 トレンチ実測図	33
第22図	62—4・5 トレンチ土層図	34
第23図	03—4 トレンチ実測図	35
第24図	地山断面実測図（1）	37
第25図	地山断面実測図（2）	38
第26図	西方寺裏庭の石室石材	39
第27図	墳丘における埋葬施設の位置図	40
第28図	基礎礫群実測図	40～41
第29図	62—1 トレンチ実測図	40～41
第30図	63—1 トレンチ実測図	41
第31図	63—1 トレンチ断面実測図	42
第32図	63—2 トレンチ実測図	44
第33図	63—2 トレンチ実測図	45
第34図	円筒埴輪実測図（Ⅰ類）	48
第35図	円筒埴輪実測図（Ⅰ類）	49
第36図	円筒埴輪実測図（Ⅰ類）	50
第37図	円筒埴輪実測図（Ⅱ類—a）	51

第38図	円筒埴輪実測図（Ⅱ類—a）	52
第39図	円筒埴輪実測図（Ⅱ類—b）	53
第40図	円筒埴輪実測図（Ⅱ類—b）	54
第41図	円筒埴輪実測図（Ⅲ類—a）	55
第42図	円筒埴輪実測図（Ⅲ類—b）	57
第43図	朝顔形埴輪実測図	58
第44図	形象埴輪実測図	59
第45図	土器実測図（須恵器・土師器）	61
第46図	土器実測図（須恵器）	62
第47図	土器実測図（縄文土器・土師器）	62
第48図	金属器実測図	63
第49図	石器実測図	64
第50図	二子塚古墳推定復元図	66～67
第51図	二子塚古墳墳丘縦断面模式図	67
第52図	二子塚古墳と今城塚古墳の比較	68
第53図	山城地方主要古墳分布図	74
第54図	山城地方主要古墳編年図（1）	76
第55図	山城地方主要古墳編年図（2）	77
第56図	I群埴輪の Rb-Sr 分布図	85
第57図	II群埴輪の Rb-Sr 分布図	85
第58図	III群埴輪の Rb-Sr 分布図	85
第59図	IV群埴輪の Rb-Sr 分布図	85
第60図	V群埴輪の Rb-Sr 分布図	86
第61図	VI・VII群埴輪の Rb-Sr 分布図	86
第62図	VIII群埴輪の Rb-Sr 分布図	86
第63図	IX群埴輪の Rb-Sr 分布図	86
第64図	二子塚古墳出土埴輪の Na 因子	87
第65図	瓦塚古墳出土埴輪の Rb-Sr 分布図	87
第66図	瓦塚古墳出土須恵質埴輪の Rb-Sr 分布図	87
第67図	二子山古墳出土埴輪の Rb-Sr 分布図	88
第68図	庵寺山古墳出土埴輪の Rb-Sr 分布図	88
第69図	周辺の古墳出土埴輪の Na 因子	88

第70図 二子塚古墳葺石の岩石種	94
------------------	----

付 表 目 次

表 1 埴輪新旧対照表	59
表 2 平成3年度円筒埴輪出土比率	69
表 3 出土地区別の各型式の比率	71
表 4 二子塚古墳出土埴輪の分析値	89
表 5 二子塚古墳周辺の古墳出土埴輪分析値	91

参 考 資 料 目 次

一 『殿 暦』	(1) 100
二 『台 記』	(1) 100
三 『山城名勝志』	(1) 100
四 『山城名跡巡行志』	(2) 99
五 『京都府史蹟勝地調査会報告』第四冊	(2) 99
六 『山城国山科郷古図』	(4) 97
七 『地租改正地引絵図一筆丈量図』	(5) 96
八 『明治27年1万分の1仮製図』	(6) 95

図 版 目 次

巻頭図版第1 二子塚古墳と宇治川（南東から）	
巻頭図版第2 (1) 二子塚古墳近景（南西から）	
(2) 二子塚古墳周辺の地籍図（下が北）	
巻頭図版第3 後円部残丘と基礎礫群（62-1トレンチ）	
巻頭図版第4 (1) 62-1・63-1トレンチ全景（南から）	
(2) 63-2トレンチ完掘状況（南から）	
図版第1 二子塚古墳航空写真（昭和57年）	
図版第2 (1) 二子塚古墳遠景（南から）	

- (2) 二子塚古墳遠景 (中央の森が二子塚古墳、北から)
- 図版第 3 (1) 二子塚古墳遠景 (南東から)
(2) 二子塚古墳全景 (中央の森、南西から)
- 図版第 4 (1) 伝二子塚古墳出土鏡 (四乳四獣形鏡)
(2) 大正年間出土の埴輪 (京都大学蔵)
- 図版第 5 (1) 二子塚古墳前方部と調査予定地 (南西から)
(2) 外濠調査前の状況 (北から)
- 図版第 6 (1) 外濠完掘状況 (南から、前方の土手は堤)
(2) 外濠完掘状況 (北から)
- 図版第 7 (1) 二子塚古墳前方部と平成 3 年度外濠調査地 (西から)
(2) 平成 3 年度外濠完掘状況 (南西から)
- 図版第 8 (1) 西側堤の状況 (南から)
(2) 西側堤の状況 (南東から)
- 図版第 9 (1) 南側堤の状況 (北西から)
(2) 南側堤の状況 (西から)
- 図版第 10 (1) 01—1 トレンチの状況 (北から)
(2) 01—2 トレンチの状況 (南から)
- 図版第 11 (1) 01—3 トレンチの状況 (南から)
(2) 01—4 トレンチの状況 (南から)
- 図版第 12 (1) 01—5 トレンチ西半部の状況 (東から)
(2) 01—5 トレンチ西半部の土層 (西から)
- 図版第 13 (1) 01—6 トレンチ西端埴輪出土状況 (東から)
(2) 01—6 トレンチ埴輪出土状況 (東から)
- 図版第 14 (1) 01—7 トレンチの状況 (北から)
(2) 01—8 トレンチの全景 (東から)
- 図版第 15 (1) 01—8 トレンチ断ち割りの状況 (東から)
(2) 01—8 トレンチ断ち割りの状況 (西から)
- 図版第 16 (1) 62—1 トレンチの状況 (南から)
(2) 62—1 トレンチ北端 (後円部北斜面の一部南東から)
- 図版第 17 (1) 62—2 トレンチ全景 (北東から)
(2) 62—2 トレンチ後円部東斜面検出状況 (北東から)
- 図版第 18 (1) 62—2 トレンチ墳丘斜面検出状況

- (2) 62—2 トレンチ葺石残存状況
- 図版第19 (1) 62—2、62—3 トレンチ (南西から)
(2) 62—3 トレンチ全景 (南西から)
- 図版第20 (1) 03—1 トレンチの状況 (西から)
(2) 03—1 トレンチ後円部西斜面検出状況 (西から)
- 図版第21 (1) 03—2 トレンチ墳頂部 (東から)
(2) 03—2 トレンチ盗掘壕の土層 (南東から)
- 図版第22 (1) 03—2 トレンチ墳丘斜面検出状況 (西から)
- 図版第23 (1) 03—2 トレンチ段築検出状況 (北西から)
(2) 03—2 トレンチ作業風景
- 図版第24 (1) 03—3 トレンチ全景 (北から)
(2) 03—3 トレンチ土師器皿出土状態
- 図版第25 (1) 03—4 トレンチ (北から)
(2) 03—4 トレンチ造り出し北斜面検出状況 (北西から)
- 図版第26 (1) 62—4 トレンチ (東から)
(2) 62—5 トレンチ (南から)
- 図版第27 (1) 基礎礫群完掘状況 (西から)
(2) 63—1、62—1 トレンチ完掘状況 (南から)
- 図版第28 (1) 62—1 トレンチ基礎礫群検出状況と後円部残丘 (北から)
(2) 62—1 トレンチ基礎礫群掘方北端部 (西から)
- 図版第29 (1) 63—1 トレンチの基礎礫群 (北から)
(2) 63—1 トレンチの基礎礫群 (南から)
- 図版第30 (1) 63—1 トレンチの基礎礫群 (北から)
(2) 03—1 トレンチ基礎礫群掘方 (北から)
- 図版第31 (1) 63—2 トレンチ表土除去状況 (南から)
(2) 63—2 トレンチ表土除去状況 (北から)
- 図版第32 (1) 63—2 トレンチ攪乱土除去状況 (南から)
(2) 63—2 トレンチ攪乱土除去状況 (北から)
- 図版第33 (1) 63—2 トレンチの基礎礫群と掘方 (南から)
(2) 63—2 トレンチの基礎礫群と掘方 (北東から)
- 図版第34 (1) 63—2 トレンチ掘方北東隅部の基礎礫群の断ち割り (東から)
(2) 63—2 トレンチ掘方北東隅部の基礎礫群の断ち割り (東から)

- 図版第35 (1) 埴輪 1
(2) 埴輪 2
- 図版第36 (1) 埴輪 3
(2) 埴輪 4
- 図版第37 (1) 埴輪 5
(2) 埴輪 6
- 図版第38 (1) 埴輪 7
(2) 埴輪 8
- 図版第39 (1) 埴輪 9
(2) 埴輪 10
- 図版第40 (1) 埴輪 11
(2) 埴輪 12
- 図版第41 (1) 埴輪 13
(2) 埴輪 14
- 図版第42 (1) 埴輪 15
(2) 埴輪 16
- 図版第43 (1) 埴輪 17
(2) 埴輪 18
- 図版第44 出土土器 (須恵器・土師器)
- 図版第45 (1) 縄文土器
(2) 鉄器、石器

I はじめに

五ヶ庄二子塚古墳は、宇治川右岸の微高地上にある前方後円墳で、行政区画では京都府宇治市五ヶ庄46番地に位置する。

この古墳は、平野部にその姿を横たえ、墳丘全長110mをこえる前方後円墳であるため、平安時代の文献にもその名が見え、宇治の別業で遊ぶ当時の貴族達にもその存在を知られていた。しかし大正時代の土取りによって後円部、ことに石室が完全に破壊されるに至り、前方部と周濠の一部が残ったものの、長い間充分な調査も行なわれないうまま放置された状態であった。

昭和60年度、古墳の堤の南西部において住宅建設の計画があり、宇治市教育委員会では古墳の南に広がる寺界道遺跡として調査を行ったところ、古墳の2番目の濠、外濠を検出し、二子塚古墳が二重周濠を持つ古墳であることを知るに至ったのである。

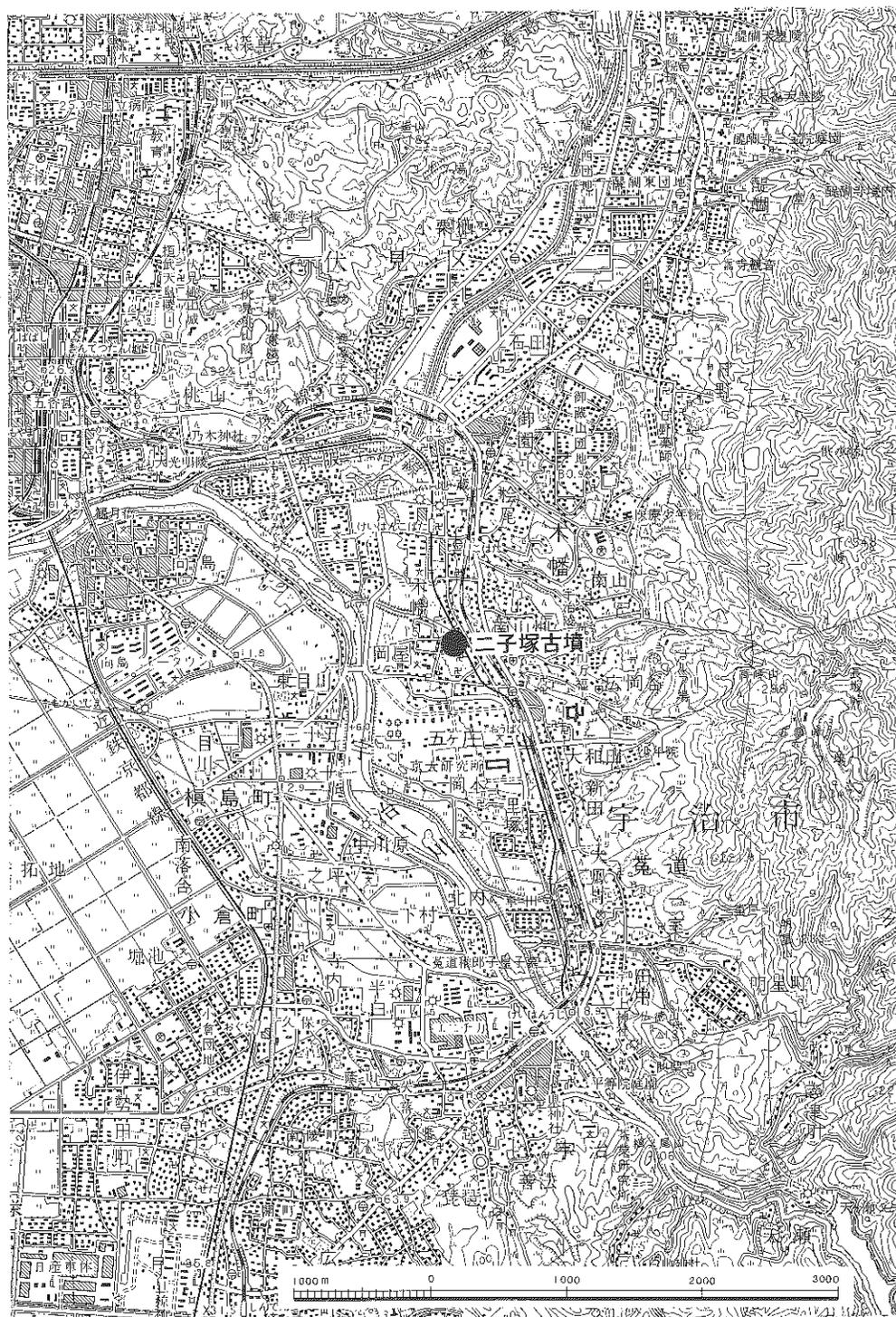
ここにおいて、古墳時代研究者の間でも二子塚古墳の再評価を行う動きが出てき、また宇治市教育委員会でも周辺の開発が進む中、早急に二子塚古墳の内容を正確に把握する必要性が生じてきた。そこで宇治市教育委員会では、昭和61年度より文化庁及び京都府から補助金を受け、二子塚古墳の内容確認調査に着手した。

調査は昭和61年から若干の中断をはさんで平成3年度の4年度にわたり実施した。この間石室の基礎礫群の発見や造り出しの発見など、多くの成果を得ることができた。しかしその反面、大部分が小規模のトレンチ調査であるため、不十分な点が多々あることを否定できない。

なお現地調査から本書作成に至る間、下記の方々から御指導と御協力をいただいた。御芳名を記して謝意を表す。

京都府教育委員会、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、京都府立山城郷土資料館、萬福寺文華殿、宇治市歴史資料館、西方寺、岡屋水利組合、岡屋連合町内会

小林行雄（京都大学名誉教授）、都出比呂志（大阪大学教授）、白石太郎（国立歴史民俗博物館教授）、和田晴吾（立命館大学教授）、鈴木忠司（京都文化博物館）、堤圭三郎（京都府教育委員会）、平良泰久・奥村清一郎・中川和哉（京都府埋蔵文化財調査研究センター）、飯田武雄、竹中宏、河村信雄、太田勇、関健司、岸村栄、安本邦三、小山一義、片山哲夫、藤原了孝〔順不同、敬称略〕。



第1図 二子塚古墳位置図

Ⅱ 位置と環境

(地理的環境)

琵琶湖を發して南流する瀬田川は、滋賀県と京都府の境で宇治川と名を変え、田原川との合流点付近で流れを北西に変える。北西に流れを変えた宇治川は、さらに山あいの狭い谷を流れ、突然宇治において京都盆地の広い平野部に流れ出る。現在宇治川はさらに北西に流れをとり、山科川との合流点付近で今度は南西に方向を変え、京都市淀付近で木津川・桂川の流れを合わせて淀川となる。

二子塚古墳の存在する宇治市五ヶ庄は、北西流する宇治川の右岸に位置する。醍醐山地中の五雲峰から西にのびる丘陵と沖積地との変換点になっており、宇治川の一支流である弥陀次郎川などによって形成された扇状地性の微高地となっている。このため、現在の古墳周辺の土地利用は、茶畑などの畑地が多く、水田は少ない。近年はこれらの畑地も徐々に宅地化が進んでおり、外濠部分では大部分が宅地となっている。

古墳からの景観は、北・西・南の三方に向かって広がっている。特に古墳の西側は、宇治川及び旧巨椋池干拓地で、古墳のすぐ西側には巨椋池の中心的な津であった岡屋津推定地がある。おそらく巨椋池を淀から岡屋方面にのぼる舟にとっては、古墳は絶好の目印ともなり得たであろう。

(歴史的環境)

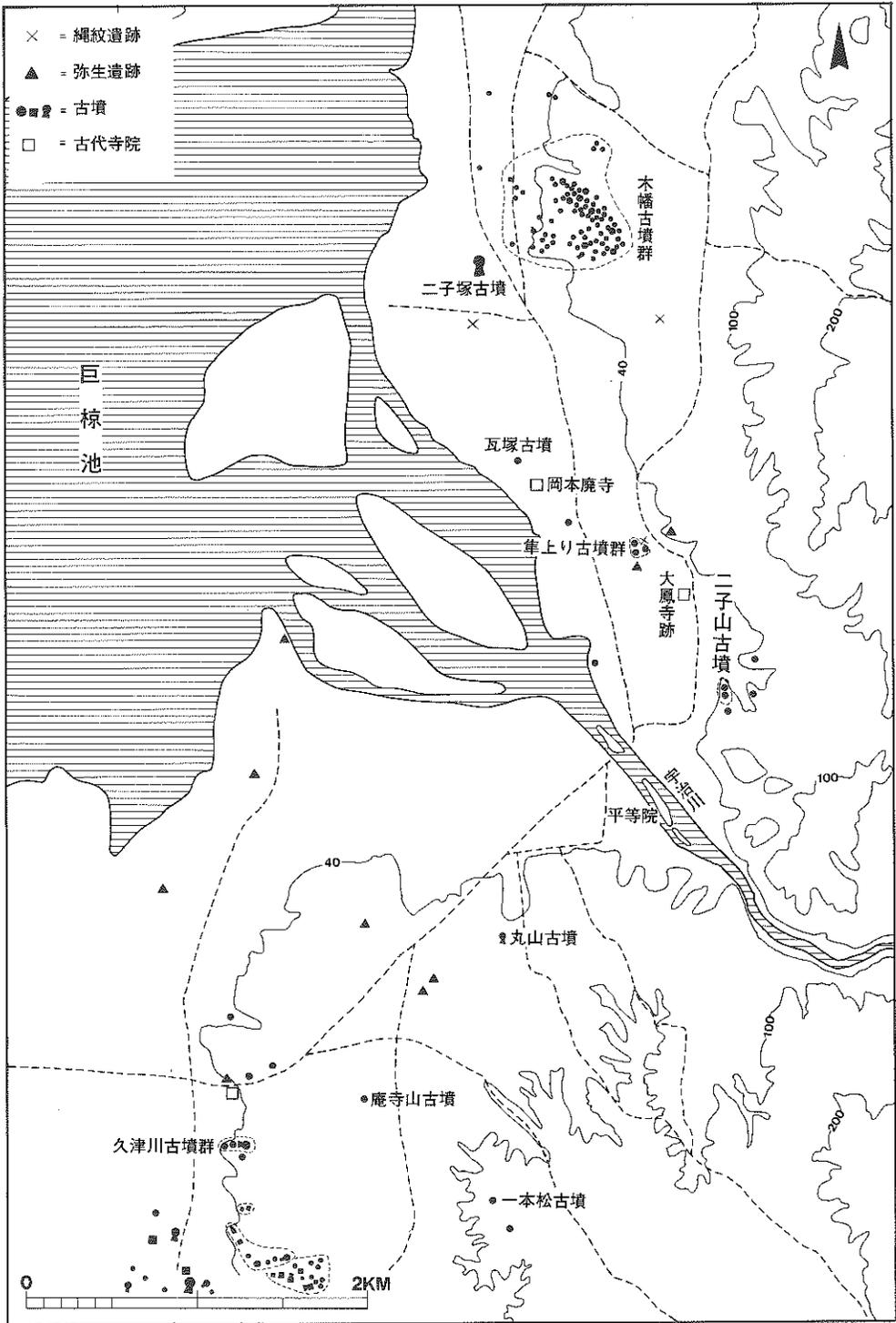
古墳のある五ヶ庄周辺は、宇治の中でも最も早くから人々の住んでいた地域である。宇治の先土器時代については、これまでまったく知られていなかったが、平成3年度の調査で古墳の盛土中から黒曜石製のナイフ形石器が発見された。おそらく古墳周辺に先土器時代の遺跡があるものと思われ、これが市域で最古の先人の足跡である。

縄文時代では、菟道隼上りにおいて草創期と考えられる石槍と早期押形文土器片が出土し^(註1)ている。その他古墳の下層から後期の土器片が、古墳の南にある寺界道遺跡からは晩期の貯蔵穴が発見されており、古墳周辺での縄文時代遺跡の発見が多い。^(註2)

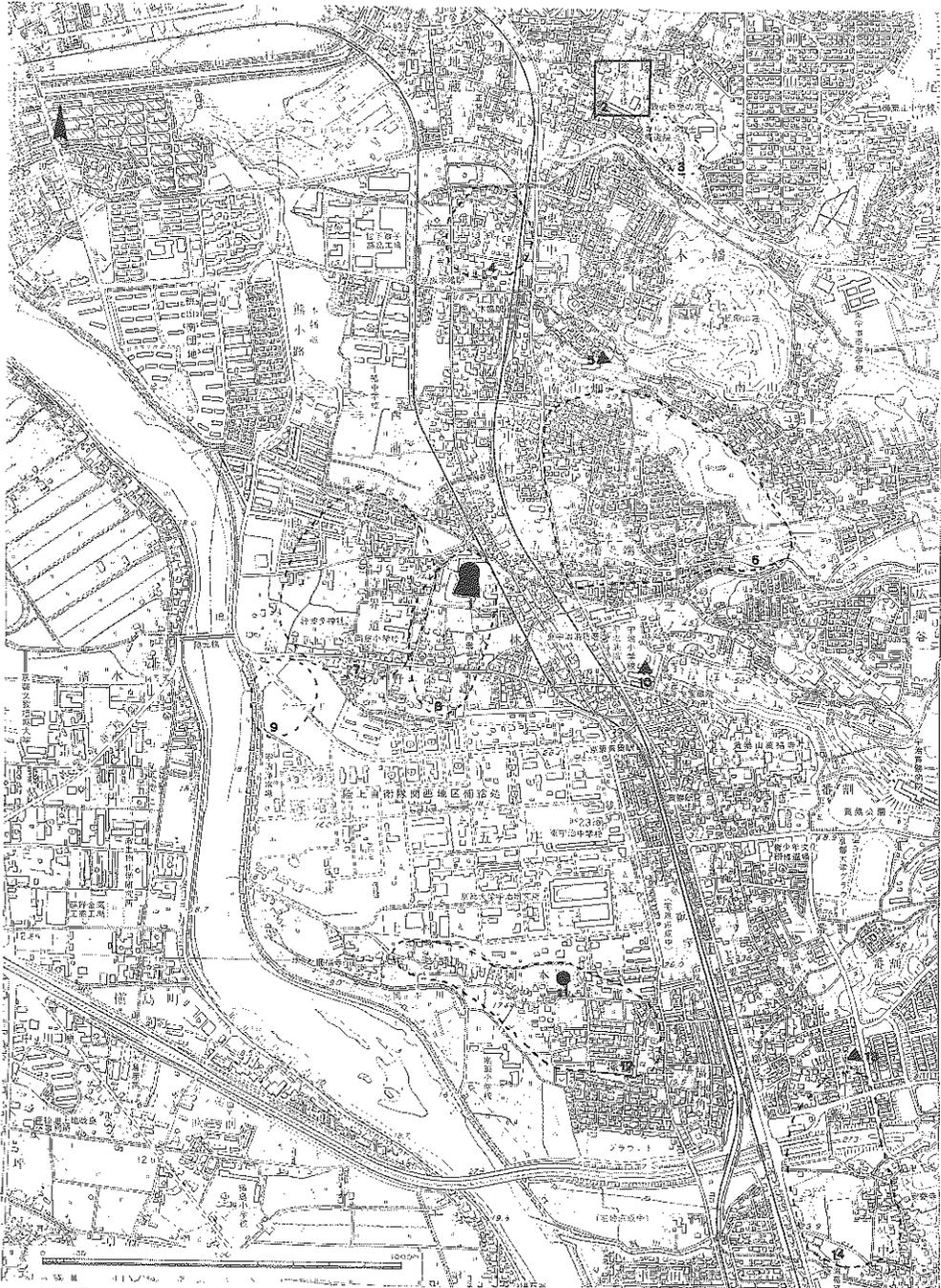
弥生時代においても現在のところ遺跡の発見は少ない。具体的な内容がわかっているのは古墳の南東約2kmにある羽戸山遺跡で、^(註3)堅穴住居・土壙墓・祭祀跡などが発見されている。羽戸山遺跡は後期の高地性集落で、この母村的集落が低地において今後発見されるものと思われる。

古墳時代では、前期古墳は現在のところ宇治市域では確認されていない。中期では宇治川谷口部の丘陵上にある二子山古墳と、古墳の南約1kmのところにある瓦塚古墳が代表的な古^(註4)^(註5)

II 位置と環境



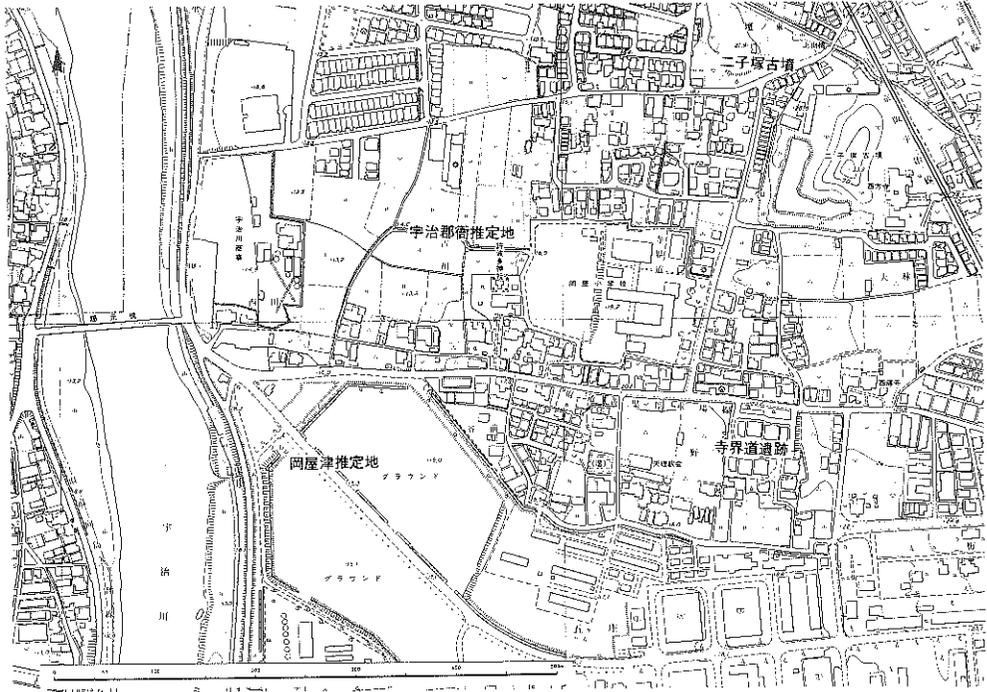
第2図 古代の地形と主要遺跡



- | | | | |
|-----------|------------|----------------|------------|
| 1. 二子塚古墳 | 5. 北山畑瓦窯跡 | 9. 岡屋津推定地 | 13. 隼上り瓦窯跡 |
| 2. 浄妙寺跡 | 6. 木幡古墳群 | 10. 芝ノ東窯跡 | 14. 西隼上り遺跡 |
| 3. 金草原遺跡 | 7. 宇治郡衙推定地 | 11. 瓦塚古墳 | |
| 4. 木幡神社遺跡 | 8. 寺界道遺跡 | 12. 岡本遺跡・岡本廃寺跡 | |

第3図 周辺の主要遺跡分布図

II 位置と環境



第4図 周辺地形図

墳である。二子山古墳は円墳と方墳からなり、いずれの古墳からも鏡・短甲など大量の副葬品が出土した。築造時期は円墳である北墳が5世紀前半、方墳の南墳が5世紀後半である。瓦塚古墳は、二子山南墳とほぼ同時期に築造された円墳で、中心主体の礫層からは玉杖形金銅製品や馬具などが出土している。この二子山古墳が築造された時期は、久津川車塚古墳を中心とする城陽市の平川古墳群が営まれた時期でもある。また二子山古墳など中期を代表する古墳が、菟道などの宇治川右岸の南部を中心とした地域に分布することに注意したい。

平川古墳群における大型古墳の築造が終焉を迎え、それに変わって築造されるのが本書で報告する二子塚古墳である。また二子塚古墳の成立を契機に、古墳の東側丘陵では総数120基に及ぶ木幡古墳群が造墓活動を始める。つまり古墳の分布が宇治川右岸の北部地域にその中心を移してくるのである。しかし大型古墳の造営は二子塚古墳のみであり、その後は小型墳のみが築造されることとなる。

大和において寺院の建立が初まった頃、古墳の南東約2kmの地点では飛鳥豊浦寺の創建瓦窯である隼上り瓦窯が営まれる。そしてそれから約半世紀後には宇治でも寺院が建立され、大鳳寺や岡本廃寺が創建される。古墳の周辺では、豊臣秀吉の築堤まで巨椋池水運の中心的津である岡屋津があり、津と古墳の間には宇治郡衙があったものと考えられている。これらの遺構はまだ確認されていないが、古墳周辺は交通の要衝として機能していたのである。

Ⅲ 過去の調査

(文献における二子塚古墳)

二子塚古墳は、古くは平安時代の文献にその名を留めている。藤原忠実の日記『殿暦』の康和5年(1103)7月24日の条では、忠実が奈良に下向した際に『二子墓』のところで車軸が折れたという記事が書かれている。藤原頼長の日記『台記』では、久安6年(1150)9月26日の条に、未明に西殿をたち京都へ帰る際に、『二子陵』のあたりで夜明けをむかえたことが書かれている。前者では、車軸を折ったために宇治橋まで行くのに手間取ったことが書かれており、また後者では「未だ櫃川(山科川)に至らず」と書かれていることから、『二子墓』・『二子陵』が二子塚古墳をさすものとして間違いないものと思われる。

また、永久3年(1115)に編まれた『俊頼髓脳連歌』では、二子塚古墳を詠んだ歌があり、そこには「ふたこつか」と表記されている。

このように、平安時代末期においてはこの古墳の存在が当時の人々によく知られていたことがわかり、さらに「陵」という言葉を使用していることから、この古墳が皇族に匹敵する人物の墓であるという認識があったことがうかがわれる。また現在使用している二子塚の名称が平安時代からすでにあつたことがわかる。

近世にはいると、初期の頃に作られたと考えられている陽明文庫蔵の『五ヶ庄絵図』に二子塚古墳と考えられる記載がある。この絵図には大和街道の西に「丸山」と書かれた部分があり、これが二子塚古墳をあらわしているものと思われる。この絵図で注目されるのは、二子塚古墳の南側に山川という川が流れており、現在古墳の北側を流れる弥陀次郎川が近世初期の段階では古墳の南を流れており、隠元橋付近で宇治川と合流していたことがわかる。これについては、17世紀後期に作成された萬福寺蔵の『萬福寺寺領並びに伽藍絵図』でも読みとることができる。

(明治の地籍図)

宇治市には明治時代に作成された地籍図が残されており、二子塚古墳周辺についても数点の地籍図が残されている。

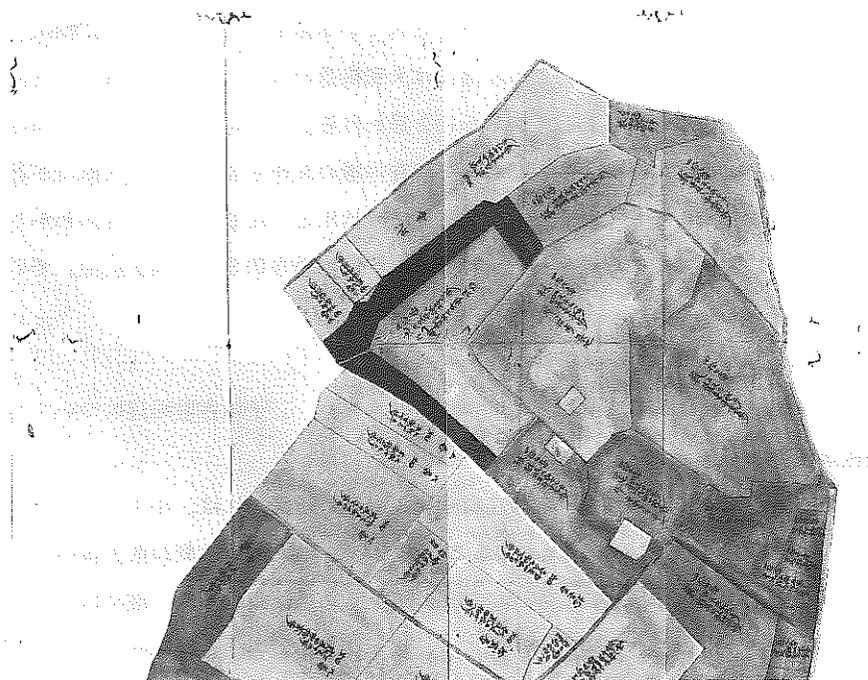
明治6年(1873)に作成された『五ヶ庄村壬申地券地引絵図』には、小字名や地割りが記されており、当時の二子塚古墳の状況を知ることができる。墳丘部分は概ね前方後円形になっており、周濠は現状とはほぼ同様にし字形に描かれている。周濠の北・西・南にはこれを囲むように堤が表現されている。周濠の池の北には、堤をはさんで周濠とはほぼ同じ幅の地割りが続き、周濠の痕跡を読み取ることができる。また周濠の西と南には細長い地割りが見られ、

Ⅲ 過去の調査

外濠の痕跡を示しているものと思われる。

この『五ヶ庄村壬申地券地引絵図』で注目されるのは、ここに記されている小字名が3年後の明治9年に作成された地籍図とは異っている点である。明治9年の地籍図では、ほぼ現在の小字名と同様であるが、『地引絵図』では一筆ごとに小字名が書かれ現在には残っていない小字名を知ることができる。二子塚古墳の場合、墳丘部分は「ヤシキ」、周濠部分は書かれておらずその西と南に「段ノ下」という小字名が書かれている。墳丘部分の「ヤシキ」については、前方部の東側に西方寺があることから付けられたものと思われるが、「段ノ下」は、古墳を「ダンノ山」、周濠を「ダンノ池」と俗称することからそれに付随する外濠の名残りとも考えられる。

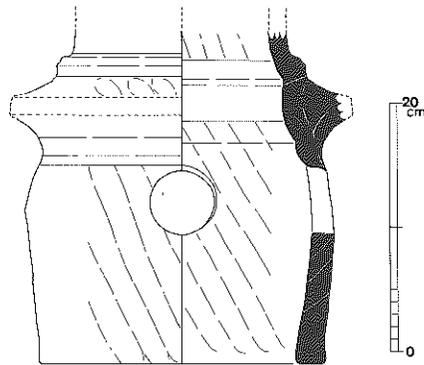
また、明治9年(1876)に作成された『地租改正地引絵図一筆丈量図』は、地籍図を作成する際の基本測量図であり、600分の1のきわめて正確な測量図である。これによると墳丘部分の筆はほぼ前方後円形であるが、左右対称ではなく西側のくびれ部が南にずれた状態で描かれている。このずれは造り出しの痕跡と見ることができるかもしれない。この段階では周濠も現状とほぼ同様に南西部を残して埋没している状態であるため、この測量図が正確な古墳の規模を伝えるものではないが、試みに計測してみると全長約99~100m、後円部径約50mとなる。



第5図 二子塚古墳周辺地籍図(右下が北)

(大正年間の後円部破壊)

明治年間まで周濠が埋没した以外は比較的良好に遺存してきた二子塚古墳であったが、大正3・4年に京阪宇治線の建設に伴い後円部が土取りによって破壊され、大きくその形状を損なうこととなった。この破壊の報に接し、大正4年5月に現地におもむいた梅原末治はその状況を次のように報告している。^(註6)「(後円部は) 既ニ土砂採掘ノ為ニ其ノ大半ヲ失ヒ、僅ニ西半部ノ切斷面ヲ見得ルニ過ギザリシガ、(中略) 上部ニ大ナル凹所ヲ存シ、



第6図 大正年間出土の埴輪 (京都大学蔵)

マタ凹所ノ下方ニ當リテ稍深位ニ大石三四ノ埋没シテ墳ノ主軸ノ一部タルヲ思ハシメタリ。而シテ此ノ封土の破壊部ニハ埴輪圓筒ノ破片散在シ、マタ礫石ノ遺存スルモノ多カリシ」。梅原が現地を調査した時点では、すでに後円部の東半は破壊され、主体部のものと思われる大石が数個残っているにすぎず、また埴輪片と礫が散乱していることから埴輪列と葺石の存在を指摘したのみであった。現在では、梅原が主体部の一部と考えた大石もすでになく、彼の調査後さらに若干の土取りが行なわれたようである。

梅原は、当時の西方寺住職より後円部破壊時の状況の聞き取りを行なっている。それによれば、「後圓中央ノ土砂ノ採取ニ當リ、基底部近ク小石ヲ積ミ重ネタル室アリ、上部を覆フニ大石ヲ以テシ、マタ周圍ニモ大石ヲ置ケル構造」であつたらしく梅原は本墳の主体部が横穴式石室らしいと考えた。ただこの石室は「発見ノ當初既ニ原形ヲ損セルノ形迹」があつたらしく完存ではなかった可能性を指摘している。本墳の埋葬施設が横穴式石室であつたらしいことは、我々の聞き取り調査からも首肯できる。子供時代に二子塚古墳の後円部土取りを実見した飯田武男氏(明治36年生)によれば、後円部を削った時に巨石を組みあげた構造物が発見されたということであり、東西方向に主軸を持つ横穴式石室が、この時露出した可能性はきわめて高い。また、土取り以前では、ここにこのような石室があるのを全く知らなかったという事から推測すれば、石室は開口せず完全に封土中に埋もれていたと考えられる。竹中宏氏(昭和9年生)によれば、この土取りによって出土した巨石を、西方寺本堂裏に運んだのを母の(故)竹中みつゑ(明治28年生)が実見したといい、現在西方寺本堂の裏庭にある巨石(3.3×2.5m)がその石であるという。この石がどの部分に使用された石材かはすでに確証を欠くが、形状から考えて天井石もしくは奥壁に使用されたものではないかと思われる。他の石がその後どのようなようになったかは不明である。

遺物については、石室内より全く出土しなかったといい、わずかにこの時採集された埴輪

Ⅲ 過去の調査

片（第6図）が現在京都大学に残されている。この埴輪は形象埴輪の基部で、その形状から人物埴輪と考えられる。

（伝二子塚古墳出土鏡）

二子塚古墳より出土したと伝えられる鏡の写真が、昭和62年に京都府内を巡回展示した「鏡と古墳」^(註7)展示図録にのっている。この写真は、樋口隆康氏が多年にわたって収集した写真資料の一つで、現物は不明であるという。図録によれば直径12cmの四乳四獣形鏡とあり、鏡周囲の錆化が著しい。仿製鏡である。

（宇治市史編纂に伴う墳丘測量）

昭和46年になって、宇治市史編纂に伴って二子塚古墳の測量調査が実施され、その成果が『宇治市史』第1巻に報告されている。この測量が本墳にとっては初めてのものである。

市史では、この測量成果を次のように報告している。「墳丘の全長は105mにおよび、前方部の幅は80mでかなり広がり、高さも11.5mと比較的高いことが判明した。後円部を図上で復元すると直径60m、残丘の高さは9.5mである。墳丘裾には段築が認められるが、墳丘の



第7図 宇治市史測量図

まわりには、現在の南西角を中心に幅23mの濠が鍵形に残っている。この濠の幅の周滙は前方後円の墳丘をひとまわりしていたと推察される。また周滙の外測には幅14mの堤防がめぐらされている。」この墳丘等の計測値については本報告書において若干の変更を行なっているが、ともかく測量調査によって本墳が100mをこす規模の大型前方後円墳である事を証明できたことは大きな成果であった。

IV 調査経過と調査体制

1 調査経過

(外濠の発見)

昭和60年、二子塚古墳外堤南西コーナーに隣接する地点で宅地開発が計画された。宇治市教育委員会では、古墳の南にひろがる寺界道遺跡として調査を着手した。調査の結果幅約12mの堤と平行する溝を検出し、二子塚古墳が二重周濠を持つ古墳であることが判明した。調査面積は約100㎡で、調査期間は昭和60年9月17日から同年10月7日までである。

(昭和62年度の調査)

昭和60年度の外濠の発見により、二子塚古墳が京都府下で唯一本格的な二重周濠を備えた前方後円墳であることが確認でき、本墳の評価を再検討する必要性が生じてきた。しかしこの段階では、二子塚古墳の本格的な学術調査は行なわれておらず、古墳の規模・内容等は不明であった。また古墳周辺においても開発が増加し、早急にその具体的な内容を把握する必要が生じてきた。そこで宇治市教育委員会では、文化庁から国宝重要文化財等保存整備費補助金を、京都府から文化財緊急保存費補助金を受けた宇治遺跡群発掘調査事業に着手し、その一環として本墳の発掘調査を実施した。初年度にあたる昭和62年度は、大正年間に破壊された後円部の調査を行ない、特に後円部直径の確認を主目的とした。

後円部の調査前の状況は、削平により東側ではほぼ平坦に、西側ではわずかに西に向って傾斜する平坦面となっており、現状からでは後円部の規模を全く窺い知ることのできない状況であった。わずかに後円部の中心と思われる地点に人頭大の河原石を多数散見し、何らかの遺構の存在を予想させた。

後円部には主軸のやや東よりに62-1トレンチ(2m×30m)、東側に62-2トレンチ(2m×25m)、62-3トレンチ(3m×2m)の3本を設定し、人力で掘削を行なった。

62-1トレンチでは、表土下で墳丘盛土を検出するとともに、後円部中央付近で大型の河原石を積み重ねた施設を発見した。この礫群を南に向かって追求した結果、礫群は明らかに後円部残丘の封土中にもぐり込むため、この施設は本墳に伴うものである事が推察された。

62-2トレンチでは、トレンチ西部で後円部斜面を、東半部で周濠を検出した。ここで検出した墳丘斜面を地表下3mまで追求した結果、原位置を保つ葺石の一部を検出した。この斜面を覆う土層には埴輪片・礫・平安時代後期の土師器が含まれていた。周濠は砂により埋没しており、地表下3mでも周濠底を検出できない状況であった。しかしトレンチ壁の崩

IV 調査経過と調査体制

壊の危険性が考えられたため、周濠底までの掘削を途中で断念した。

62—3 トレンチは、京阪宇治線横に設定し、東側周堤の検出を目的とした。しかし地表下 2 m まで掘り進めたが、埋土は砂であり堤の痕跡を確認できなかった。

前方部には墳頂中央に南北に走る大きな凹みがあり、何らかの埋葬施設の痕跡が盗掘壊と考えられた。このため前方部の調査を行う際のデータ収集のため 62—4・62—5 トレンチの 2ヶ所を設定したが、面積が小さかったため墳丘盛土には至らなかった。

(昭和63年度の調査)

昭和63年度の調査は、前年度62—1 トレンチで検出した後円部中央の礫群について、その性格・規模を確認することを主目的として行なった。

調査は、まず62—1 トレンチの西側と東側とに試掘トレンチを設定し、礫群の掘方北辺をそれぞれ東方・西方へと追求することから始めた。西側に設定したトレンチを63—1 トレンチ、東側のものを63—2 トレンチとする。また62—1 トレンチについては、礫群の部分を再び掘りなおした。

63—1 トレンチは、当初南北 2 m、東西 7 m に設定し、表土を除去したところ、盛土を掘り込んだ基礎礫群掘方の北辺と北西コーナーを発見したため南に拡張を行ない、礫群の遺存状況の確認に努めた。礫群は、62—1 トレンチに近い東半部で比較的良好に遺存していたものの、西半部では後世の礫の抜き取りにより遺存状況が悪く、掘方を検出するのみに留まった。トレンチ東端部で掘方北東コーナーを発見したため、この部分でトレンチを南に約 8 m 拡張し、掘方南東コーナーの検出に努めた。このトレンチにおける礫群の遺存状況は62—1 トレンチより悪く、大正年間の後円部破壊時にかなりの量の礫が抜き取られたと考えられる。また、トレンチ中央部付近で後円部削平後に築かれた野井戸を検出した。野井戸については、掘削を行わないこととしたため、最終的には柱状に残ることとなった。調査の終盤で、掘方北東部の礫群を底面まで掘り抜く作業を行ない、底面の構造を確認した。

この調査の結果、礫群はかつて存在した横穴式石室の基礎地業であることが理解され、その規模は東西約 20 m、南北約 10.5 m、深さ約 2 m を測り、その中に礫をぎっしりと充填した堅牢な施設であることが判明した。

また、この年度では、今後の調査に備え、本墳の測量と測量用基準杭の埋設もあわせて実施した。座標は昭和62年度に前方部墳頂東部に埋設したコンクリート杭を基準とし、磁北を南北ラインとした認意座標とした。基準杭の座標は X = 500,000、Y = 500,000 である。本報告においてもこの座標値を使用している。

(平成元年度の調査)

平成元年度は、周辺部調査の一環として、墳丘の西及び南側に「L」字形に遺存する堤に

調査対象を移し、築堤状況を確認することを主目的とした。トレンチは、堤の東西部分に4地点、南北部分に4地点の計8地点を設定した。トレンチ番号は、東西部分を堤に設定した東端のトレンチを01—1とし、南北部分の堤に設定した北端のトレンチを01—8として順に付した。トレンチの幅は1.5mを基本とし、地形に合わせて適宜広げることとした。

掘削開始後、各トレンチで黄褐色系の良質な砂質土ないしは粘質土を検出した。当初の段階では、本層が均一な土質であるため築堤当初の盛土と判断し、本層上面で埴輪等の検出を試みたが、01—5・01—8トレンチにおいて本層中より近世の陶器片や瓦片が出土したため、本層が近世における盛土であり、さらに下層に本来の堤が埋もれていることが判明した。このため各トレンチにおいて断ち割りを行ない、当初の堤の確認作業を行ったが、近世盛土層が厚さ3mにも及ぶトレンチや、また周濠が現在農業用水として利用されているため、掘削深度等に制限があり堤の基底部まで掘削するには至らなかった。

調査の結果、堤は古墳築造当初の築堤と、近世における改修の2時期に分けることができまた各トレンチから埴輪片が出土していることから、堤の上にも埴輪が樹立されていたことが判明した。

(平成3年度の調査)

平成3年度の調査は、後円部と前方部に調査地点を移して調査を行なった。後円部については62—2トレンチで後円部東側斜面を検出しているため、今回は後円部の中心から西の工場敷地境にかけて1.5m×25.5mのトレンチ(03—1トレンチ)を設定し、後円部の直径を確認することとした。前方部では、一般的に後期の大型前方後円墳では、前方部にも横穴式石室を持つ例があることから、前方部の埋葬施設の有無を確認することと、段築の状況を確認することを目的として、墳頂部を横断し、良好に遺存していると思われる前方部西側斜面にかけて、2m×26.5mのトレンチ(03—2トレンチ)を設定した。

03—1トレンチでは、トレンチ東端で基礎礫群の掘方の西辺を確認したため、南へ約1.5m拡張し、掘方の南西コーナーをほぼ確認することができた。トレンチ西半部では、表土直下で黒褐色土の盛土層と、この黒褐色土が砂層の下にもぐり込む地点を確認し、墳丘の西側斜面を検出した。しかし今回も埋土が砂であることと、トレンチ東端において湧水があったため、表土下約1.7m掘削した段階で掘削を中断し、後円部の基底を確認するには至らなかった。

03—2トレンチでは、前方部中央に大きな凹みがあり、これが盗掘墳と考えられたため、この盗掘墳埋土の掘削からはじめた。この盗掘墳は地表から約2mで終わっており、この段階では石材等を検出しなかったため、本墳の前方部には横穴式石室等の埋葬施設は無いものと判断された。この際、盛土がくびれ部に向かって傾斜している状況が看取できたため、03—2トレンチと直交する方向に03—3トレンチを設定、盛土の状況を確認した。

IV 調査経過と調査体制

前方部墳頂肩部周辺では、埴輪列の検出に努めたが、埴輪基底部の出土も少なく今回の調査では確認できなかった。

墳丘斜面では、葺石と段築の検出を目的としたが、トレンチ西端部において埴輪片が集中する地点があり、ここではこぶし大から人頭大の礫も比較的多く出土した。埴輪列等は確認できなかったが、断面観察により平坦面を持つことがわかり、ここが段築テラスとなることが判明した。

この後円部の規模と前方部の段築等の問題のほか、造り出しの有無についての問題点があった。本墳についてはかねてより大阪府高槻市の今城塚古墳との類似が指摘されており、今城塚古墳は造り出しを持つことから本墳にも造り出しがある可能性が考えられた。また昭和46年の測量図では明確でなかったが、昭和63年度の測量の結果、前方部から周濠北側の堤にかけての形状が造り出しの名残りとも見えることから、さらに造り出しが存在する可能性が高まった。そこでくびれ部と思われる地点の西側に1.5m×15mのトレンチを設定した。

(03—4 トレンチ) 調査の結果、トレンチ南部では表土直下で03—1 トレンチと同様に黒褐色土の盛土層を検出したが、トレンチ中ほどで北に向かって落ちる斜面を検出した。埋土の状況は03—1 トレンチと同様であった。このことにより、本墳にも造り出しがあることが判明した。

調査終了間際の7月13日現地説明会を行い、約250名の市民の参加があった。その後遺構面を土のうによって保護し、埋め戻しを行い、7月26日にすべての作業を終了した。

2 調査体制

各年度における調査体制は下記のとおりである。

(昭和62年度)

調査責任者	宇治市教育委員会 教育長	岩本昭造
調査指導者	京都府埋蔵文化財調査研究センター 次長	中谷雅治
	京都府教育庁文化財保護課 記念物係長	金村允人
	京都府立山城郷土資料館 館長補佐	高橋美久二
調査担当者	宇治市教育委員会 社会教育課 主事	杉本宏
	同 嘱託	猿向敏一
調査事務局	同 参事	頼成綾子
	同 社会教育課 課長	小山豊嗣
	同 社会教育課 文化係長	吉水利明
	同 社会教育課 主任	小西弘子

同 社会教育課 主事 梅田正人
 調査補助員……上元庸・内田貴則・杉本和繁・竹村充・元川康司・八瀬正雄・山之
 内志郎

調査整理員……岡本眞由美・志村みどり・山岡万里子

調査作業員……小川七郎・小山光男・沢井勇・高山一夫・稲木富三郎

(昭和63年度)

調査責任者	宇治市教育委員会 教育長	岩本昭造
調査指導者	京都府埋蔵文化財調査研究センター 次長	中谷雅治
	京都府教育庁文化財保護課 記念物係長	金村允人
	京都府立山城郷土資料館 館長補佐	高橋美久二
調査担当者	宇治市教育委員会 社会教育課 主事	杉本宏
	同 嘱託	猿向敏一
調査事務局	同 参事	頼成綾子
	同 社会教育課 課長	小山豊嗣
	同 社会教育課 文化係長	吉水利明
	同 社会教育課 主任	小西弘子
	同 社会教育課 主事	梅田正人

調査補助員……内田貴則

調査整理員……梅田恵子・大前朋恵・岡本眞由美・志村みどり・山岡万里子・堀美津代

調査作業員……稲木富三郎・小川七郎・小山光男・沢井勇・高山一夫

(平成元年度)

調査責任者	宇治市教育委員会 教育長	岩本昭造
調査指導者	京都府埋蔵文化財調査研究センター 次長	中谷雅治
	京都府教育庁文化財保護課 記念物係長	金村允人
	京都府立山城郷土資料館 館長補佐	高橋美久二
調査担当者	宇治市教育委員会 社会教育課 主事	杉本宏
	同 社会教育課 主事	前田暢
調査事務局	同 参事	頼成綾子
	同 社会教育課 課長	池田正彦
	同 社会教育課 文化係長	吉水利明
	同 社会教育課 主任	山本敦子
	同 社会教育課 主事	梅田正人

IV 調査経過と調査体制

調査補助員……内田貴則・岡本勝人・竹村 充・中川 健・堀 泰隆

調査整理員……大前朋恵・志村みどり・長谷川陽子・前田昭代・山岡万里子

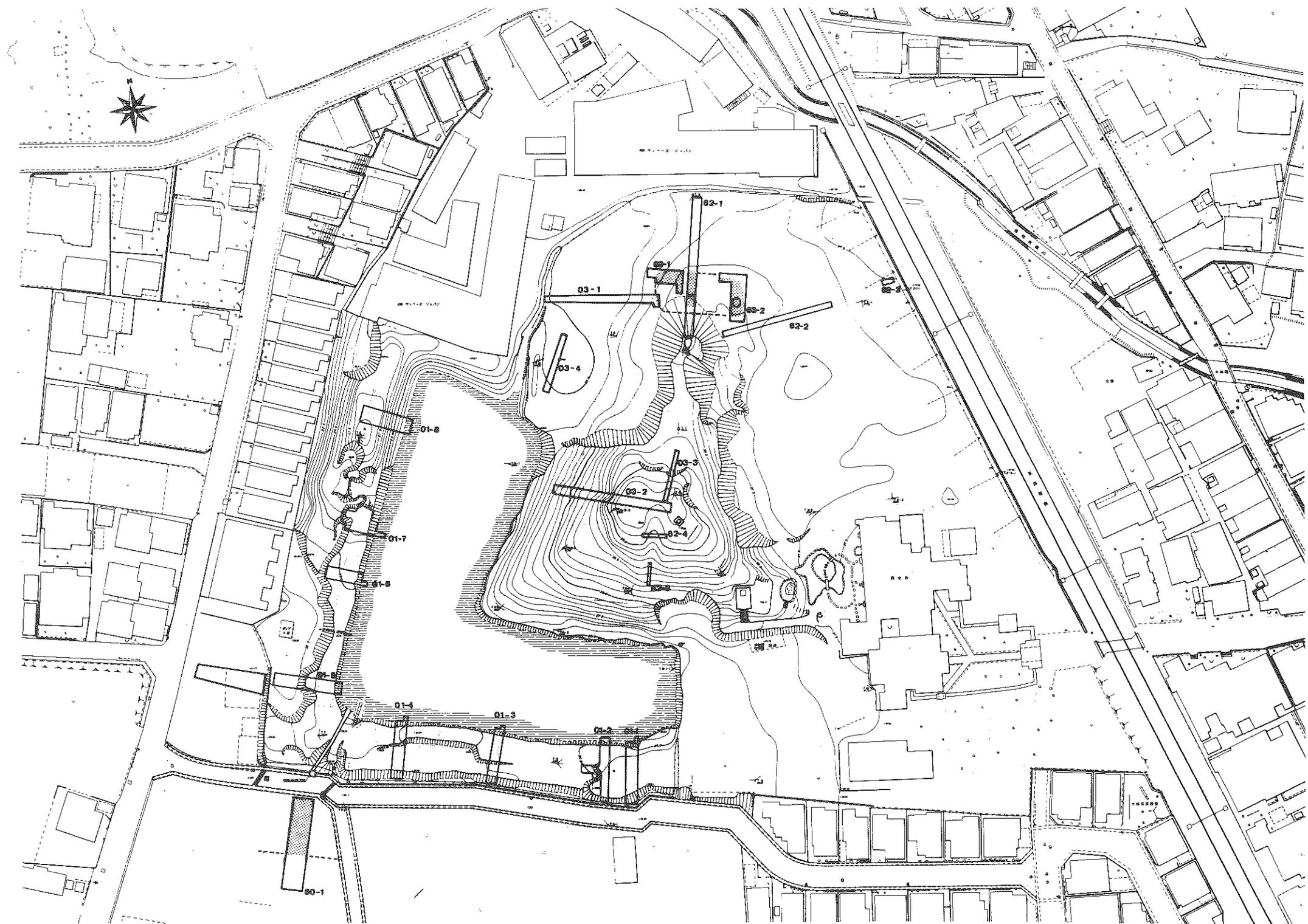
調査作業員……稲木富三郎・小山光男・沢井 勇・高山一夫・村田 弘・松本末政

(平成3年度)

調査責任者	宇治市教育委員会 教育長	岩 本 昭 造
調査指導者	京都府埋蔵文化財調査研究センター 次長	中 谷 雅 治
	京都府教育庁文化財保護課 課長補佐	
	兼記念物係長	杉 原 和 雄
	京都府立山城郷土資料館 館長補佐	高 橋 美久二
調査担当者	宇治市教育委員会 社会教育課 主事	杉 本 宏
	同 社会教育課 主事	荒 川 史
調査事務局	同 参 事	頼 成 綾 子
	同 社会教育課 課長	池 田 正 彦
	同 社会教育課 係長	吉 水 利 明
	同 社会教育課 主任	山 本 敦 子
	同 社会教育課 主事	前 田 暢

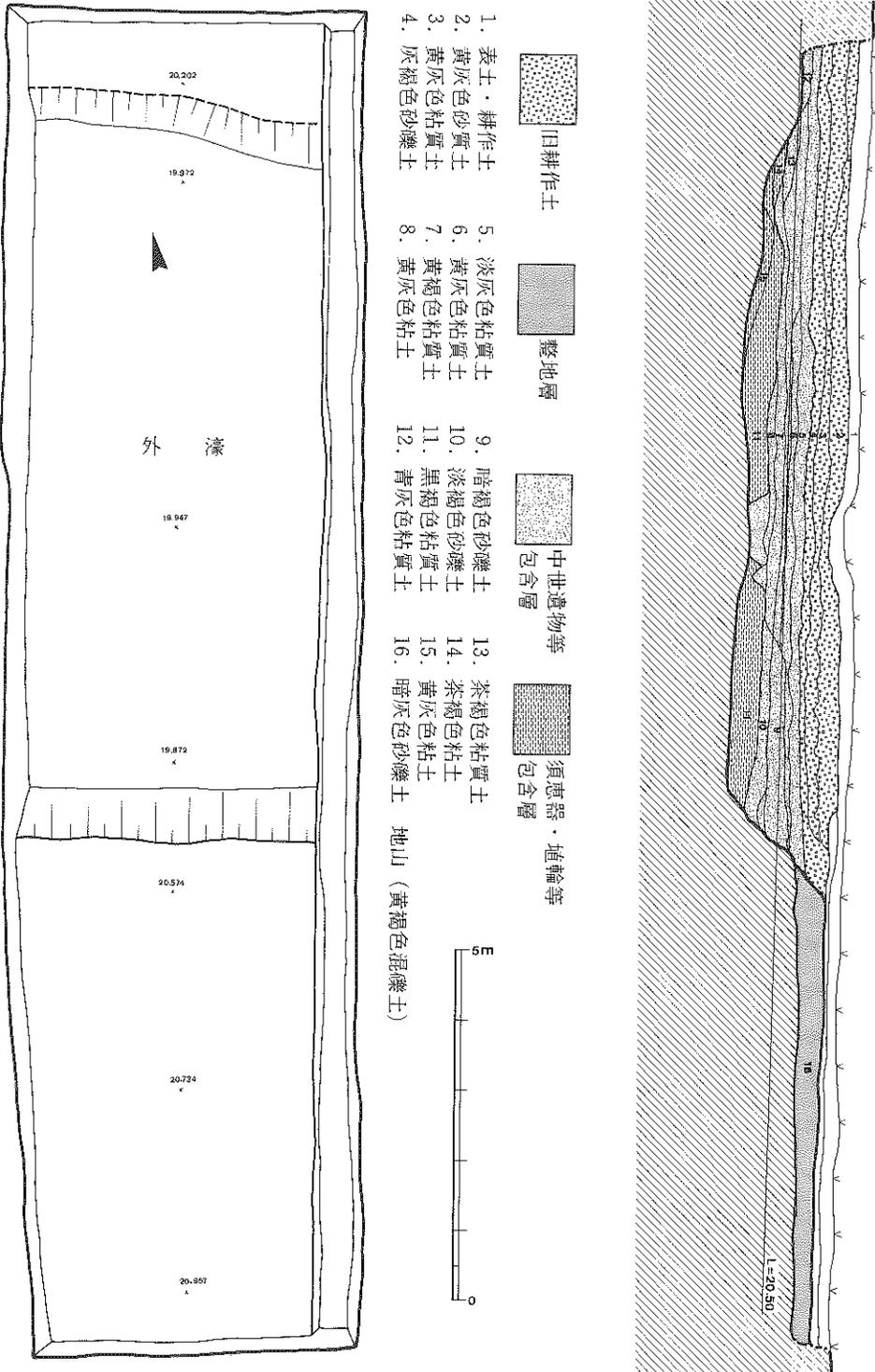
調査補助員……大下裕史・西村恵祥・長谷川陽子・浜中邦弘・福島孝行

調査整理員……今井聡子・今西礼子・山岡万里子

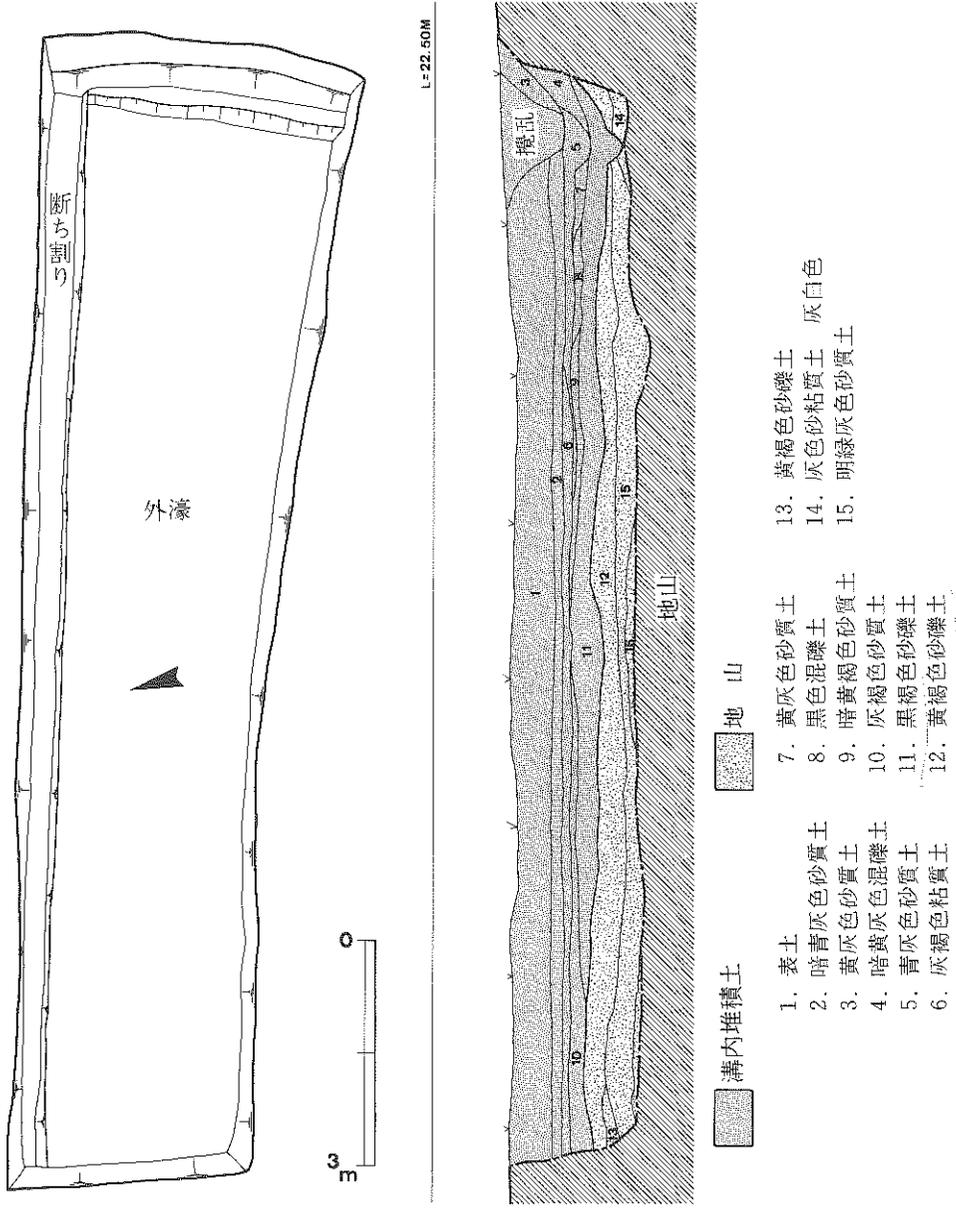


第8図 トレンチ配置図





第9図 昭和60年度外濠トレンチ実測図



第10図 平成3年度外壕トレンチ実測図

V 遺 構

(平成3年度の調査)

平成3年度調査地は、周堤南西コーナーの西側にあたり、昭和60年度調査地の北西約50mの地点である。ここでは4m×15mのトレンチを設定して調査を行なった。この調査では、トレンチ東端で堤の立ち上がりを検出したが、外濠の肩はトレンチ内にはなく、おそらくトレンチ西側の道路下に外濠の外肩が存在するものと思われる。

外濠の埋土は、表土及び現代の盛土、旧耕作土、時期不明の整地層、埴輪等を含む包含層に大別できる。旧耕作土は水田の耕作土と床土で、この水田は現代まで耕作が行なわれていたものである。整地層は遺物を全く含まないため時期は不明であるが、主に砂質の土が何層か水平推積しており、整地層と考えられる。古墳時代の包含層は、トレンチ東端部で埴輪が多量に出土している。これらの埴輪は堤の立ち上がりのラインに平行して集中しており、すべて堤の肩付近に樹立していたものが転落したものであろう。トレンチの中央から西部にかけてはこの層中でも遺物はほとんど出土していない。

平成3年度の調査で判明した外濠は、調査地に隣接する堤が大きく削られているため推測の域を出ないが、堤の肩からの幅は18m以上、濠底における幅は15m以上と見ることができると。またこのトレンチで検出した堤の立ち上がりの位置は、現在遺存している堤の傾斜を延長した地点にあたり、堤の上部においては土取りや盛土による改変を受けてはいるものの、堤の幅等は全体的に築造当時の状況をよく伝えていることが判明した。

(外濠の復元)

昭和60年度と平成3年度に行なわれた外濠の調査は、古墳の南西コーナー付近に集中しており、ここから外濠の全容を推定する事は困難と言わざるをえないが、ここでは2次にわたる調査の成果から復元してみたい。

外濠は基本的には素掘りの溝で、葺石等の施設は認められない。ただ平成3年度調査地において、埴輪と共に直径5cm×10cmの小礫が多く出土している。小礫を外濠葺石に使用する例は城陽市車塚古墳(註8)でもあり、この小礫が葺石として利用されていた可能性も考えられる。しかし葺石とするには量的に少なく、堤盛土中の礫と見るほうが妥当と考えられる。

外濠の幅は、現在の堤の幅が大きく変更を受けていないと考えられることから、堤の外肩から外濠外肩までの幅は25mを前後するものと思われる。そうすると昭和60年度調査地の外濠は2段に掘り込まれていたことになるが、平成3年度調査地ではそのような状況は認められず、部分的に異っていたのかもしれない。濠底は標高20.3m～20.5mで、2段に掘られている部分では19.9m前後である。堤については後述するが、四周の堤の高さがほぼ同じであったとすれば、外濠との比高は約5～5.5m、外濠外肩との比高は1～1.5mであったと考えられる。

2 堤

堤は、調査の結果大きく2時期に分けられることが判明した。すなわち古墳築造に伴う築堤と、近世の堤の改修である。

(古墳築造に伴う築堤)

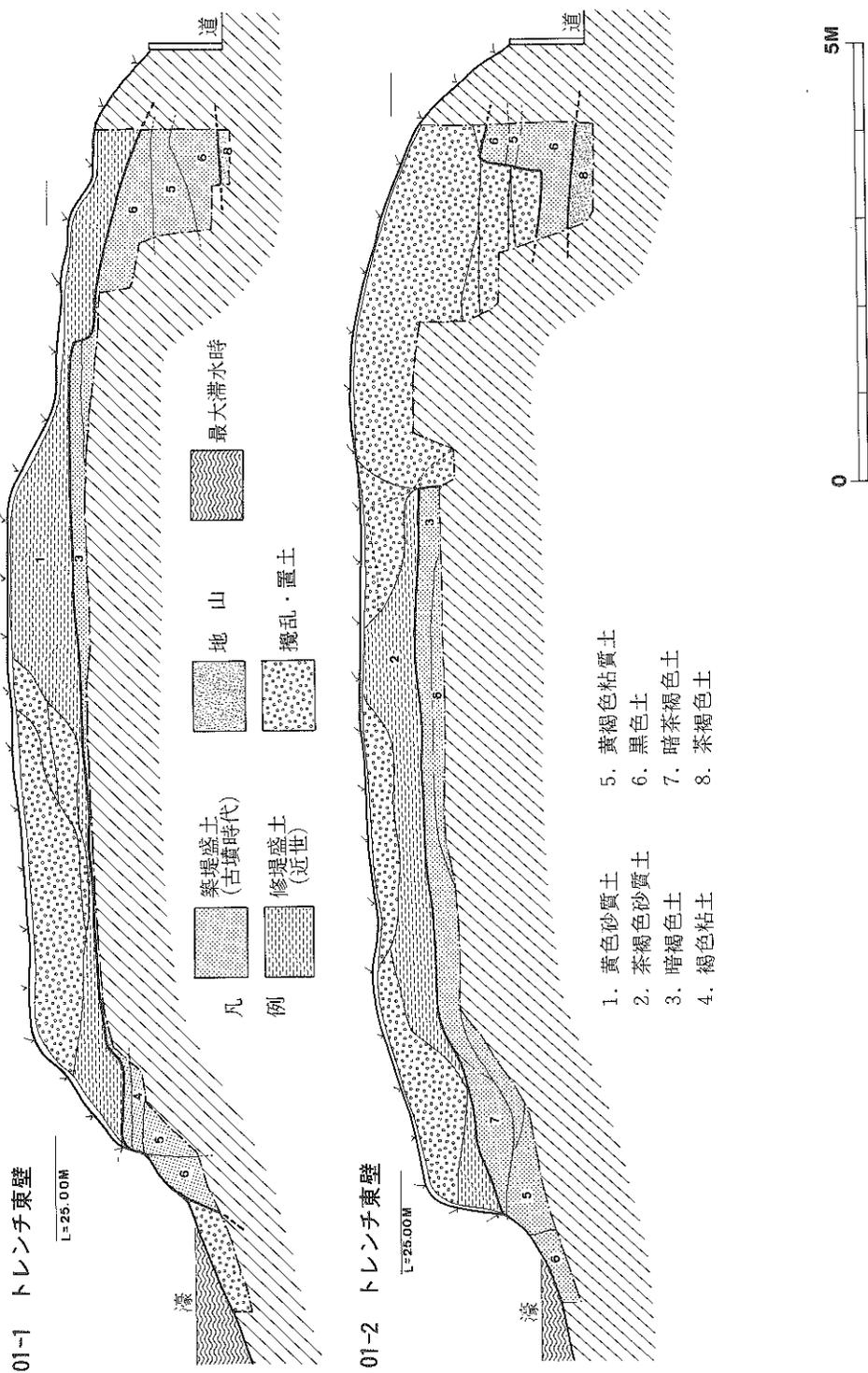
堤は、現状では前方部南側で幅約12m、高さ約2m、西側で幅約18m、高さ4～7mが遺存している。この現在の姿は、近世盛土ないしはそれ以後の土取りによって旧状をとどめておらず、当初の堤は近世盛土下に埋没した形となっている。

堤は、地山上に盛土をして構築されており、地山面の高さは、01-1 トレンチ南端で標高約23m、約50m西の01-4 トレンチ南端で約22m、さらに30m西の01-5 トレンチ西端で約21.5mと西へ向かうほど低くなっている。盛土は、遺物を含まない黒色もしくは暗褐色系の土と黄褐色系粘質土の互層で、厚さは20～50cmで水平方向に積み重ねている。現存する堤の上面の高さは、01-1～4 トレンチで標高約24～24.5mであり、01-5・6 トレンチで23.5～24m、01-7・8 トレンチで約25mとなっている。各トレンチの中で最も旧状を良く留めているのは01-8 トレンチで、ここでの頂部平坦面の標高は25.3mとなる。築造当初、堤上面が水平に造られていたと仮定すれば、01-1～6 トレンチにおいては、近世の盛土以前にすでに削平されていたことになる。

堤の幅については、内濠が現在も灌漑用水として利用されていることから濠底まで掘削できず、内濠側の立ち上がりを確認できていないが、外濠側では平成3年度の外濠調査で立ち上がりを確認できた。外濠の濠底は標高20.5m前後であり、内濠の濠底がこれとほぼ同様のレベルであるとするならば、堤の幅は19～20m程度と考えられる。

また、堤の調査では原位置を保つ埴輪は検出しなかったが、各トレンチにおいて埴輪片が出土し、01-6 トレンチの内濠側斜面では転落した埴輪がまとまって出土していることから、築造当初には堤上面に円筒埴輪を主体とする埴輪が樹立されていたことはまちがいない。また平成3年度の外濠調査地では、盾形埴輪と思われる形象埴輪が出土している。この外濠から出土した埴輪は、前項でも述べたように周堤上部から転落したものと考えられる。このことから、周堤上にも形象埴輪を持ち、周堤上でも何らかの埴輪祭祀を行なったことが判明した。

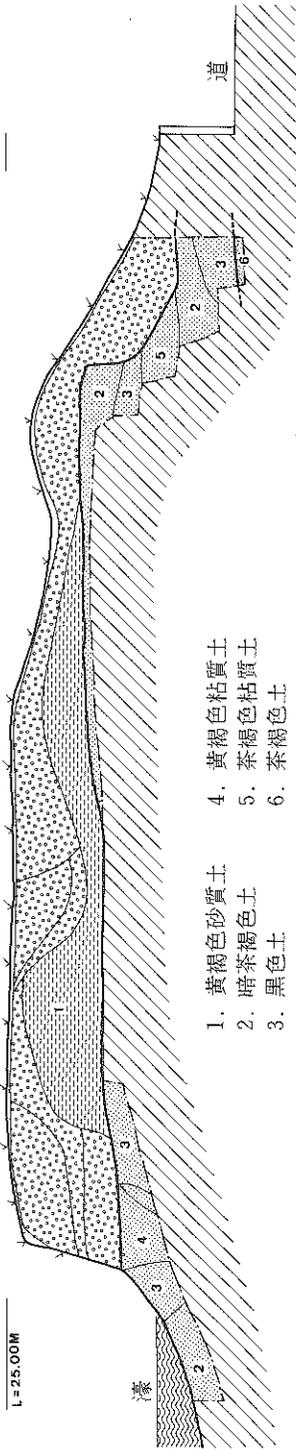
葦石については、濠には現在も水がたたえられており、調査が堤斜面の一部に限定されていたため確認できなかった。また、平成3年度の外濠調査地でも明確な葦石は確認していない。ただ埴輪片と共に直径5cm程度の小礫が多量に出土している。城陽市車塚古墳では、周堤に小礫を使用して葦石としており、外濠で出土した小礫も葦石として使われていた可能性



第11図 01-1・01-2 トレンチ土層図

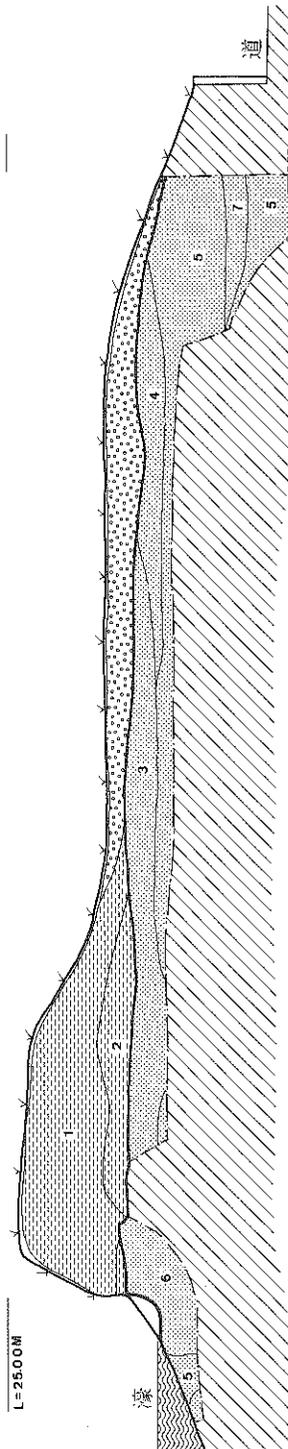
- 1. 黄色砂質土
- 2. 茶褐色砂質土
- 3. 暗褐色土
- 4. 褐色粘土
- 5. 黄褐色粘質土
- 6. 黒色土
- 7. 暗茶褐色土
- 8. 茶褐色土

01-3 トレンチ東壁



- 1. 黄褐色砂質土
- 2. 暗茶褐色土
- 3. 黒色土
- 4. 黄褐色粘質土
- 5. 茶褐色粘質土
- 6. 茶褐色土

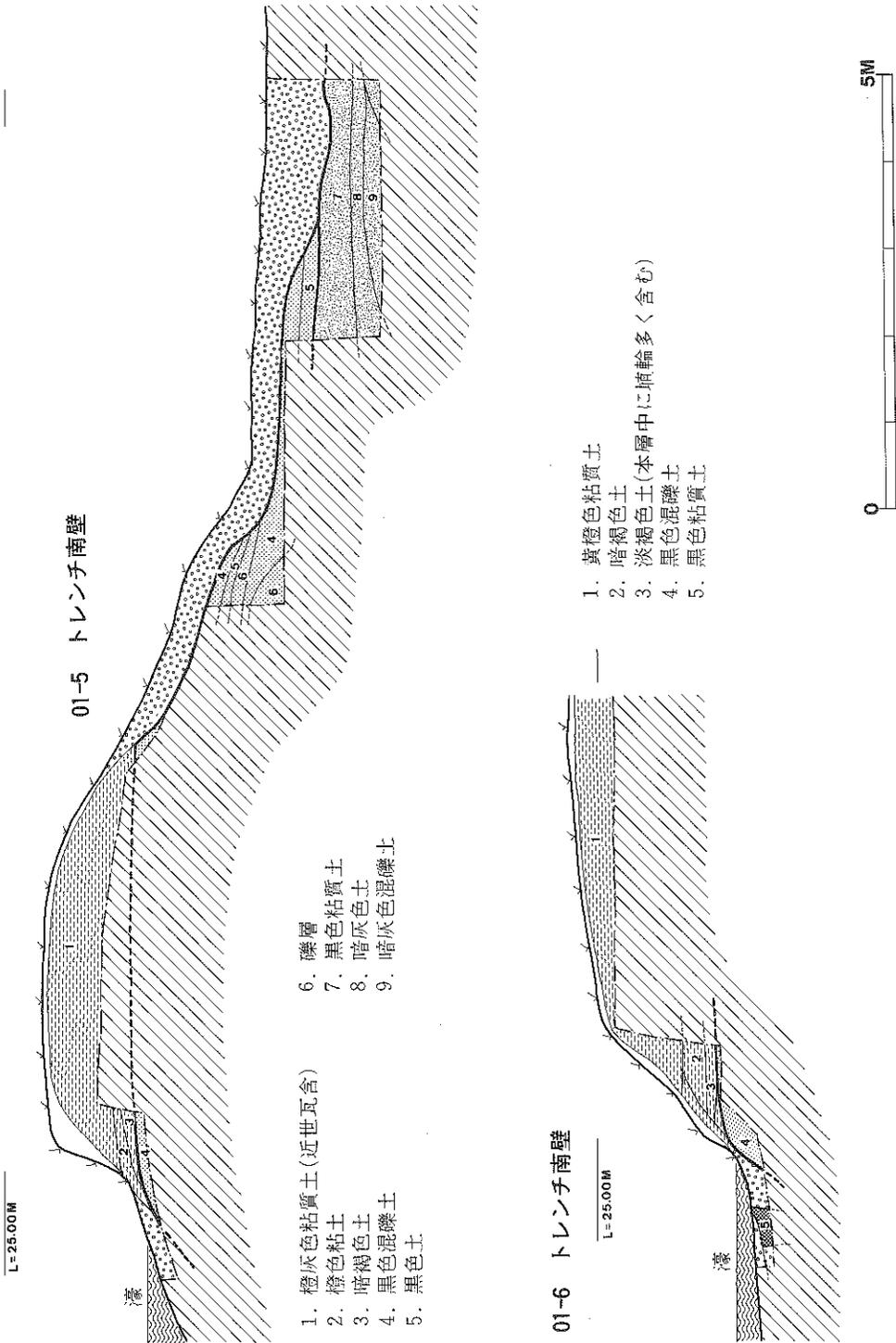
01-4 トレンチ東壁



- 1. 黄褐色粘質土
- 2. 淡黄褐色粘質土
- 3. 褐色混礫土
- 4. 黒色土
- 5. 暗褐色土
- 6. 灰褐色粘質土
- 7. 暗褐色砂礫土
- 8. 茶褐色土



第12図 01-3・01-4 トレンチ土層図

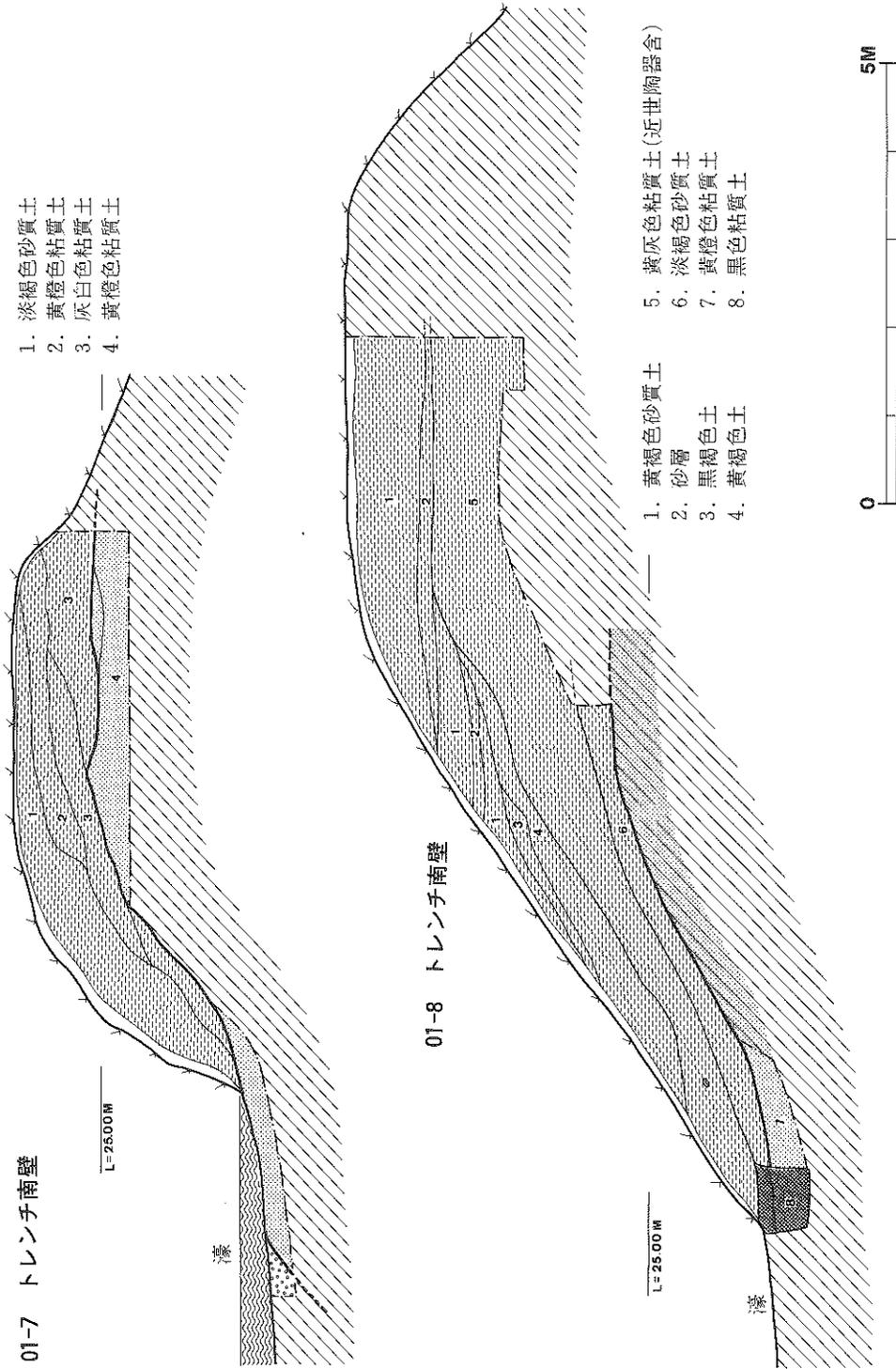


- 6. 礫層
- 7. 黒色粘質土
- 8. 暗褐色土
- 9. 暗灰色混礫土

- 1. 橙灰色粘質土(近世瓦舎)
- 2. 橙色粘土
- 3. 暗褐色土
- 4. 黒色混礫土
- 5. 黒色土

- 1. 黄橙色粘質土
- 2. 暗褐色土
- 3. 淡褐色土(本層中に草輪多く含む)
- 4. 黒色混礫土
- 5. 黒色粘質土

第13図 01-5・01-6トレンチ土層図



第14図 01-7・01-8 トレンチ土層図

V 遺 構

も考えられる。

(近世の修堤)

近世後期になって、この堤上に大規模な盛土が行なわれ、堤が修築されていることが明らかとなった。この盛土は、黄褐色系の良質な砂質土ないし粘質土によって行なわれており、01—8トレンチの状況から、2度にわたって行なわれたことが理解された。近世盛土は、01—1から01—7トレンチでは約1 m、01—8トレンチでは約3 mの厚さを持ち、完全に当初の堤を被覆している。

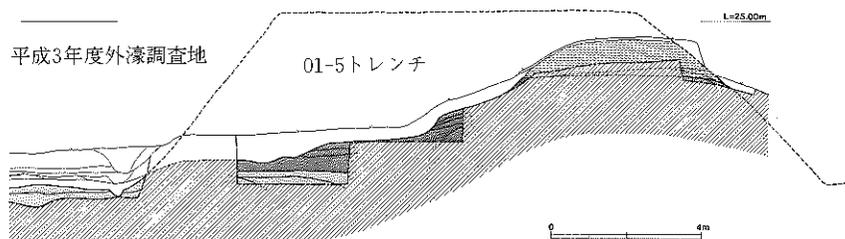
この近世盛土が民家の壁土に適しているため、以前はよくここから土取りをしたといい、また近くの池を埋めるためにもかなりの量の土取りが行なわれ、数十年前と比べると堤はかなり高さを減じたという。近世の盛土がかつてどの高さまで行なわれていたかは、すでに知るよしもないが、その最高点が01—8トレンチ設定部分であることは確かであろう。

(小 結)

以上述べたように、古墳築造時の堤は、現在の堤の1～3 m下に埋没していることが判明した。ただし往時の姿のまま埋没していたのではなく、近世の修堤以前に一部削平されていたらしい。

堤の幅については、濠の調査をしておらず、その基底部の位置が不明であるが、平成3年度の外濠調査で堤の基底部を検出しており、標高は約20 mである。仮に、内濠基底部が外濠基底部とほぼ同じレベルとするならば、01—5トレンチ付近で幅約19 mと復元することができる。また堤の高さについては、築堤当初の堤の上面の標高を、01—8トレンチで検出した25.3 mと仮定すれば、01—5トレンチでは地山面より約4.2 mと推定でき、かなりの量の盛土を必要としたことが推測できる。地盤の高い墳丘東側については、京阪宇治線のあたりで標高約27 mを測るため、同様の堤を復元するならば、削り出しによる築堤が可能であろう。

堤の外表施設については明確にし得なかったが、埴輪列を持ち、また形象埴輪による祭祀が行なわれていたことが判明した。



第15図 堤推定復元図

3 墳 丘

墳丘の調査としては、後円部に3ヶ所、前方部に3ヶ所、造り出しに1ヶ所のトレンチを設定して行なっている。以下後円部、前方部、造り出しそれぞれについて調査の概要を述べていきたい。

(後円部の調査)

後円部では、後円部中央から東に向かって62—2トレンチ、北に向かって62—1トレンチ西に向かって03—1トレンチを設定した。

62—2トレンチ (第17図) 62—2トレンチでは、トレンチのほぼ中央で東側斜面を検出した。その斜面を追ってさらに掘削を行ったところ、厚く堆積した周濠埋土によって墳丘が比較的良好に遺存しており、地表下約2.5mのところでは原位置を保つ葦石を検出した。

トレンチ東半部で確認した周濠埋土は、墳丘斜面に沿って斜めに堆積する墳丘流出土と、その上層に水平堆積する河川堆積層に分けられる。

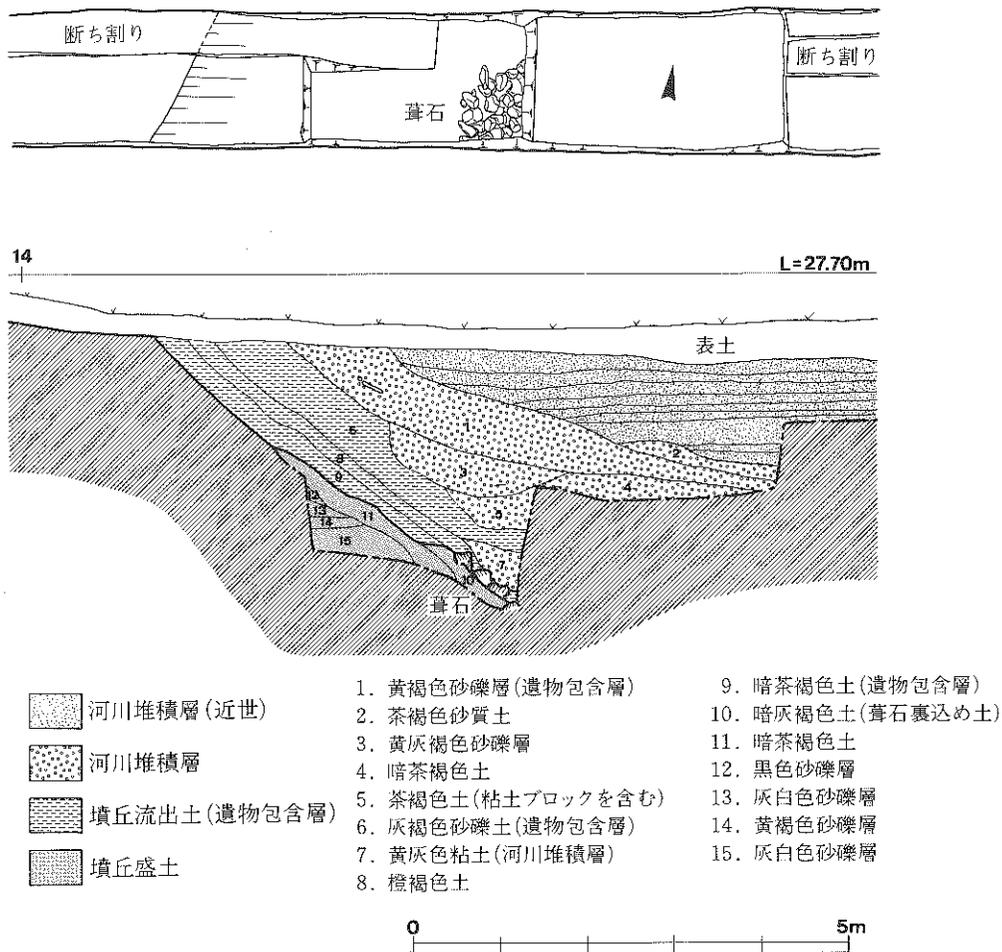
河川堆積層はさらに2層に分けられる。上層は黄灰色系の砂層・砂質土層・粘土層の互層となっている。最も厚いところで約2mを測る。周濠に向かってさらに厚く堆積する近世の遺物包含層である。下層は黄褐色系の砂礫層で、1～5cm程の礫を含む河川堆積層である。

河川堆積層下には墳丘流出土が認められるが、この墳丘流出土も中間に河川堆積によると思われる黄灰色粘土層があることから大きく上下2層に分けることができる。上層は灰褐色砂礫土層である。この層からは埴輪小片・須恵器小片とともに平安時代後期の土師器皿片も出土していることから、上層は平安時代後期以後の墳丘流出による堆積層と考えられる。また、本層からは環状金銅製品が出土している。この環状金銅製品は金環の破片と考えられるもので、古墳の副葬品の可能性が高い。このことから、平安後期から近世までの間に石室内の盗掘もしくは攪乱が行なわれたことが考えられ、本層はその際の崩落土と考えられる。

下層は墳丘を覆う橙褐色土層及び暗茶褐色土層である。橙褐色土層は層厚20cm程度の無遺物層、暗茶褐色土層は埴輪片を含む遺物包含層である。本層は墳丘斜面に遺存する葦石の直上に堆積することから、周濠埋没以前の比較的早い段階に流出した墳丘崩落土と考えられる。なおこのトレンチでは周濠底を検出していないため、同濠が滞水していたかは確認できなかった。

葦石は標高24.5m付近で検出し、検出範囲は東西0.7m、南北約1mである。葦石面は約40度の傾斜を持つ。使用石材は直径20cm前後のチャート質の河原石で、長辺を墳丘にさし込んで小口積みとしている。葦石は直接墳丘盛土に葦かれるのではなく、盛土直上に厚さ約20cmの暗灰褐色土を置き、裏込めとしている。

V 遺 構

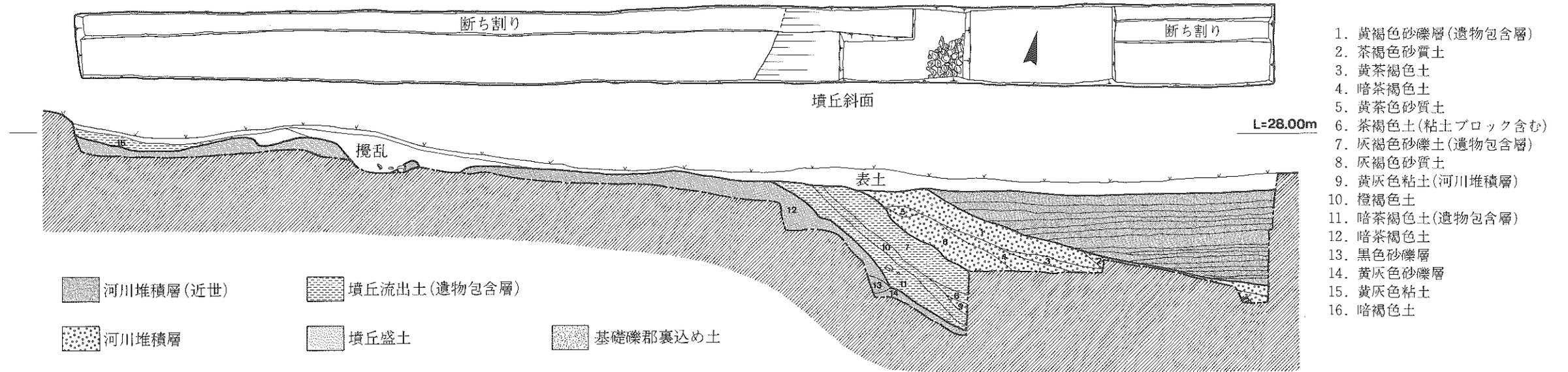


第16図 62-2トレンチ葦石実測図

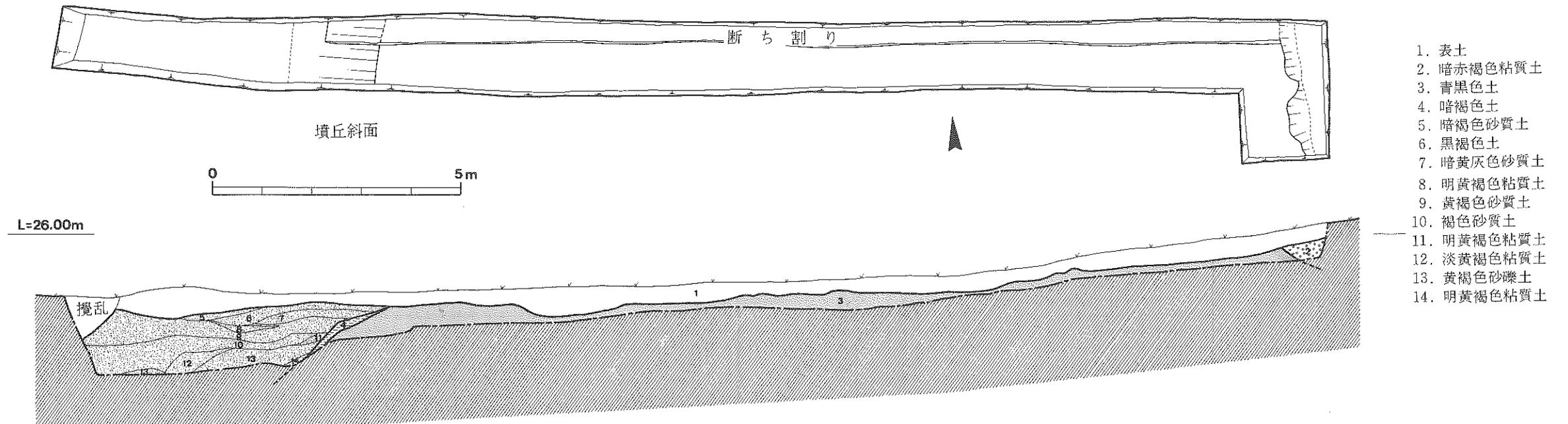
墳丘盛土は、基本的には異なる土を交互に盛ることによって築成されている。これは各トレンチにおいても確認されており、トレンチによって土色の差は認められるものの、ほぼ同様である。61-2トレンチではこのような盛土層の下層に1~3cmの小礫を含む黄褐色系の砂礫層が認められる。この黄褐色系砂礫層は遺物を含まず、ほぼ水平に堆積する。この砂礫層直上に暗茶褐色系の墳丘盛土層が斜めに覆うため、この砂礫層は地山と考えられる。

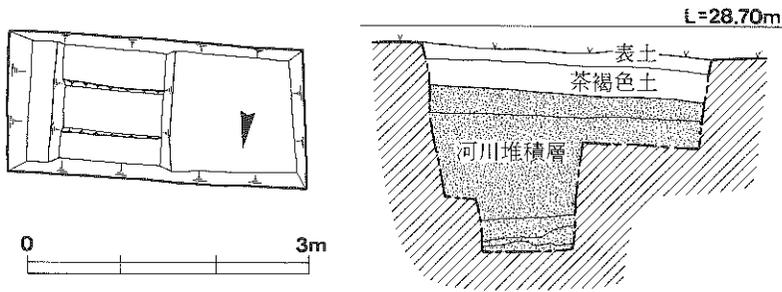
62-3トレンチ (第18図) 62-3トレンチは、堤の検出を目的として設定し、地表下約2.2m、標高約25.7mまで掘削した。しかしこの段階でも黄灰褐色系の河川堆積層が厚く堆積しており、堤の検出には至らなかった。

(1) 62-2トレンチ



(2) 03-1トレンチ





第18図 62—3 トレンチ実測図

62—1 トレンチ (第29図) 62—1 トレンチでは、トレンチ北端で墳丘斜面を検出した。墳丘斜面直上の堆積は大きく2層に分けられる。上層は、厚さ約0.6mで直径2～3cmの礫を含む灰褐色系砂礫層である。近世以降現代までの遺物を含む。下層は、黄褐色系の砂・砂質土・粘土の互層である。遺物は含まない。検出した面積が狭いため明確ではないが、墳丘斜面に沿って厚く堆積しているものと思われる。62—2 トレンチと同様の河川堆積層である。

墳丘斜面は、調査地を越えてさらに北方に下降している。傾斜角は約30度である。葺石等の外表施設は認められない。標高は、最も高所で26.1mを測る。この斜面については、前回の報告では1段目墳丘と報告しているが、後述する基礎礫群掘方で確認した地山の標高などから2段目の墳丘と考えるべきであろう。

03—1 トレンチ (第17図) 基礎礫群掘方の南西コーナーから、古墳西側の工場との地境までのびるトレンチである。ここではトレンチ東端で基礎礫群掘方の南西コーナーを検出し西端では墳丘斜面を検出した。

墳丘斜面の埋土は、河川堆積と墳丘斜面に沿って堆積する墳丘流出土とに分けられる。河川堆積層は、62—2 トレンチ同様大きく2層に分けられる。上層はほぼ水平に堆積する黄褐色系の砂質土・粘質土の互層である。ここからは遺物が出土していないため時期は不明であるが、63—2 トレンチにおける河川堆積層の上層に対応するものと思われる。この層の直上には、水平方向に堆積する黒褐色土や暗褐色土の層が墳丘斜面近くに認められるが、これらの層は後円部削平後に墳丘盛土が流出したものと考えられるため、少なくとも大正期以前の堆積と考えられる。下層は、墳丘斜面に沿うようにわずかに斜めに堆積した黄褐色系の砂礫層と粘質土層である。この層ではわずかに埴輪が出土している。63—2 トレンチの河川堆積層の下層に対応するものと思われる。

墳丘流出は1層のみ認められた。この層は墳丘斜面の下方に向かうにしたがって薄くなっており、河川氾濫等によって削り取られたことが考えられる。この層からは埴輪片が出土している。

V 遺 構

墳丘斜面は、地表下約0.3m、標高約24.6mでその最高所を検出した。ここから約35度の角度で下方に向かう。葺石等の外表施設は認められなかった。墳丘斜面は、斜面の上部、検出面から約0.6mは青黒色土層、その下層は黄灰色粘質土層で構成されている。上層の青黒色土層は、若干の土色の違いは認められるものの、トレンチのほぼ全面にわたって検出している。粘性は弱く、古墳築造段階の旧表土の可能性が考えられる。

掘削は地表下約1.7mまで行ったが、トレンチ西端部分がかつて周濠に弥陀次郎川から水を引き込む導水路にあたっているため湧水があり、トレンチ壁崩壊の危険が考えられたため掘削を断念し、濠底を確認するには至らなかった。

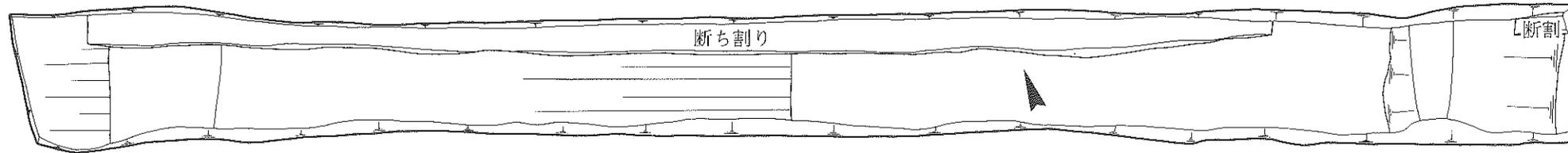
(前方部の調査)

前方部の調査では、前方部の葺石・段築等を確認するために、前方部墳頂平坦面から西側斜面にかけて03—2 トレンチを、盛土の状況を確認するために墳頂平坦面からくびれ部に向かって03—3 トレンチを設定した。このほかに前方部では土層等を確認する予備的なトレンチとして62—4 トレンチ・62—5 トレンチを設定して調査を行なった。

03—2 トレンチ (第19図) 03—2 トレンチは、幅2m、長さ26.5mで、墳頂平坦面のやや東寄りの地点から墳丘西側斜面にかけて設定したトレンチである。このトレンチでは、前方部埋葬施設の有無・埴輪列・葺石・段築の確認を目的として調査を行なった。

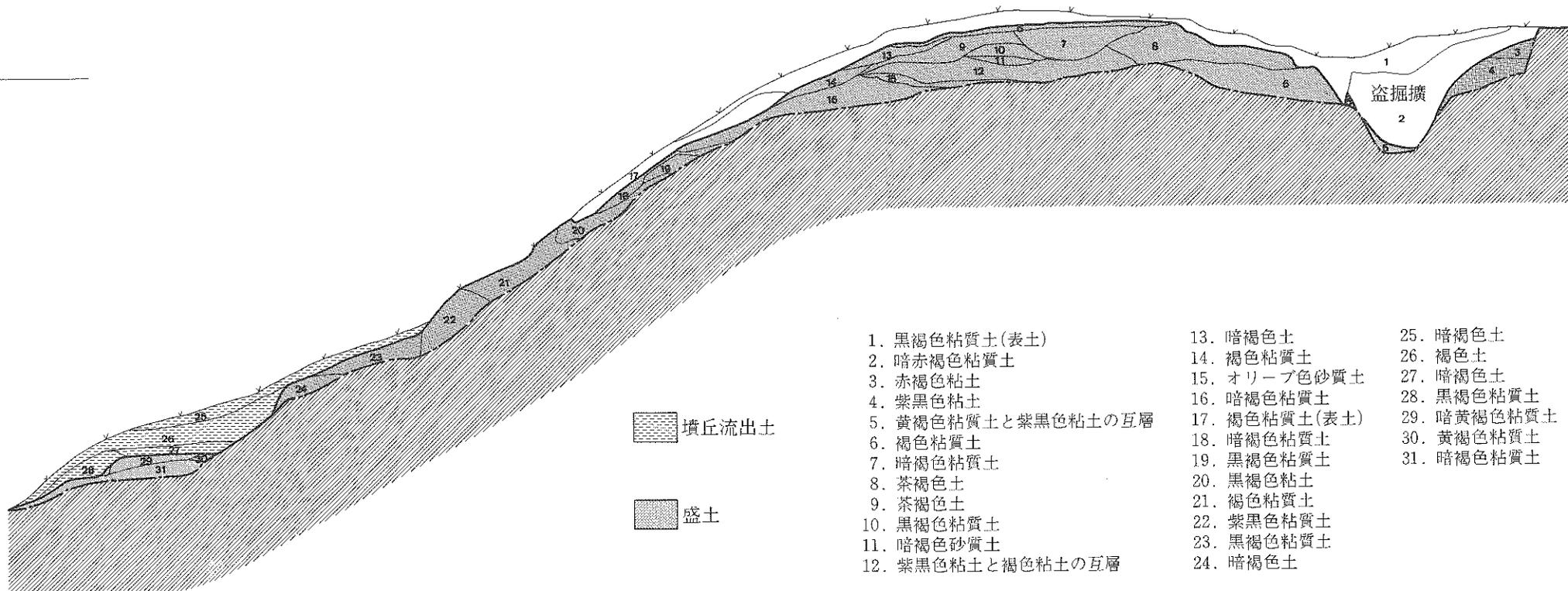
墳頂部では、平坦面のほぼ中央に南北方向に走る凹みがあり、埋葬施設の盗掘窟である可能性が考えられた。この凹みについては62—4・62—5 トレンチを設定して一部掘削を行なったが、トレンチ幅が狭かったため攪乱土を掘り切るには至らなかった。この攪乱土は、地表下約2mでなくなり、墳丘盛土層を検出した。試みに攪乱窟の最下部から、ボーリングステッキによるボーリング調査を行なったが、石材等の検出は見ず、前方部の埋葬施設はないものと判断された。

墳頂平坦面では、5cm～25cmの表土直下で墳丘盛土を検出した。墳丘盛土については、地表下約1.2mまで掘削し、盛土の状況を確認した。盛土は大きく3層に分けることができる。上層は、厚さ約10cmの褐色粘質土層で、下層の盛土層を覆う形で検出した。この層は、03—2 トレンチでは墳丘平坦面の西部で確認したのみであったが、後述する03—3 トレンチにおいても同様の層を確認しており、広範囲で確認できる。この層は墳丘の化粧をした土である可能性が考えられる。中層は、暗褐色粘質土・黒褐色土等を盛った層で、盛土の法則性などは認められない。下層は、墳頂平坦面中央では黄褐色粘質土と紫黒土の互層、平坦面西部ではオリーブ色土となる。黄褐色粘質土と紫黒土の互層は、意識的に異なった土を盛っていることが看取でき、中層の盛土層と区別できる。なお須恵器杯身が下層上面から出土している。



墳丘斜面 テラス 墳丘斜面 墳頂部

0 5m

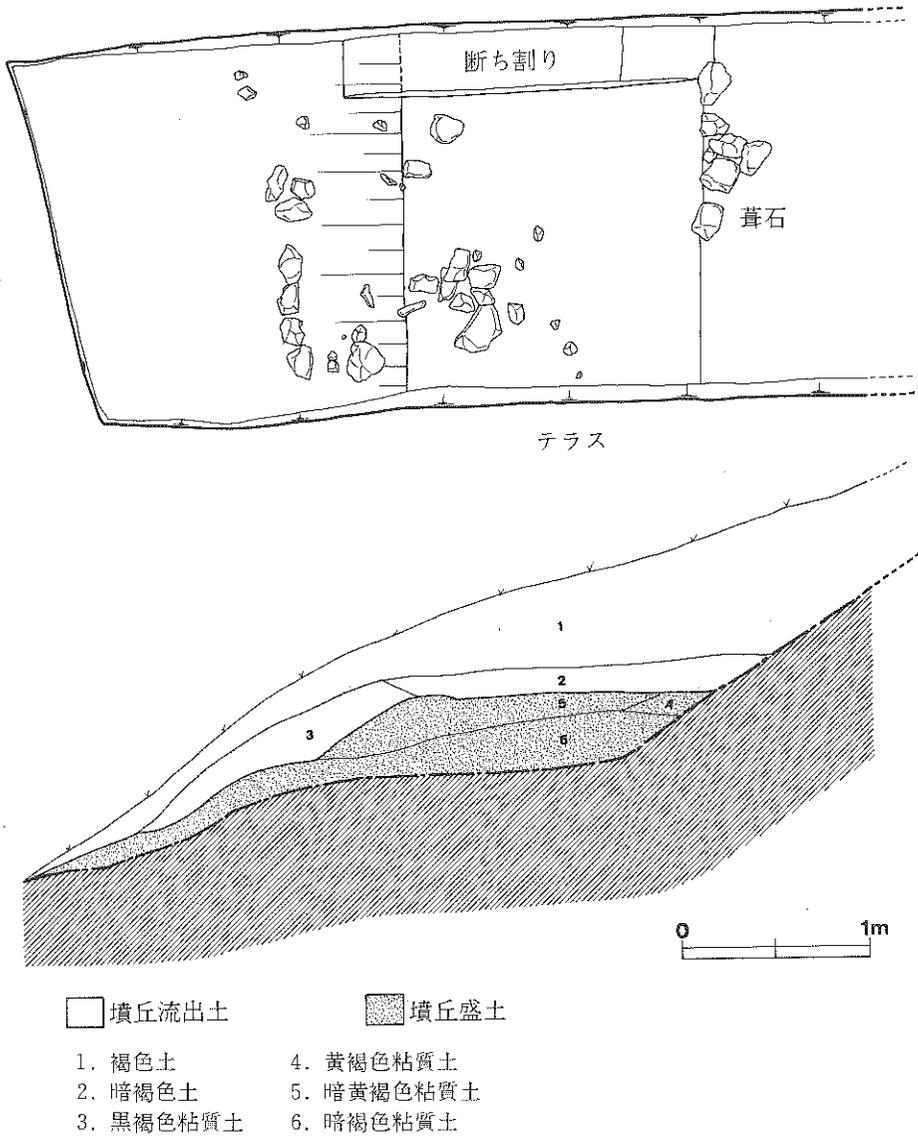


墳丘流出土

盛土

- | | | |
|--------------------|---------------|-------------|
| 1. 黒褐色粘質土(表土) | 13. 暗褐色土 | 25. 暗褐色土 |
| 2. 暗赤褐色粘質土 | 14. 褐色粘質土 | 26. 褐色土 |
| 3. 赤褐色粘土 | 15. オリーブ色砂質土 | 27. 暗褐色土 |
| 4. 紫黒色粘土 | 16. 暗褐色粘質土 | 28. 黒褐色粘質土 |
| 5. 黄褐色粘質土と紫黒色粘土の互層 | 17. 褐色粘質土(表土) | 29. 暗黄褐色粘質土 |
| 6. 褐色粘質土 | 18. 暗褐色粘質土 | 30. 黄褐色粘質土 |
| 7. 暗褐色粘質土 | 19. 黒褐色粘質土 | 31. 暗褐色粘質土 |
| 8. 茶褐色土 | 20. 黒褐色粘土 | |
| 9. 茶褐色土 | 21. 褐色粘質土 | |
| 10. 黒褐色粘質土 | 22. 紫黒色粘質土 | |
| 11. 暗褐色砂質土 | 23. 黒褐色粘質土 | |
| 12. 紫黒色粘土と褐色粘土の互層 | 24. 暗褐色土 | |

第19図 03-2 トレンチ実測図



第20図 段築テラス実測図

墳頂部の埴輪列は、今回の調査では検出しなかった。埴輪は若干量出土しているが、底部の量も少なく、おそらく大部分が転落しているものと思われる。

墳丘斜面では葺石は遺存していなかった。61-2 トレンチにおいて葺石が遺存していた部分では、葺石裏込め土のさらに内側に、墳丘の傾斜と平行する盛土層を確認しているが、03-2 トレンチにおける断面観察では、ほとんどの部分で水平堆積の盛土層であり、墳丘表面は流出してしまったものと思われる。

段築は、標高約28.6mのところ検出した。ここではこぶし大から人頭大の礫と埴輪が集

V 遺 構

中して出土しており、断面観察の結果幅1.6mの平坦面を確認した。一部の礫は傾斜変換点で並んで検出しているが、62—2トレンチで検出している葦石のように小口を墳丘にさし込んではおらず、これらの礫はすでに移動しているものと思われる。また埴輪は、この平坦面付近で集中的に出土しているが、埴輪列及びその掘方の検出は見なかった。

この段築テラスは、標高が後円部基礎礫群掘方の上端とほぼ一致しているため、墳丘2段目の段築と考えられる。

03—3トレンチ（第21図） 03—3トレンチは、03—2トレンチで確認した盛土が、後円部に向かって下がっていく状況が認められ、03—2トレンチより後円部より何らかの施設のあることが予想されたことと、前方部からくびれに至る斜面の盛土の状況を確認するために設定したトレンチである。

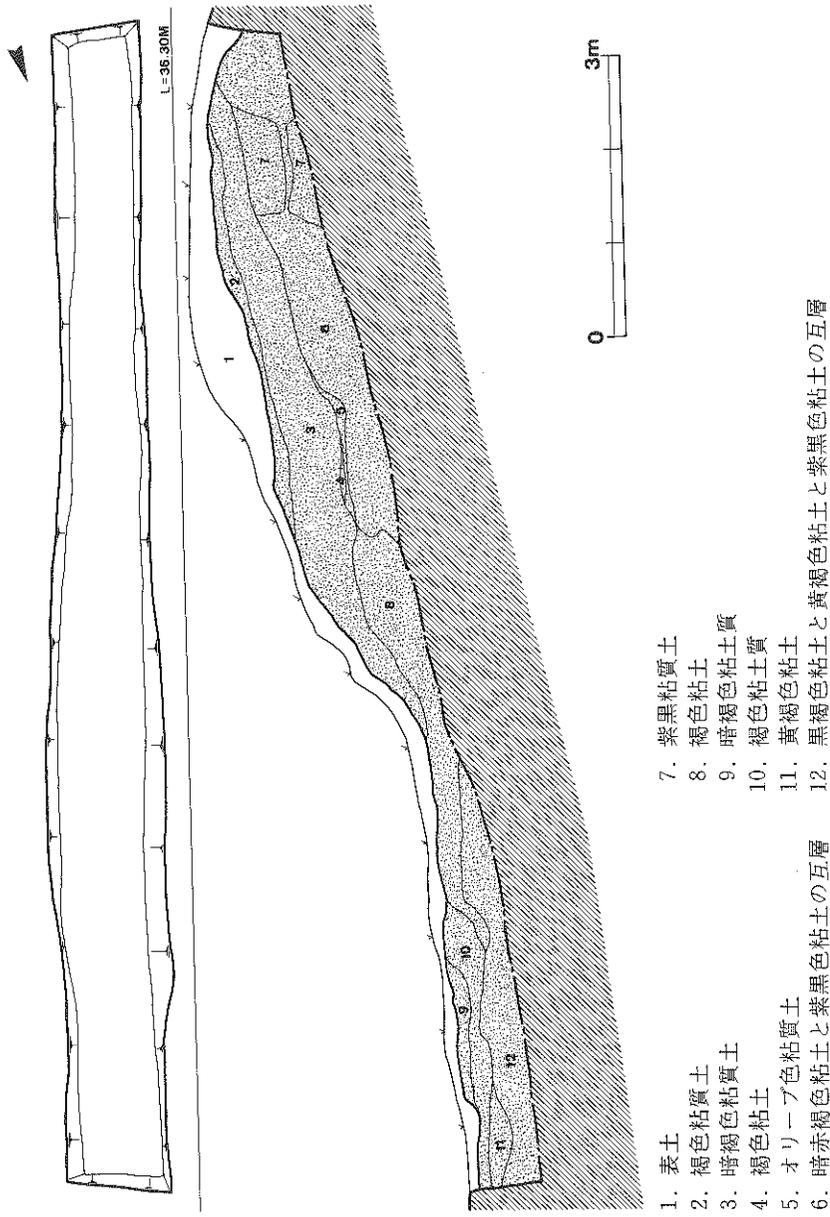
表土下約0.2m～0.6mで褐色粘質土層の面を検出した。この面ではごく浅いピットを検出し、ピット内からは中世の土師器皿が置かれた状態で出土した。このためこの褐色粘質土層の面が中世の整地層である可能性が考えられ、地表下1m～1.7mまで断ち割りを行なった。断面観察の結果、この褐色粘質土層上面が墳丘の面であることが理解できた。

墳丘盛土層は大きく4層に分けることができる。第1層は先述した褐色粘質土層である。墳頂平坦部のみ確認しており、03—2トレンチにおける褐色粘質土と対応し、盛土最終の化粧として使われたことが考えられる。第2層は暗褐色粘質土で、墳頂平坦部から後円部に向かう斜面にかけて認められる。第3層は黄褐色系シルトと黒褐色系シルトが不規則に堆積している。互層になっている部分も認められ、竹の根による攪乱も考えられるが、03—2トレンチの盛土の状況とはやや異なる。またこの層は後円部に向かう斜面では褐色シルトに変わる。第4層は黄褐色粘質土、もしくは黒褐色シルトと黄褐色シルトの互層である。03—2トレンチとの対応関係は、第1層が上層の褐色粘質土と、第2層もしくは第3層が中層と、第4層が下層の盛土層と対応するものと思われる。

このトレンチの目的のひとつであった埋葬施設についてであるが、表土下最高で約1.8m掘り下げたが確認はできなかった。03—3トレンチは幅1mと狭く、掘削が困難となったため、この段階で掘削を断念した。

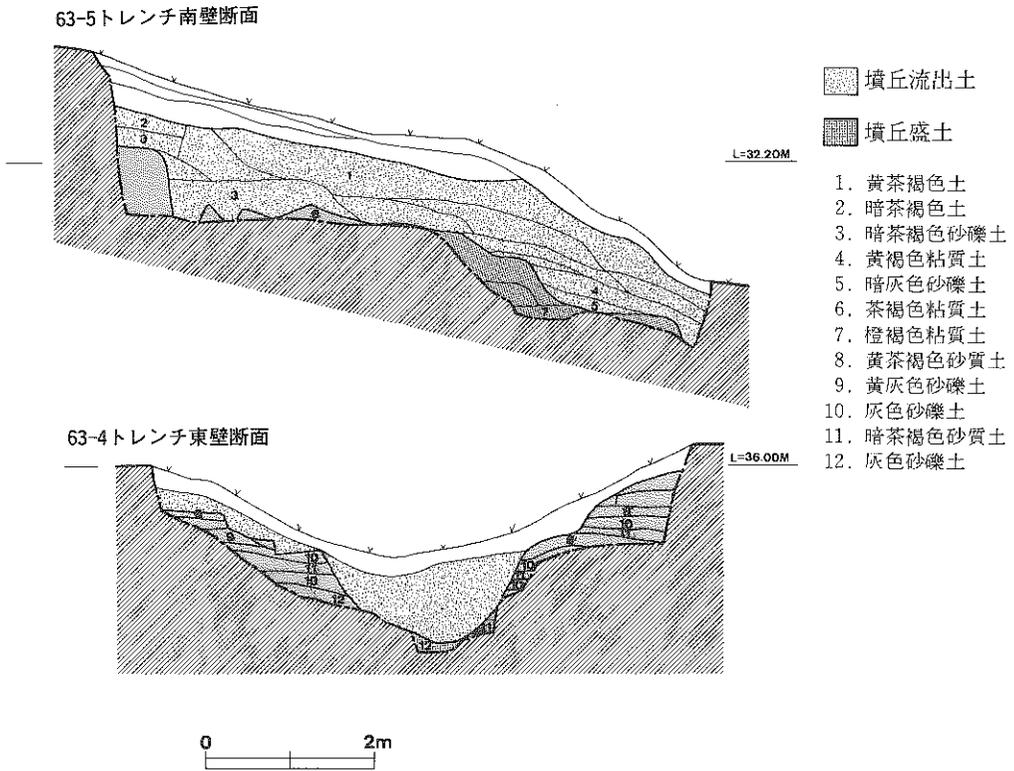
03—3トレンチから出土した遺物は、前述した土師器皿のほかには円筒埴輪片がある。これらの埴輪片で原位置を保つものはなかったが、すべて前方部墳頂平坦面から出土している。層的には第1層の褐色粘質土層の上層の黒褐色粘質土層からの出土である。

なお、古墳に伴うものではないが、前方部上の墳頂から一段下がった地点でピットを検出しており、ここからは伏見人形が多量に出土している。前方部墳頂に小さな祠があることから、これに伴うものであろう。



第21図 03—3 トレンチ実測図

- | | |
|--------------------|--------------------------|
| 1. 表土 | 7. 紫黒粘質土 |
| 2. 褐色粘質土 | 8. 褐色粘土 |
| 3. 暗褐色粘質土 | 9. 暗褐色粘土質 |
| 4. 褐色粘土 | 10. 褐色粘土質 |
| 5. オリーブ色粘質土 | 11. 黄褐色粘土 |
| 6. 暗赤褐色粘土と紫黒色粘土の互層 | 12. 黒褐色粘土と黄褐色粘土と紫黒色粘土の互層 |

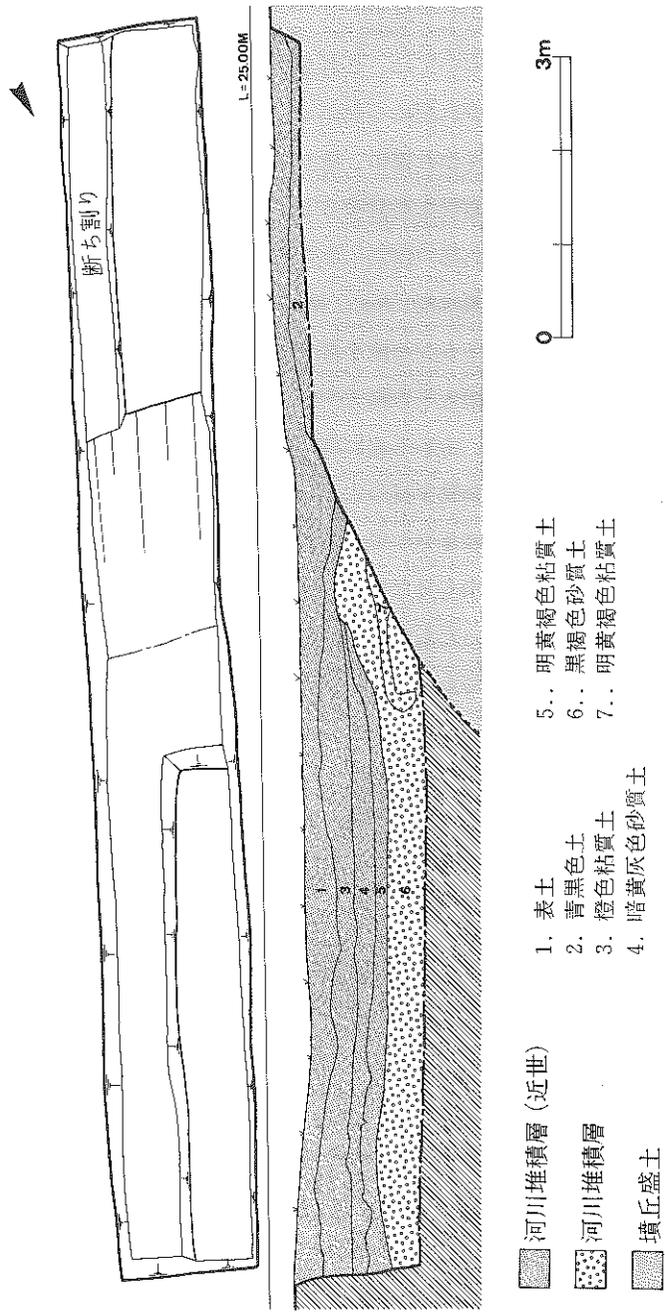


第22図 62-4・5 トレンチ土層図

62-4・5 トレンチ (第22図) 62-4・5 トレンチは、前方部墳頂平坦面から前方部南側斜面にかけて大きな凹みがあり、これが前方部埋葬施設の盗掘壙であることが考えられたため、本格的な埋葬施設調査の資料を得るために設定したトレンチである。

62-4 トレンチは、前方部墳頂肩部付近から斜面にかけて設定したトレンチで、盗掘壙に沿う形で長さ7.3m、幅約1mで設定した。最も深い部分では表土下約2mまで掘削したが、トレンチ底で部分的に黄褐色砂質土や暗茶褐色砂質土などが互層になった墳丘盛土層を検出するに留まった。

62-5 トレンチは、盗掘壙に直交する形で前方部墳頂肩部付近に設定したトレンチである。トレンチの規模は幅約1m、長さ約6.4mである。このトレンチでは盗掘壙をほぼ掘りきっており、盗掘壙の下層からは黄褐色砂質土・灰色砂礫・暗茶褐色砂質土が互層になった墳丘盛土を検出している。この調査成果は03-2 トレンチの成果とほぼ同様であり、前方部には埋葬施設を持たない可能性が高くなった。



第23図 03-4 トレンチ実測図

(造り出し部の調査)

二子塚古墳の造り出しについては、これまでまったく不明であったが、明治初年の地籍図では周堤から古墳の西側くびれ部につながる区画があり、周堤と同じ地籍で表現されている。このことから、古墳の西側くびれ部に、造り出しが陸橋のような施設があることが予想された。このような視点から測量図を検討すると、周濠の形状が造り出しの名残を留めていることも考えられたため、くびれ部の西側にあたる地点に南北方向の03—4 トレンチ（第23図）を設定した。トレンチの規模は幅1.5m、長さ約13mである。

表土を除去した段階で、トレンチ南半部では03—1 トレンチと同様の青黒色土を検出したが、トレンチ北半部では黄褐色系の粘土や砂の河川堆積層を検出した。そこでこの青黒色土層を追って掘削を進めると、南から北に向かって落ちる斜面を検出した。このことから二子塚古墳が造り出しもしくは陸橋を持つことが判明した。

造り出しの斜面の傾斜はゆるやかで、傾斜角は約25度である。葺石等の外表施設は認められない。また、埴輪列の検出も見なかったが、斜面に張りついた状態で円筒埴輪片が出土しており、本来は埴輪列があったものと思われる。おそらく土取りや河川の氾濫などによってかなり削平を受けているのであろう。

今回の調査では、東西方向のトレンチを設定できなかったため、造り出しが陸橋かを決定できる資料はないが、他の古墳の類例から見て造り出しの可能性が高いと考える。

(地山と盛土)

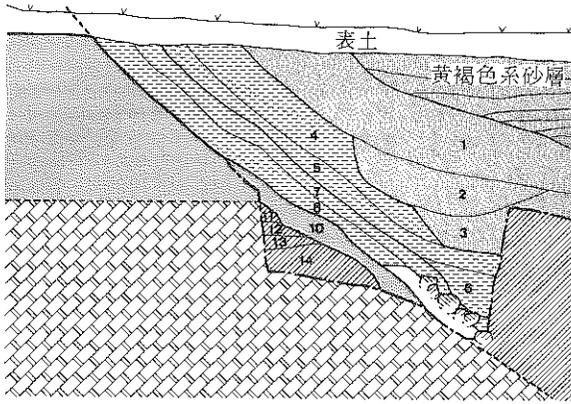
4年にわたる墳丘調査の中で、部分的にはあるが地山と盛土層の観察を行うことができた。以下その概要を述べる。なお、ここで言う地山は、古墳築造段階の旧地盤を示す。

地 山 地山を検出しているのは、後円部では62—2 トレンチ、後述する63—2 トレンチ、03—1 トレンチである。各トレンチによって若干土質が異なっており、62—2 トレンチでは黄褐色砂礫、63—2 トレンチでは暗灰褐色土、03—1 トレンチでは黄灰色粘質土である。地山の標高は62—2 トレンチでは25.2m、63—2 トレンチでは25m、03—1 トレンチでは23.9mである。東端の62—2 トレンチと西端の03—1 トレンチとの距離は約50mであり、東西方向では50mで1.3mの高低差というかなり平坦な面であったことがわかる。また南北方向では、前方部では地山まで掘削していないが、周堤の01—1 トレンチなどで茶褐色土の地山を検出している。01—1 トレンチで検出した地山の標高は23mで、約110mの距離のある63—2 トレンチと2mの比高差である。これらの事から、古墳築造段階の地形は、北東から南西にむかってわずかに傾斜を持つ緩斜面であったことがわかる。

墳丘盛土 墳丘盛土については、かつての概報において基本的には異なる土を交互に土盛りし、さらにそれは数m単位の大きなブロックに分けられることを指摘した。平成3年度の

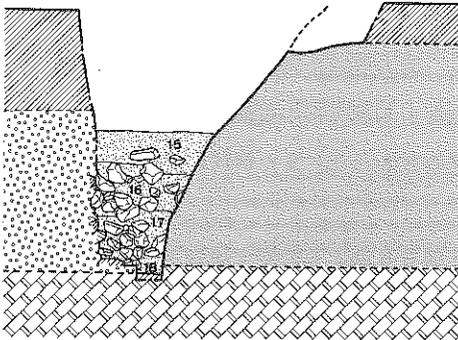
62-6 トレンチ東壁

L=28.00M



63-2 トレンチ断割

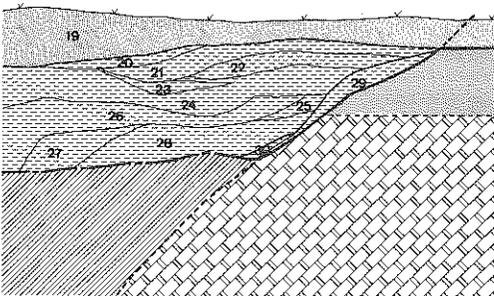
L=28.00M



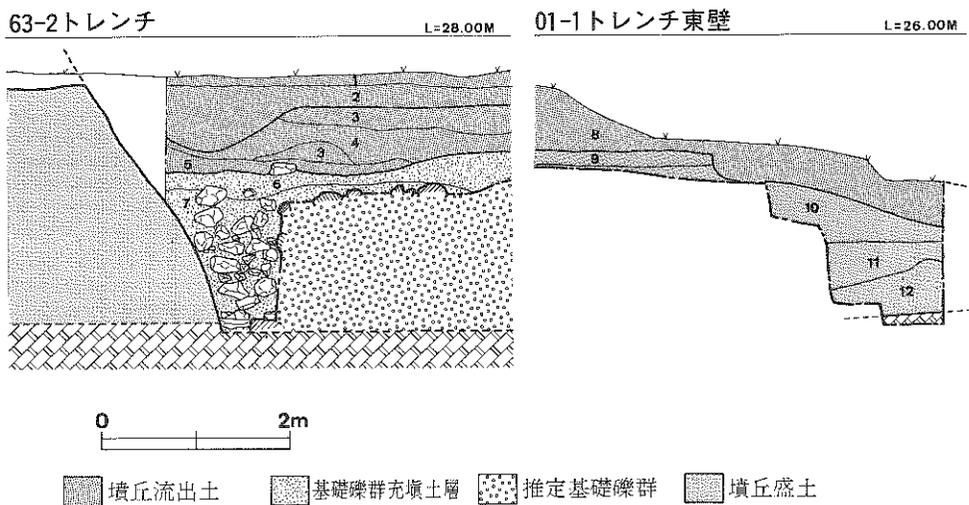
-  トレンチ未掘部分
-  推定基礎礫群
-  基礎礫群間充填土層
-  河川堆積層
-  墳丘流出土
-  墳丘盛土

03-1 トレンチ北壁

L=25.50M



第24図 地山断面実測図(1)



第25図 地山断面実測図(2)

前方部の調査成果を加えても、ほぼ同様の状況が看取できる。つまり前方部墳頂では黒褐色系の土と黄褐色系の土の互層であるのに、前方部墳頂西部では黒褐色系の土はあまり認められず茶褐色系統の土が主体となる。残念ながら調査が小規模なトレンチ調査に限られているためその単位の規模等を追求するには至らなかった。また概報において推測した段築ごとの盛土の差は認められなかった。

墳丘盛土の成果としては、前述した互層を基調とした盛土層の上層に不規則に積んだ層を確認したことがあげられる。これは62—2 トレンチにおける、斜面に沿った盛土層にも対応するもので、まず異なる土を交互に盛る方法で盛土を行ない、それを包む形でさらに盛土をする2つの工程があったことが考えられる。

(小 結)

以上、墳丘についての調査成果を述べてきた。ここでは調査において明確になった点について整理することとし、墳丘の復元等については後述したい。

まず外表施設については葺石と埴輪列を持つ。葺石は宇治川周辺で採集できるチャート系の石材を用い、小口を墳丘に埋め込む。埴輪列は検出しなかったが、墳頂部及び段築テラスで集中的に出土している。段築テラスは、標高28.6mで検出した。段築テラスを検出したのが1ヶ所のみであるため、古墳が何段築成かを明確にし得なかったが、検出した位置から考えて3段築成の2段目テラスと推測される。

また、西側くびれ部には造り出しを持つことが判明した。周濠のラインが往時の姿を留めているものとした場合、長さは約15mである。

4 埋葬施設

二子塚古墳の後円部が、大正初年の鉄道施設に伴う土取りによって破壊されたことは、既に述べたとおりである。この時、後円部の埋葬施設も破壊を蒙っている。したがって、本古墳の埋葬施設については、全く遺存していないと推測されてきたが、昭和62・63年度の発掘調査によって埋葬施設基礎が比較的良好な状況で確認でき、往時の一端を窺うことが可能となった。これは幸運であったという他ない。

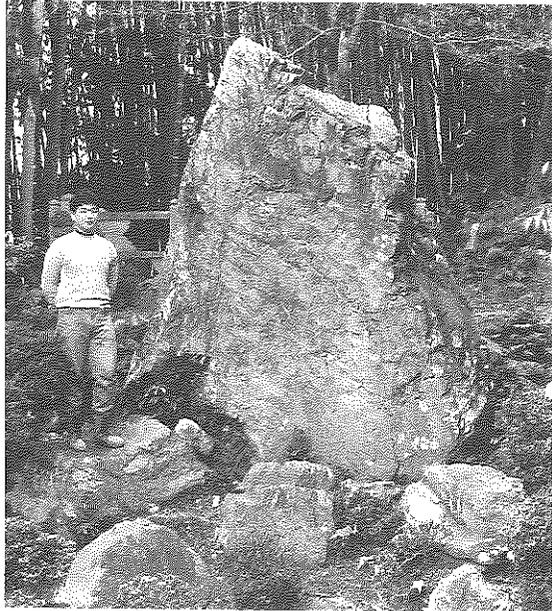
ここでは、後円部埋葬施設の状況を報告するとともに、大正初年の後円部土取りの状況も合わせて概述をしたい。

(大正初年の石室破壊状況)

大正3・4年、鉄道施設に伴い後円部が土取りにあった。それまでは、明治初年の地籍図に見るように、二子塚古墳の墳丘は整美な前方後円形を呈していたらしい。子供のころ、古墳の上で遊んでいたという地元の方（明治36年生）の話によれば、「高さは南側の頂上も北側の頂上も同じくらいで、北側（後円部）の周りには穴はなかった」というから、後円部と前方部頂の比高は、子供心にも判断できない程近接していたと思われる。また、墳丘部分には全く穴らしきものはなかったというから、後述する本墳の横穴式石室は開口していなかったと考えてよい。

古墳破壊の報に接し、最初に現地を訪れその状況を報告したのは、梅原末治である。大正12年刊『京都府史蹟勝地調査會報告第四冊』にその有様が記されている。^(註9)梅原が現地を調査した時は、「既ニ土砂採掘ノ為ニ其ノ大半ヲ失ヒ」、「凹所ノ下方ニ當リテ稍深位ニ大石三四ノ埋没シテ墳ノ主体ノ一部タルヲ思ハシメ」る状況であったという。また、礫が同所に多数散在している状況が確認できたところから、二子塚古墳の埋葬施設は大石を用いた横穴式石室らしいと判断をしている。

今回の調査にあたって、破壊時の状況の聞き取り調査を地元で行ったところ、幾人かの方が、古墳の土取りの時



第26図 西方寺裏庭の石室石材

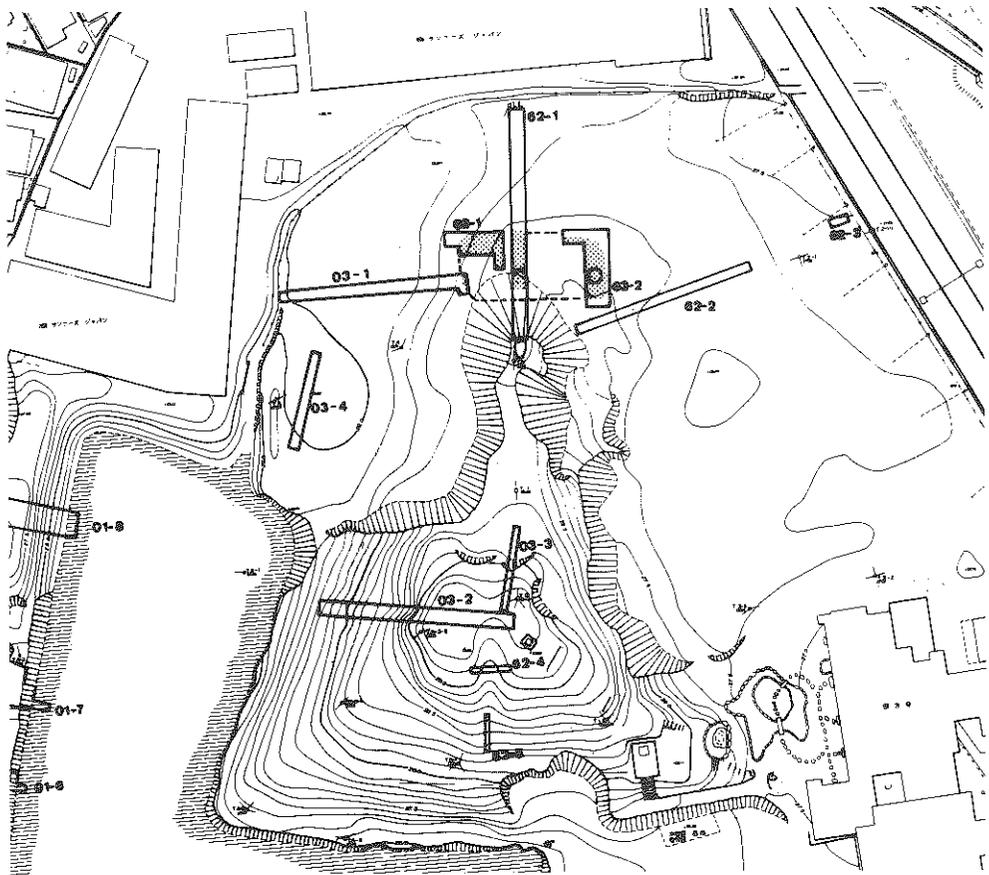
に、大石を組んだ「井戸」状のものが削られた崖面に顔を出していたと証言しているから、状況的に墳丘主軸に直行する横穴式石室が、この時に破壊されたことはほぼ間違いない。

前頁に掲載した西方寺裏庭の巨石（高さ3.2m、幅2.8m）は、石室破壊時にその天井石の内の一石をここに運び庭石としたものだといい、同寺庭園の庭石のいくつかも石室使用石材を利用したものらしい。

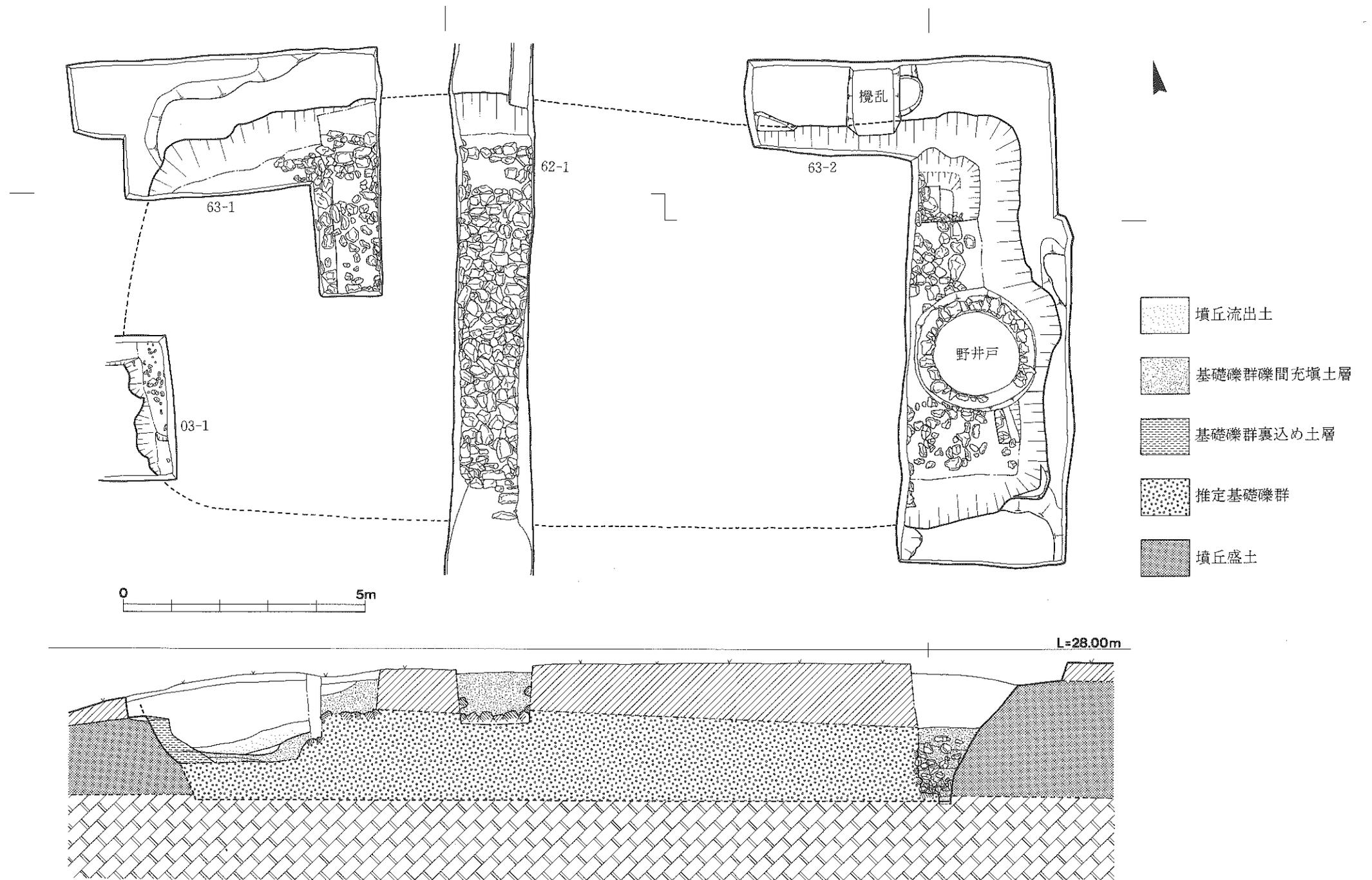
（石室基礎遺構）

今までの概報において、「基礎礫群」と呼んできた石室基礎遺構は、消滅した後円部中央で検出したもので、状況的に横穴式石室の基礎構造が石室消滅後も遺存していたものと判断できる。

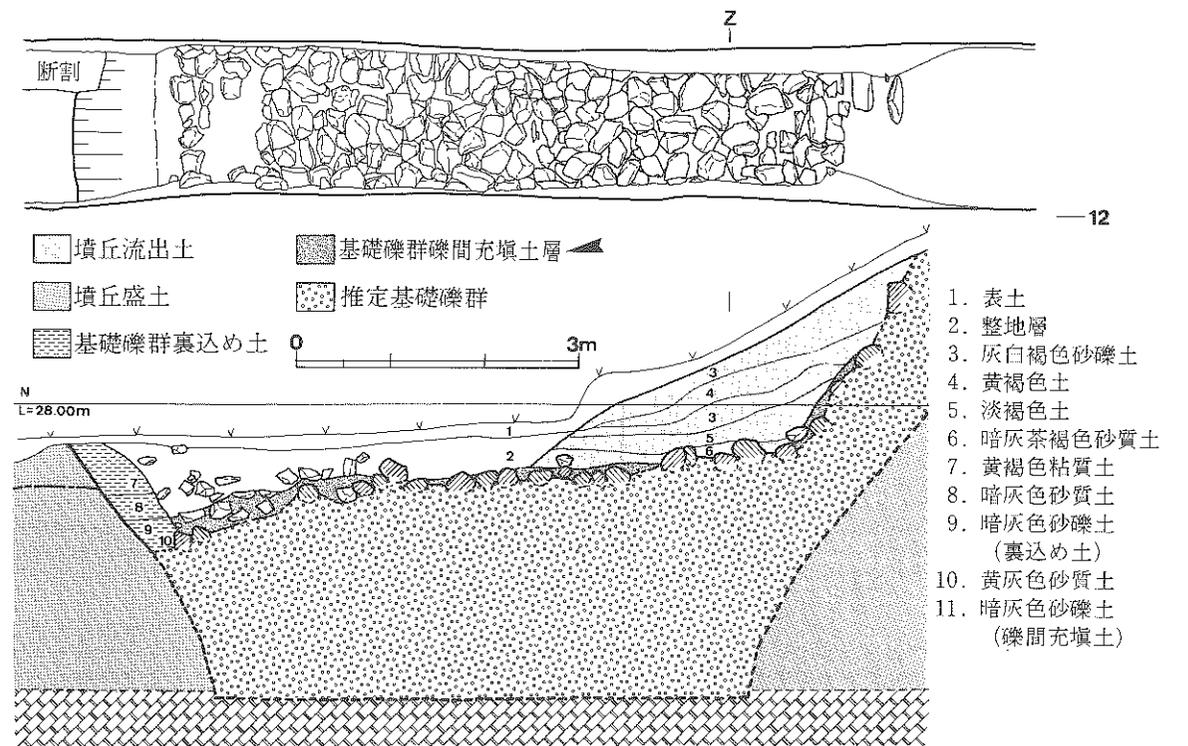
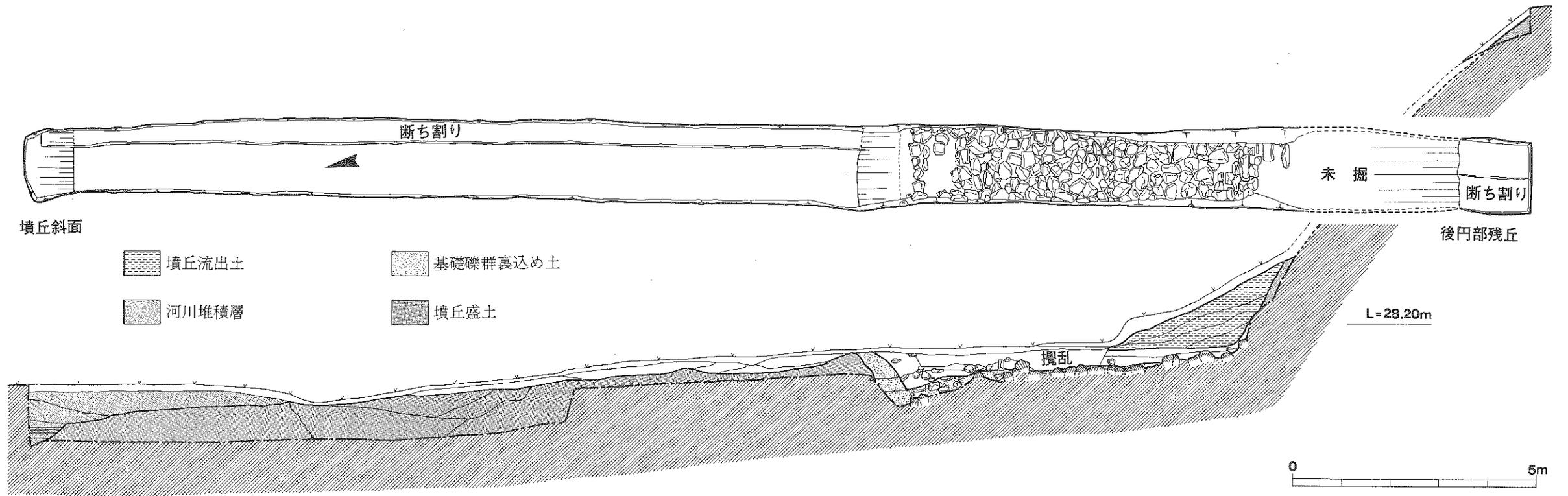
この石室基礎遺構は、東西約18m南北約9mの長方形掘り込み内に人頭大強の河原石を充填したもので、その深さは検出面より2.8m下方に及ぶ。巨大かつ堅牢な基礎である。構造について、少し詳しく見てゆきたい。



第27図 墳丘における埋葬施設の位置図



第28図 基礎礫群実測図



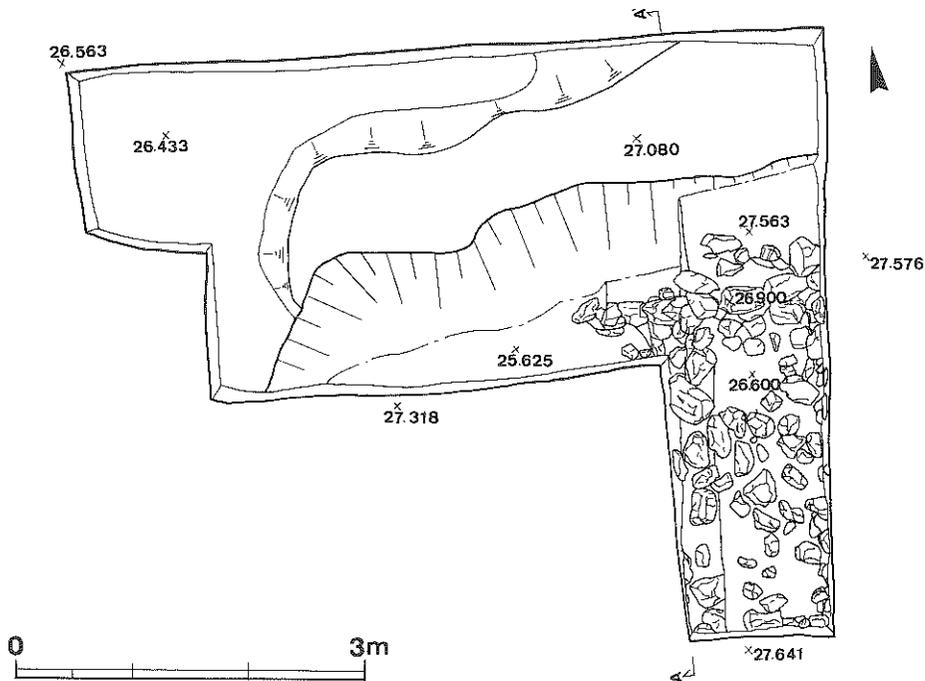
第29図 62-1 トレンチ実測図

石室基礎遺構の掘方上面については、後円部が既に削平されているため確定できないが、後円部残丘斜面にこの遺構の一部が遺存するため、概ねの予測をすることができる。第29図を見ても明らかなように、残丘斜面部で検出できる礫の最上端は、標高29.3m程のところであり、ほぼこの辺りに掘方上面を求めて良い。すなわち、石室基礎遺構の検出面は、本来の高さより1.7~2.5m程下ったところであると考えて良く、状況的に掘方上面は墳丘段築第2段目より穿たれたと考えられる。したがって、当然、石室の開口部もこの段に求められる。

掘方の断面形状は、上広がりとなっているため、前述した検出面での規模は本来より小さいものであり、想定できる本来の掘方規模は、東西・南北長とも更に1.5m程大きいものと考えて良いであろう。

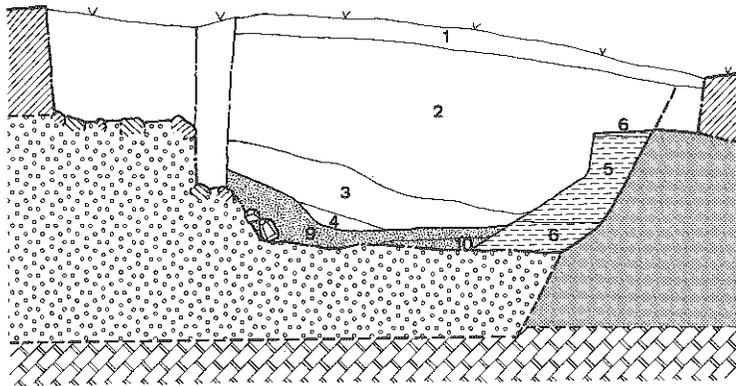
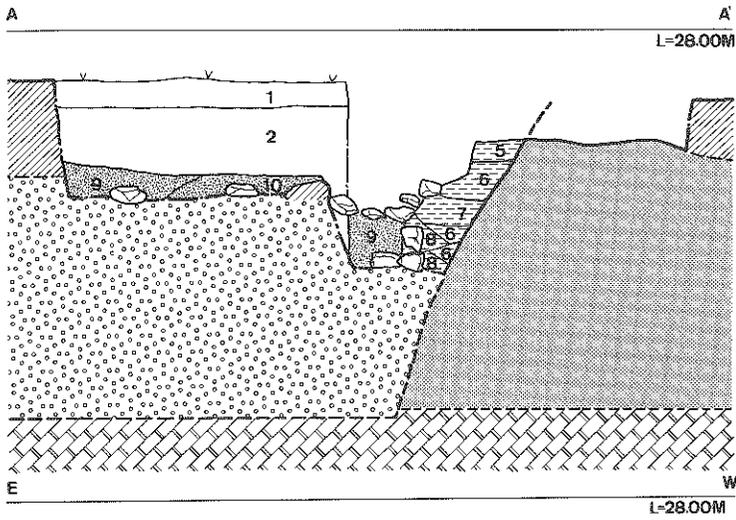
掘方の底面の検出は、小面積のためやや不安が残るが、北東角部分で実施している。この結果では、標高25m辺りで砂礫系統の地山と思われる土層に行き当たり、掘方内に充填されている礫もここで止まっている。したがってこの境目を底面と判断した。掘方上面を29.3m付近と想定すれば、その深さは4.3m程の大変深いものといえることができる。

掘方の後円部における位置について詳しく見ると、東西方向での中心部は、古墳の想定主軸線より5m弱東側に求めることができるため、この結果をもとに石室の配置状況を復元すれば、主軸に直行する東開口の横穴式石室を想定することが最も可能性が高いこととなる。



第30図 63-1 トレンチ実測図

V 遺 構



- | | |
|--|--|
|  墳丘盛土 |  基礎礫群礫間充填土層 |
|  基礎礫群裏込め土 |  推定基礎礫群 |



- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. 表土 | 7. 黄灰色砂質土
(裏込め土) |
| 2. 整地層 | 8. 暗灰色砂礫土
(裏込め土) |
| 3. 黄褐色砂質土
(墳丘流出土) | 9. 暗灰色砂礫土
(礫間充填土) |
| 4. 暗黄褐色砂礫層
(墳丘流出土) | 10. 黄灰色砂質土
(礫間充填土) |
| 5. 黄褐色粘質土 | |
| 6. 暗灰色砂質土 | |

第31図 63-1 トレンチ断面実測図

掘方内に充填される礫の有様に移りたい。まず、礫の平面範囲であるが、掘方内全面に広がっているのではなく、概ね検出掘方線より1.5～2 m程内側まででその範囲が止まっており、掘方線と礫との間部分には粘質土が詰められていた。掘方と礫との関係を断面で見ると、掘方は上開きとはいえ、底面部分ではほぼ垂直に近くなっており、底面付近での礫は、掘方斜面にはほぼ接する形となっている。すなわち、上面部分で掘方と礫範囲が上述の差をもつのは、掘方範囲が上面では広がりを見せるのに対し、礫範囲は掘方底面での充填範囲を上面でも維持している理由による。

礫の状況が最も良好に観察できたのは、62-1 トレンチにおいてであり、他トレンチでは後円部削平時での礫の取り出しによる破損が認められた。62-1 トレンチで観察できた礫の充填状況はかなり整然としたもので、単に礫を掘方内に入れたものでは決してなく、一層一層礫を積み重ねながら、掘方内に礫を充填していった工程を明瞭に窺うことができた。また、礫範囲の端もこの工程に合わせながら、石列状にその範囲を造り出している。

礫自体は、チャート質の河原石を主体としており、その大きさは人頭大からもう少し大ぶりの石で占められている。礫自体も一定の選別が行われていると見てよいであろう。

予想される礫の総量は、1 m²当り20個程、深さ1 m当り4層の礫面を想定し、礫群の東西長16 m、南北長8 m、深さ4.5 mの想定規模で計算すると、42240個の膨大な量が予想できることとなる。

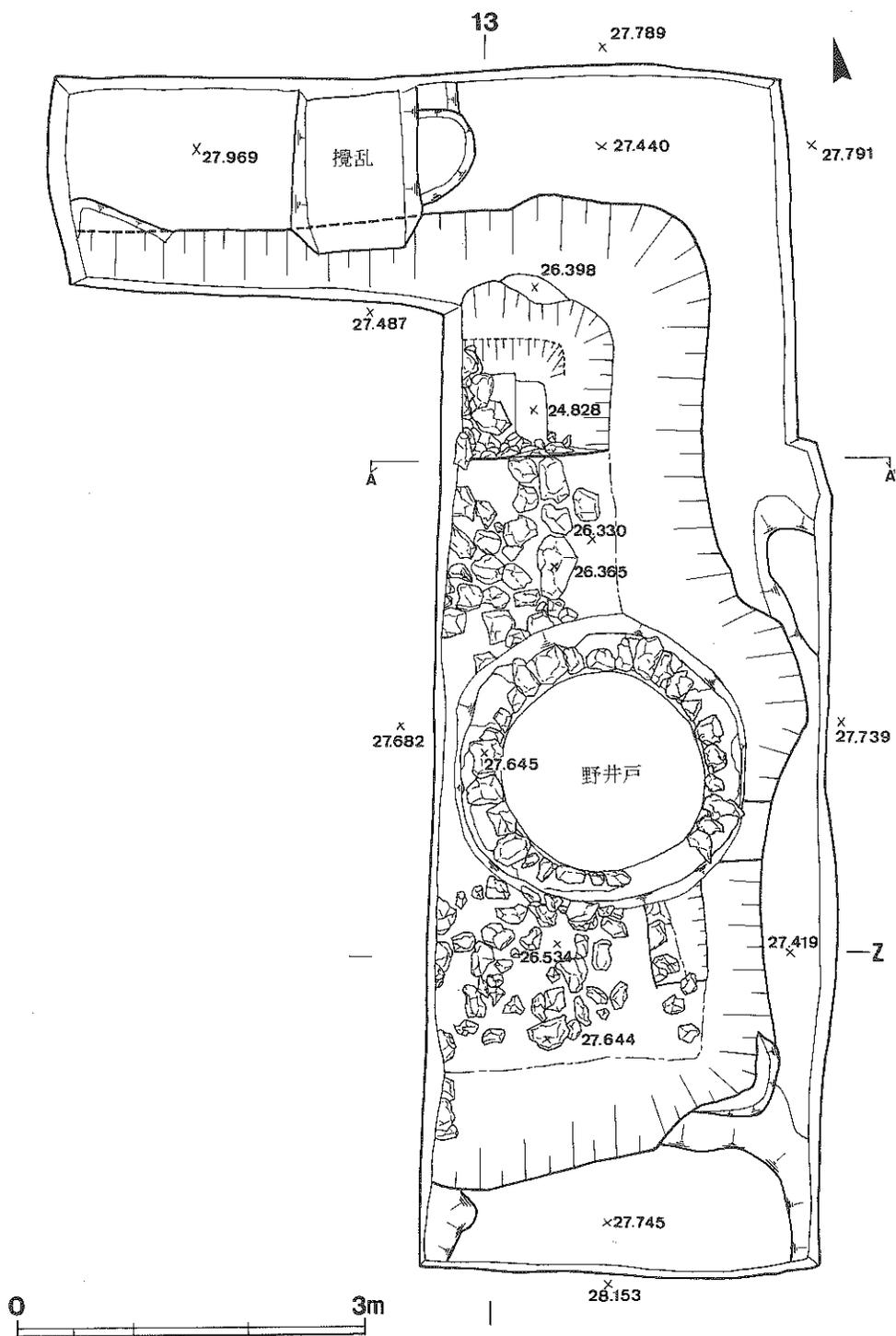
(石室基礎構造の機能と類例)

前述したとおり、この石室基礎構造は大規模なものであるとともに入念に造られている。何故、本墳にこのような施設が必要であったのかについて、少し考えてみたい。

この遺構が石室の安定を支えた基礎である限り、その必要性は石室と墳丘との関係の中に求められるべきであろう。

二子塚古墳の墳丘は、既に報告したとおり大半が盛土で築かれている。盛土は各種の土が盛り上げられており、全体としては決して硬くしまったものではない。この中で石室基礎構造と一部に伝わる巨大な石室用材から想定できる、府下最大級の蛇塚古墳石室にも匹敵する大型石室をそのまま構築するのは、やはり難しいと判断できるのであって、もし築かれたとしても、その形を長く安定することは不可能であったことは否めない。このような状況は、当初より追葬を考慮する横穴式石室にとっては極めて不都合なことといえる。したがって、石室を盛土の中で安定させるための施設として、この基礎構造が造られたと思われるのであり、石室の重量は4 mを超える厚みの礫を通じて直接地山に伝えられていたと考えられるのである。同じく盛土を多用した奈良県市尾墓山古墳の石室下部でも同様な施設が確認されていることから、類例は今後増加すると期待してよい。

V 遺 構



第32図 63-2 トレンチ実測図



第33図 63-2 トレンチ実測図

VI 遺 物

1 埴 輪

二子塚古墳から出土した埴輪は全体でコンテナ8箱位である。円筒埴輪と形象埴輪の二種類に大別され、円筒埴輪には普通円筒埴輪と朝顔形埴輪とがある。総て小片であり、全体を復元できるものはない。ここでは、それぞれの種類の埴輪の特徴を述べ、特に円筒埴輪についてはハケメと焼成に視点を設けて分類し、それぞれの特徴を述べることとする。

(円筒埴輪)

普通円筒埴輪 この埴輪は、墳丘の頂部、段築の平坦面上、基礎礎群、内濠、堤、外濠などから出土しているが、原位置を保つものはない。小片ばかりで全体を復元できる個体はない。これをハケメとその条線密度で大別し、更に焼成の良、不良で細分した。以下に分類の基準を示す。

I類…外面に一次調整のタテハケを施した後、二次調整のヨコハケを施すもの。

II類…外面に一次調整のタテハケのみ施し、条線密度の高いもの。

II類—a…焼成が良好で硬質、色調が黄灰色、灰色のもの。

II類—b…焼成が不良で軟質、色調が淡褐色のもの。

III類…外面に一次調整のタテハケのみを施し、条線密度の低いもの。

III類—a…焼成が良好で硬質、色調が暗褐色のもの。

III類—b…焼成が不良で軟質、色調が乳白色、淡橙色のもの。

但しI類についてはII・III類のような多様性をもたず、細分することが返って混乱を招くおそれがあるため敢えて細分しなかった。また須恵質の埴輪も若干見られるが、調整その他の特徴からII類—aに分類した。

尚、総括的な報告であるため、既応の調査で得られた資料についても分類し、再掲するよう努めた。新旧の資料番号の対照は表1に一括して示した。

また、埴輪各部の名称、調整法等は、川西宏幸氏の「円筒埴輪総論」^(註10)を基本とした。

I類 普通円筒埴輪の中で外面調整がヨコハケであるものをI類とした。I類の埴輪は既応の調査によって得られた資料にも散見されるが、わずかな量にとどまっていた。しかし平成3年度の調査では出土した埴輪片の6割余りを占める量が出土した。以下にこの埴輪の特徴を述べることとする。

口縁部 口縁部の形態は第34図1、3のようにわずかに外反するものと、第34図2、4、

5、第36図33のように直線的に立ち上がるものがある。口縁端部は強くナデを施して凹面をなすもの（第34図1、2、3と第36図33）と、弱くナデを施して平坦に作るもの（第34図4、5）とがある。内面にはナデを施すものとヨコハケを施すものがある。なお底部は出土していない。

調整 外面の一次調整はタテハケであるが、二次調整はヨコハケである。ハケメの条線密度については、1cmあたり6～8本である。休止痕についてはごく浅い休止痕が認められるが、休止痕の間隔については断片的な資料であるため不明である。内面調整については、主にヨコナデを施すかヨコハケを施すが、一部指頭圧痕を残すものや、ナデの後ヨコハケを部分的に施すものがある。

タガ・スカシ タガは一次調整の後粘土紐を貼り付け、上下をナデつけて作っている。タガの断面形態は上面に強くナデを施して上面の凹んだ断面台形を呈する、いわゆる「M字タガ」と呼ばれるものである。タガ上面の幅は1.2～1.5cm、高さは0.7～1.0cmであり、作りは比較的丁寧である。Ⅰ類の円筒埴輪のタガの形態はこの形に限られる。

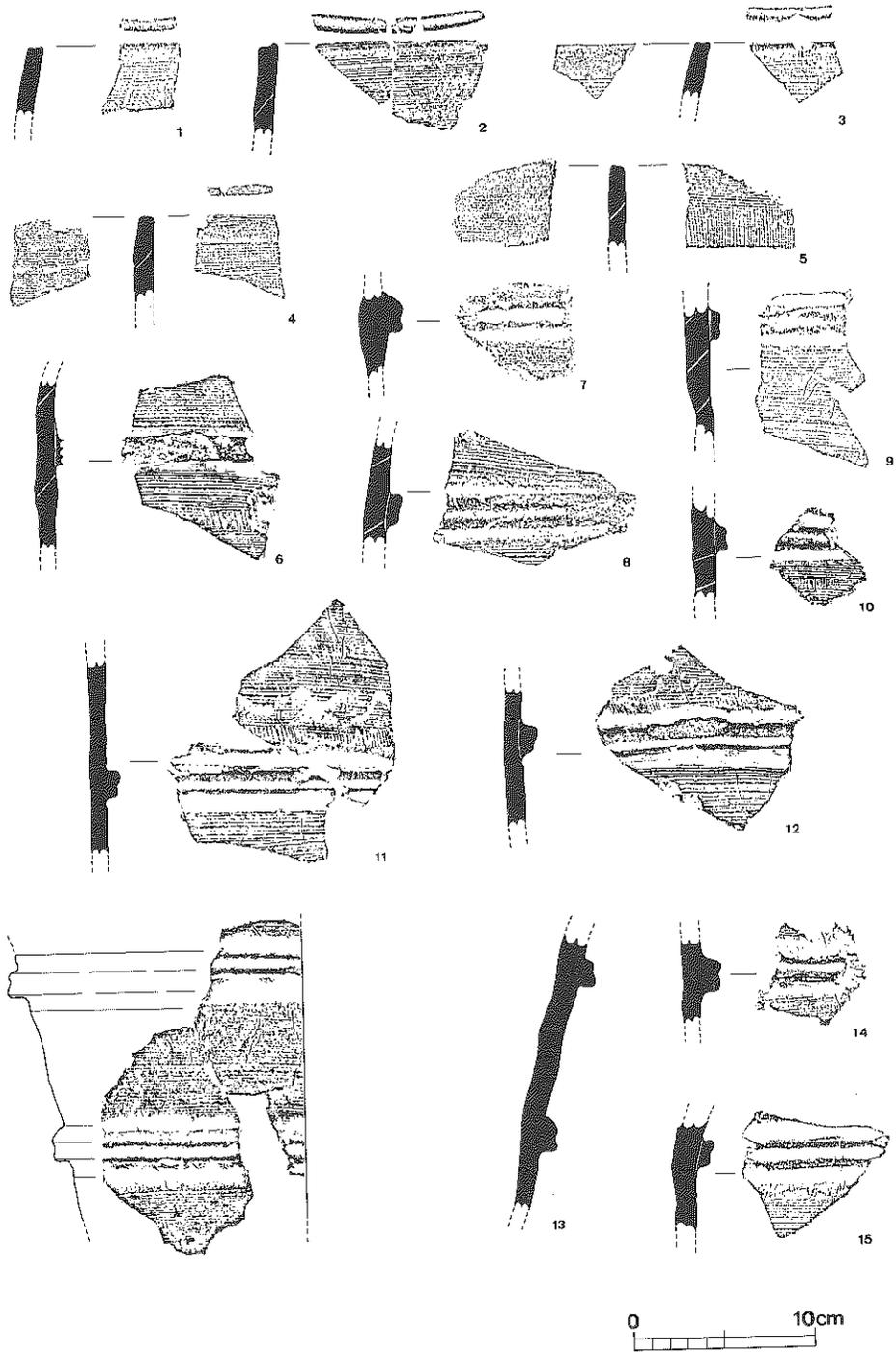
スカシについては、スカシの部分を持つ破片が検出されていないため、知ることができなかった。

焼成 色調は明赤褐色、赤褐色、暗赤褐色があるが、赤褐色のものが大半を占める。色調の明るさの違いは焼成の違いと対応し、やや軟質のものは明赤褐色、硬質のものは暗赤褐色を呈す。全体的には赤褐色でやや硬い焼成のものが多い。しかし焼成や色調の違いはあっても、調整、タガの形状等の変化は無く、細分する必要はないと判断した。須恵質のものはない。また黒斑を有するものも認められず、窑窯焼成によるものと考えている。

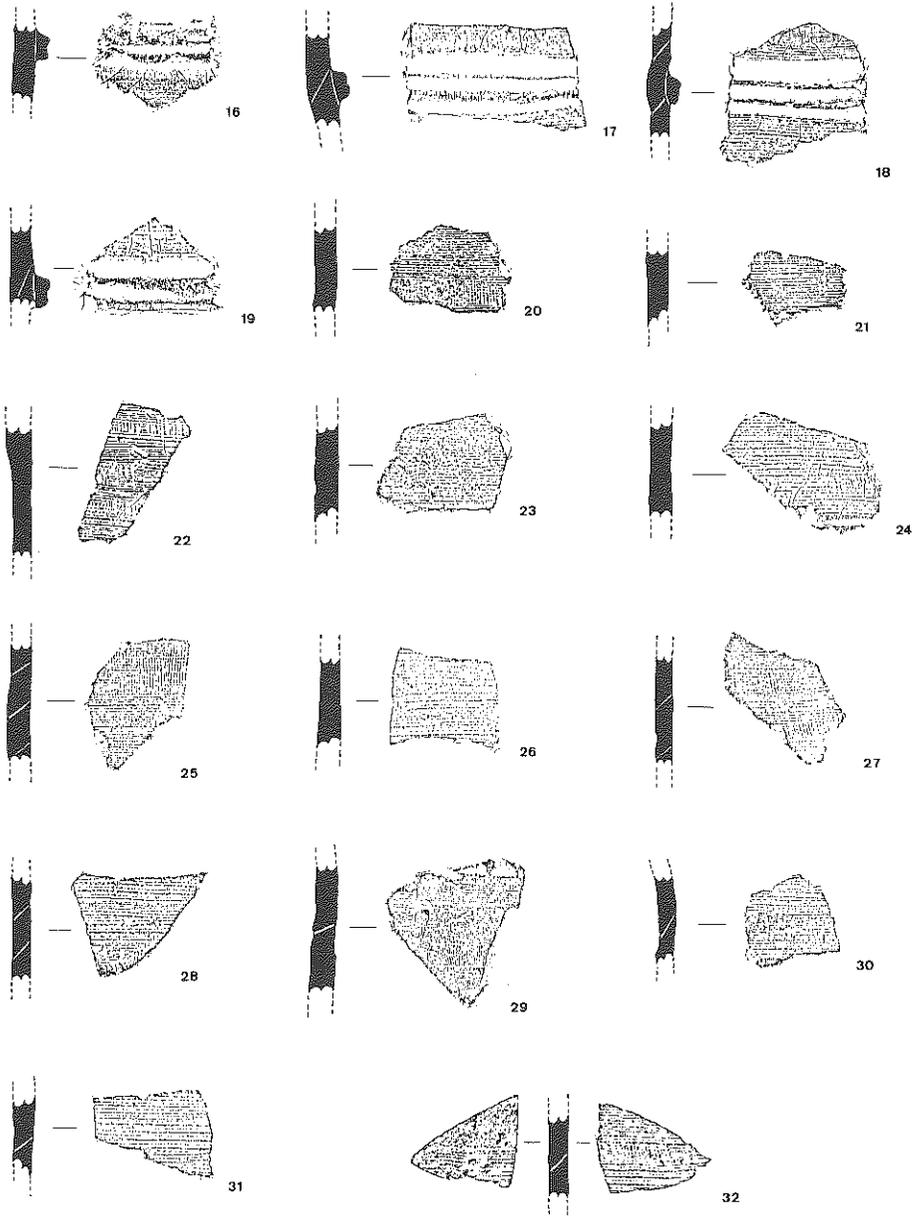
胎土 胎土には直径1～13mm程度の砂粒、小礫を多量に含んでいる。小礫は乳白色で不透明な岩石である。砂粒は白色で半透明な鉱物（石英か）、青灰色で不透明、方形を呈する鉱物などがある。砂礫は1～5mm位の粒径のものが主体である。1cmを超えるような礫はまれに見られる程度である。また粒径1mm未満のごく微細な砂粒が非常に多く混入されていることが断面観察からわかる。

出土地区 平成3年度の調査では、試みにそれぞれの出土地区の中での各分類の出土点数の比較をしてみた。破片の点数を百分率にしたものであるため、この結果がそのまま築造当初樹立していた個体数を反映するものではないが、およその傾向を掴むことができるのではないかと考える。詳細は考察を参照して頂くとして、簡単に結果だけを示しておきたい。

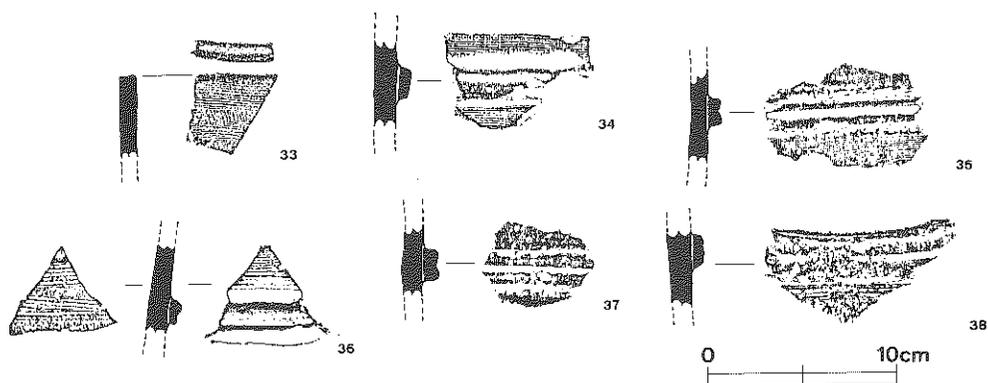
後円部の03—1ではⅠ類の埴輪は検出されず、過去の後円部の調査でも稀である。前方部の03—2の埴輪部では70%を占め、段築上では約50%出土している。同じく前方部の03—3では100%がこのⅠ類である。造り出し部の03—4では80%を占める。平成元年度の堤の調



第34図 円筒埴輪実測図 (I類)



第35图 円筒埴輪実測图 (I類)



第36図 円筒埴輪実測図（Ⅰ類）

査ではほとんど出土が無く、外濠の調査では、昭和60年度、平成3年度共にⅠ類がほとんどである。平成3年度の調査全体では、全出土点数の約6割を占めている。

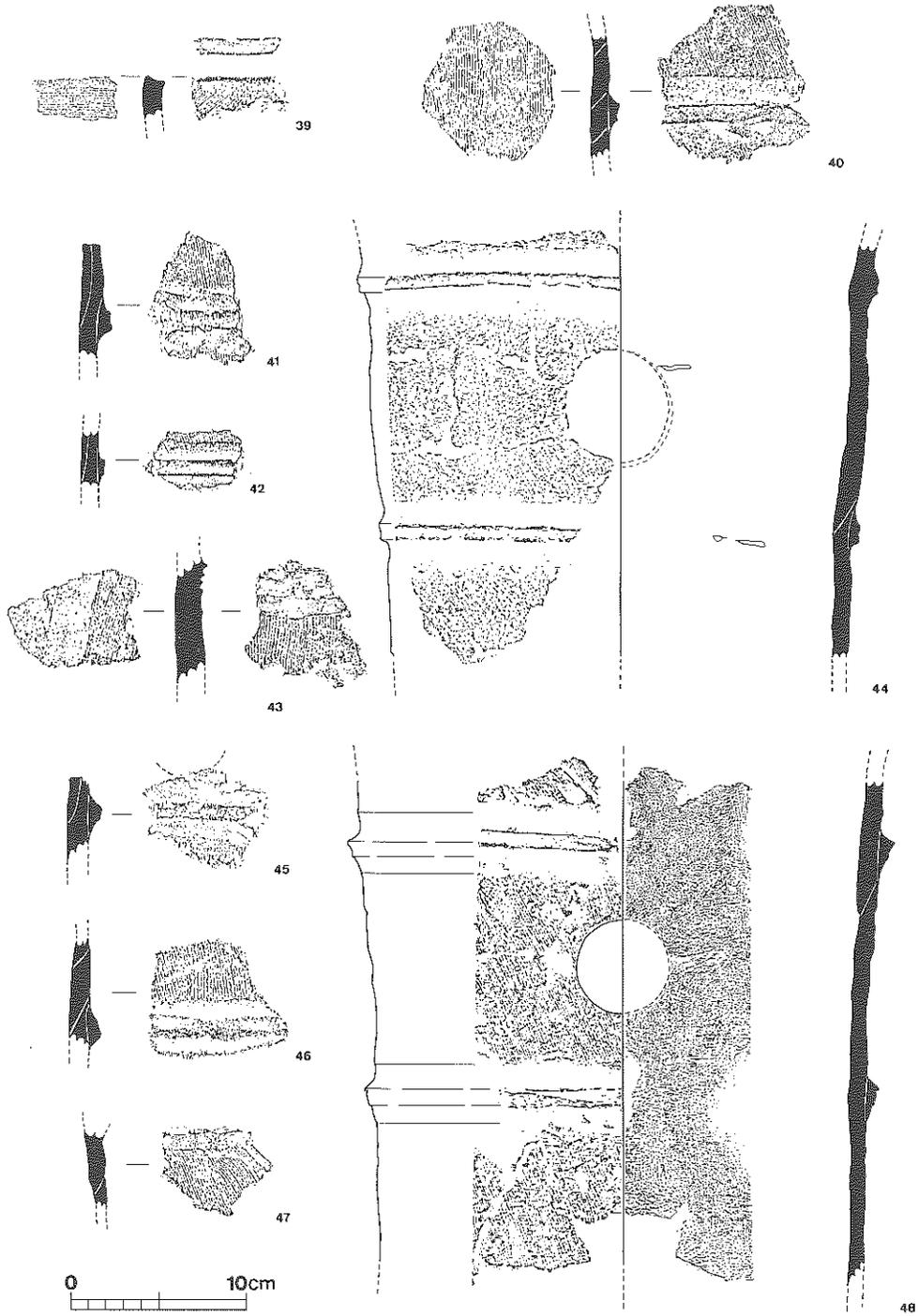
Ⅱ類 外面調整が一次調整のタテハケのみであり、ハケメの条線が1cm当たり7～10本の比較的密なものをⅡ類とした。このⅡ類の中で焼成良好で硬く焼き縮まり、色調が黄灰色、あるいは灰色のものがあり、一方焼成が不良でやや軟らかく、色調は褐色、淡褐色のものがある。これらは口縁部、底部等で若干異なる様相を示すため、前者をⅡ類—a、後者をⅡ類—bとして細分した。以下にそれぞれの特徴を述べたい。

（Ⅱ類—a）

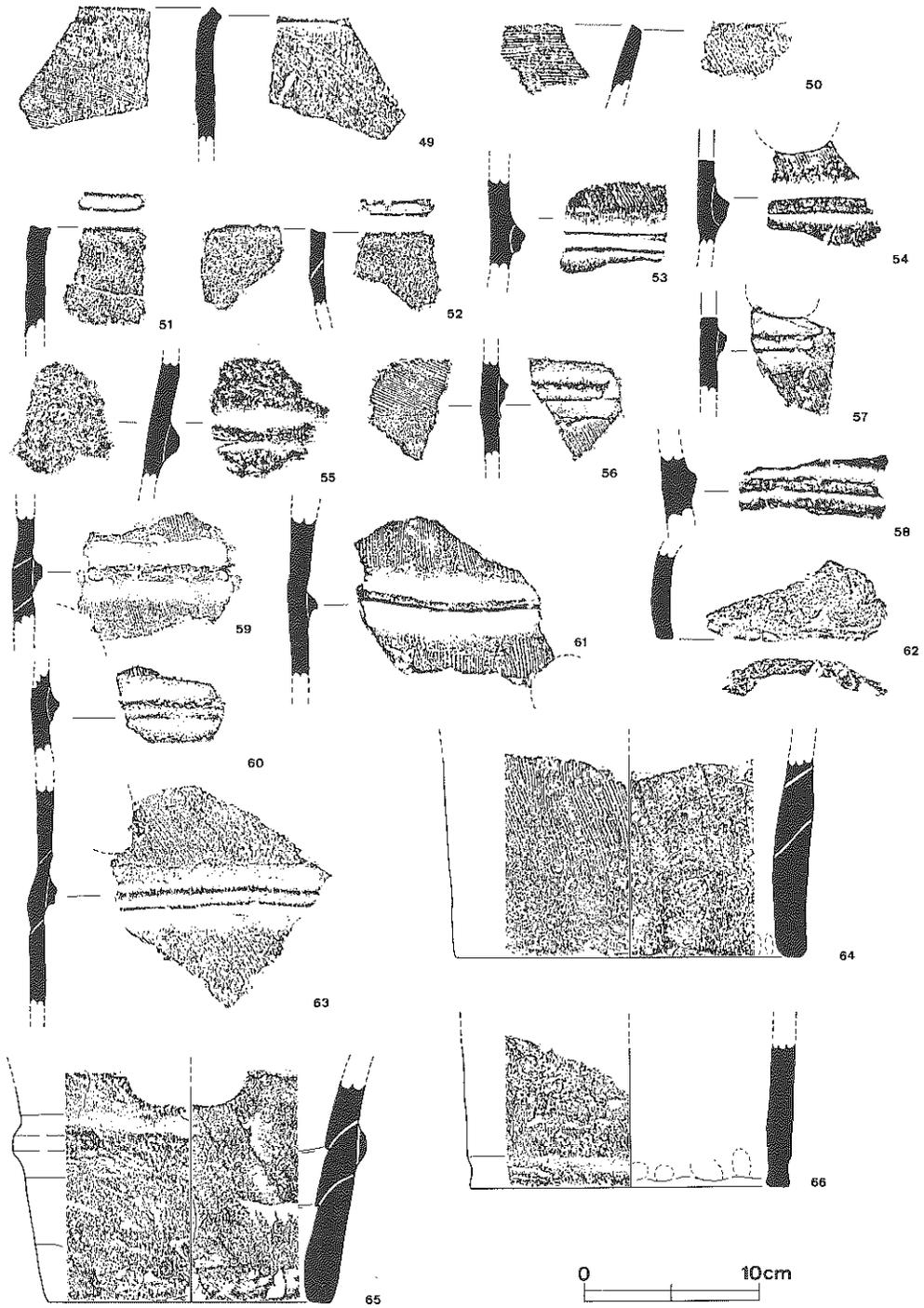
口縁部 口縁部には第37図39、第38図49のように端部付近で外反するものと、直線的に立ち上がるものがある。端部は、第38図50のようにナデが弱く平坦なものと、強くナデを施して凹面をなすものがある。端部の多くは後者であり、前者の特徴を持つ端部は第38図50の1点のみである。外面調整は一次調整のタテハケのみで、ハケは基底部に対し垂直方向で左に傾くもの（第38図49、50、52）と、右に傾くもの（第37図39）とがある。内面調整はヨコハケを施すもの（第37図39、第38図49、50）と、第38図52のように、ナデを施すものがある。

底部 第38図62、64、65、66は底部の破片であるが、64の外面には一次調整のタテハケが見られる。64、65、66の内面には指押さえによる底部調整が見られる。62の底部端面には棒状圧痕が見られる。器壁の厚さは厚手のもの（64・65）と、薄手のもの（62・66）とがある。

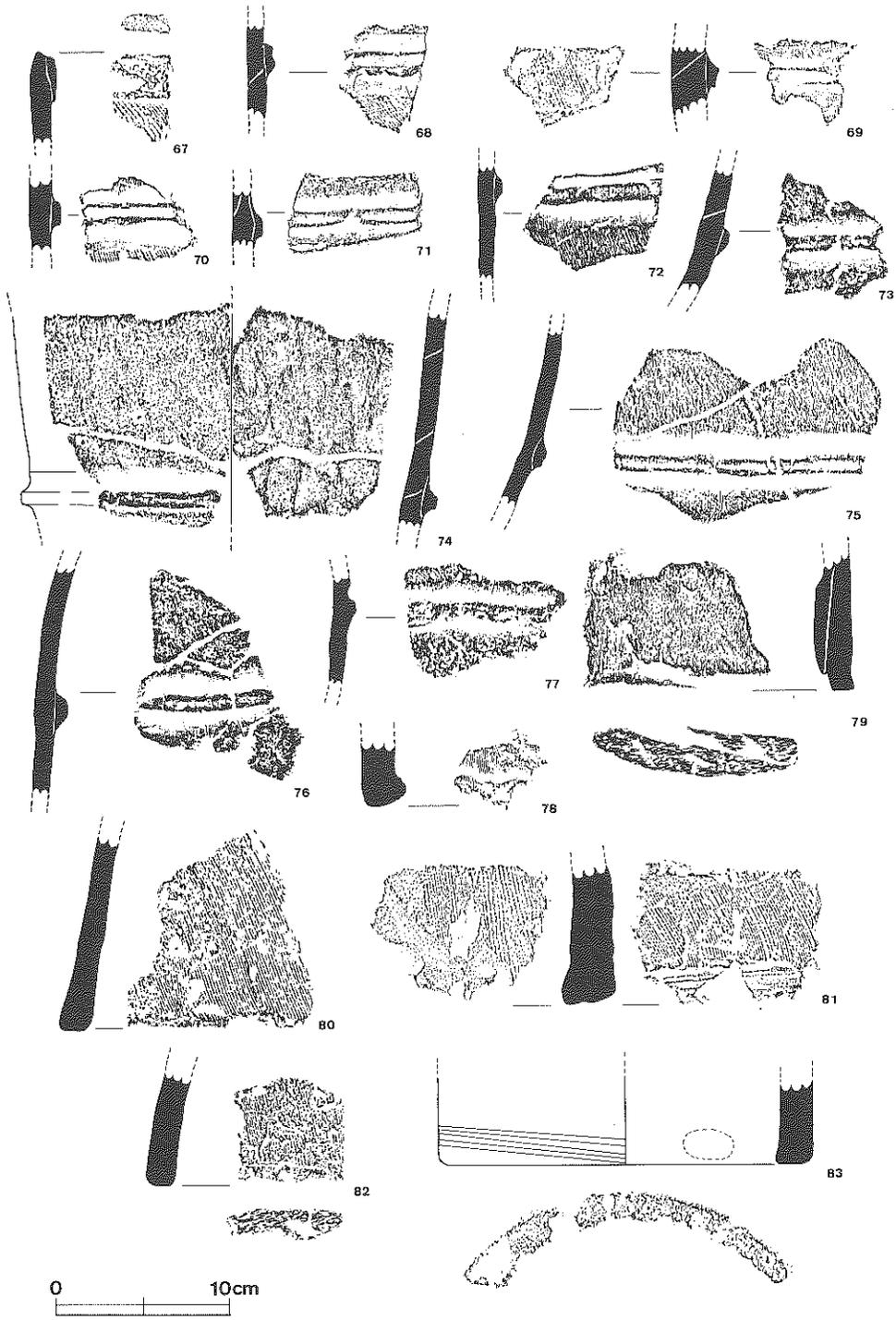
調整 外面調整は総て一次調整のタテハケのみである。ハケは底部に対して垂直方向で左に傾く。但し第37図39だけは反対に右に傾く。ハケメの条線は1cm当たり7～9本であり、比較的密である。内面調整はハケを施すものと、ナデを施すものがある。



第37图 円筒埴輪実測图 (Ⅱ類—a)



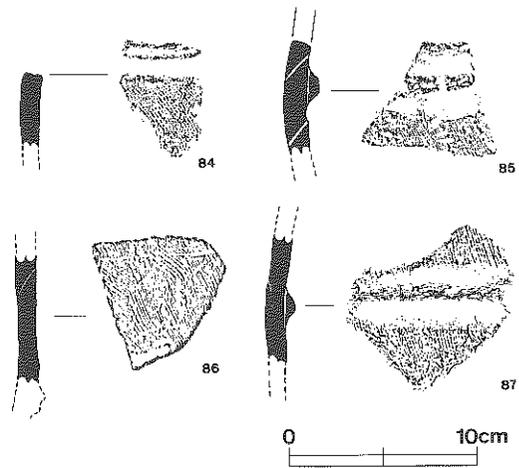
第38图 円筒植輪実測図 (Ⅱ類-a)



第39図 円筒埴輪実測図（Ⅱ類—b）

タガ・スカシ タガの断面形態は、突出度が低い台形のもの、上面が凹んだ台形（いわゆる「M字タガ」）と、断面三角形のもの（第37図46、48、第38図60）がある。断続ナデの上にナデを施す技法（第37図44、48）も見られる。スカシは円形である。

焼成 色調は黄灰色又は灰色であり、焼成は良質で硬く焼き締まっている。須恵質のもの（第37図47、第38図58）もある。黒斑を持つものは認められない。



第40図 円筒埴輪実測図（Ⅱ類一b）

胎土 直径1.5～3.5mmの砂粒（石英と長石か）を多量に混入している。

出土地区 03—1では23%、03—2の墳頂部では2%、段築の平坦面上は1%、03—3は0%、03—4では0.6%出した。平成元年度の堤の調査ではこのⅡ類一aが主に出土し、63年度の後円部の調査でも若干出土しているが、60年度の外濠の調査では出土していない。

（Ⅱ類一b）

口縁部 第39図67は口縁に貼付突帯を施すもので、他の型式にはない。これは一次調整のタテハケを施した後、幅4.2cmの粘土紐を貼りつけ、内外面と端部をナデで作っている。第40図84は直線的に立ち上がる形態で、外面は一次調整のタテハケを施し、内面と端部にはナデを施している。

底部 第39図78～83は底部の破片である。79、81は底部の粘土紐の接合痕を明瞭に残すものである。これらは断面に縦に接合痕が見られるため、単一の粘土紐だけでなく他の粘土が付加されている可能性がある。81は端面に棒状圧痕が見られる。外面の調整は一次調整のタテハケを施し、内面はナデを施すものと、タテハケを施すもの（81）とがある。81と83は外面はヨコハケを施し、内面は指頭によって押さえて底部調整を行っている。

調整 外面調整は一次調整のタテハケのみで、底部に対して垂直方向で左に傾く。ハケメの条線は1cm当たり7～9本で比較的密である。内面には大半はナデを施し、第39図69、81はタテハケを施している。破片が小片であるため、ハケの連続性は分からない。

タガ・スカシ タガには断面台形、いわゆる「M字タガ」（第39図68）、断面三角形（87）のものがある。タガは一次調整の後貼付し、ナデを施している。スカシは円形である。

焼成・胎土 色調は淡褐色である。焼成は不良でやや軟らかく、須恵質のもの、黒斑を有するものは認められない。胎土はおおむね精良である。

出土地区 03—1では出土していないが、03—2の墳頂部では7.5%、段築上では25%出土している。また03—3では出土していないが03—4では5%出土している。

Ⅲ類 外面調整が一次調整のタテハケのみであり、ハケメの条線が1cm当たり4～6本と比較的疎なものをⅢ類とした。この中で、焼成の良不良で更にa・bに細分した。以下にそれぞれの特徴を述べる。

(Ⅲ類—a)

調整 外面調整は一次調整のタテハケのみである。ハケは底部に対して垂直方向で左に傾くが、第41図90は右に傾いている。ハケの連続については確認できない。ハケメの条線は、1cm当たり4～6本で、比較的疎である。

タガ・スカシ タガの断面形態は低い台形を呈するものに限られる。タガの成形は一次調整の後に粘土紐を貼りつけ、その上下をナデつけている。タガの上面のナデは弱く、凹むものは認められない。スカシは円形を呈すると思われる。(第41図89)

焼成 色調は暗褐色を呈し、焼成は良好で硬い。須恵質のものは認められず、黒斑を有するものも認められない。

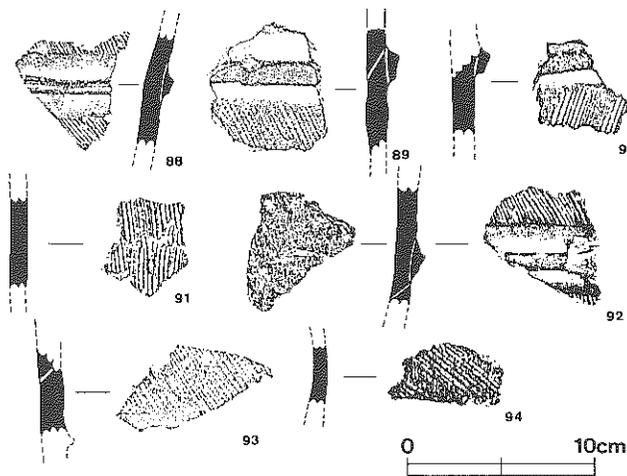
胎土 直径2～3mmの砂粒を少量混入している。砂粒には白色で半透明のもの(石英か)と、灰白色で不透明なもの(長石か)などがある。

出土地区 平成3年度の調査では03—1から1点だけ出土しているが、過去の調査でも、後円部のトレンチから若干出土している。

(Ⅲ類—b)

口縁部 口縁部は直線的に立ち上がり、外面には一次調整のタテハケのみを施す。内面はヨコハケを施す。口縁端部にはナデを施すが明瞭な凹面は呈さない。(第42図95)。

底部 第42図111、113、114は底部の破片である。外面は一次調整のタテハケを施している。内面調整については、111、114は内面にナデを施し、113はタテハケを施している。底部調整については、111、114には内面の底部下端に指頭による押圧が認められ



第41図 円筒埴輪実測図(Ⅲ類—a)

る。また113の底部端面には棒状圧痕が認められる。114の底部下端から2.7cmの所に底部と平行に凹線が認められる。これは一次調整の後、篋でひくか、あるいはイネ科の植物の茎を押しあててつけたと見られるが、その性格については分からない。

調整 外面調整は一次調整のタテハケのみを施し、ハケは底部に対して垂直方向で左に傾く。ハケメの条線は1cm当たり4～6本で比較的疎である。また第42図102、112を見ると、ハケの連続性は認められない。内面調整についてはナデを施すものが大半であるが、95と113はハケを施している。

タガ・スカシ タガの断面形態については、第42図96、112のようにやや高い突出度を持つ台形のもの、99、101のように突出が低く偏平な台形のもの、そして103、104、107のように断面三角形のものがある。全体的突出が低く、粗雑な作りである。スカシについては、97、98、110のような円形のもの、100のような長円形のものがあるが、他の形態のものは認められない。

焼成 色調は乳白色のものと淡橙色のものがある。焼成は不良でやや軟らかく、須恵質のものは認められないが、黒斑を有するものも認められない。

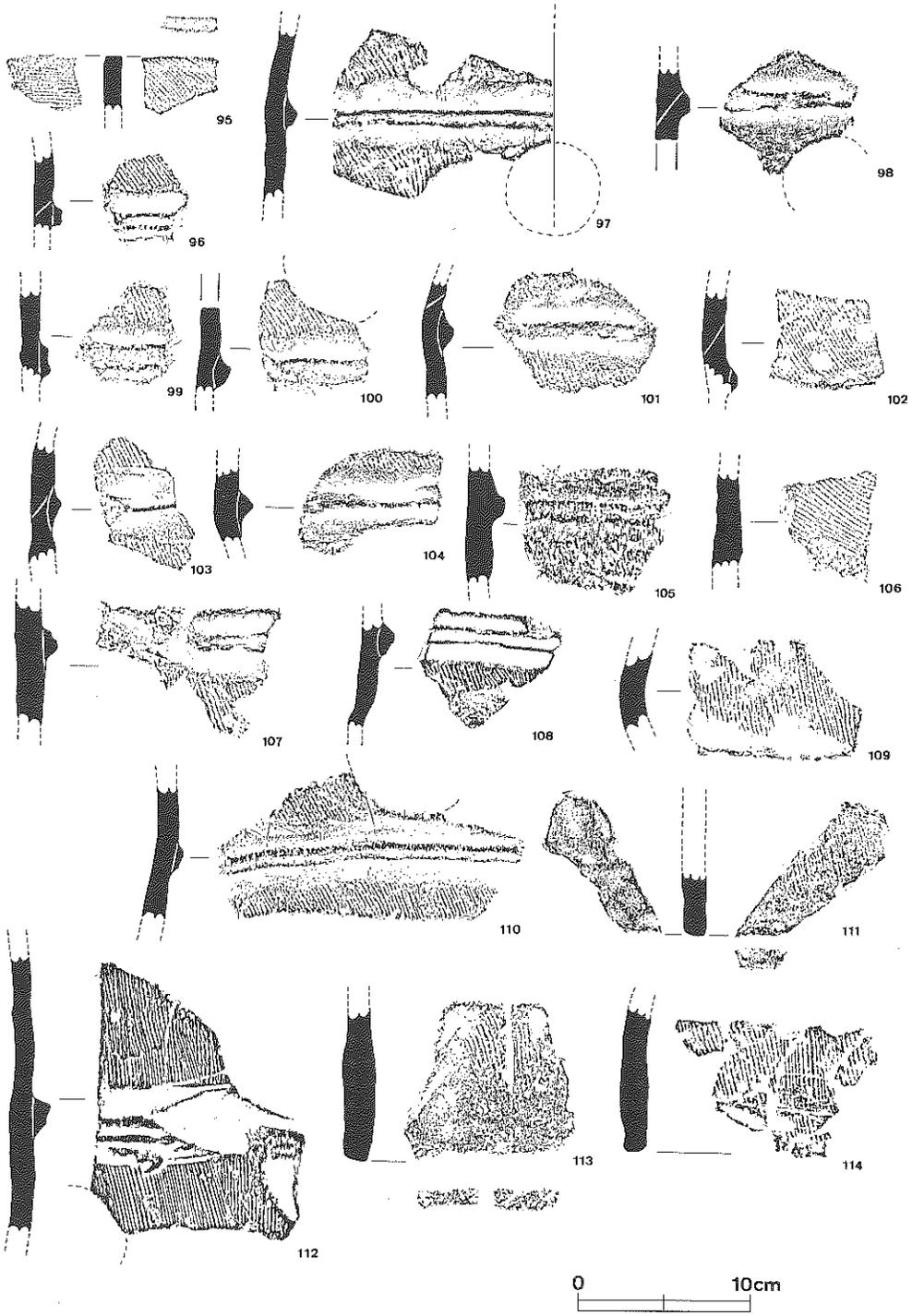
出土地区 03—1では23%がこの型式である。03—2の墳頂部では約8%、段築の平坦面上では3%がこの型式である。03—3ではI類が100%を占めたためこの型式は認められず、造り出し部の03—4では9%出土している。この型式は62年度の後円部の調査でも出土している。平成元年度の堤の調査では若干出土している。60年度の外濠の調査では出土していない。

朝顔形埴輪 第43図115～121は朝顔形埴輪の破片である。小さな破片のみの出土であるので全体の復元はできなかった。以下にその特徴を述べることにする。

成形 口縁部は外側上方に向かって外反する。第43図121は疑口縁を含む破片である。幅約3.7cmの粘土紐を巻き上げて作っている。118と119は頸部の破片である。118の頸部のタガは断面台形だが、119のタガはいわゆる三角突帯である。体部については他の普通円筒埴輪と識別することは困難である。また法量については、破片が小片なため知ることができない。

調整 外面は一次調整のタテハケのみであり、ハケメの条線は1cm当たり7本である。但し第43図116にはハケメは見られない。タテハケの傾きは3種あり、底部に対し垂直方向で左に傾くもの(119)、右に傾くもの(121)、底部に対し垂直に施すもの(115、117、120)がある。内面調整については116のようにナデを施すものと、121のようにハケを施すものがある。また121にはハケの上に指頭圧痕が見られる。

焼成 色調は黄褐色のもの(115、117、120)と、肌色のもの(116、118、119、121)とがある。焼成はすべて不良で軟質のものである。須恵質のものは認められない。しかし、黒



第42図 円筒埴輪実測図 (Ⅲ類—b)

斑を有するものはない。

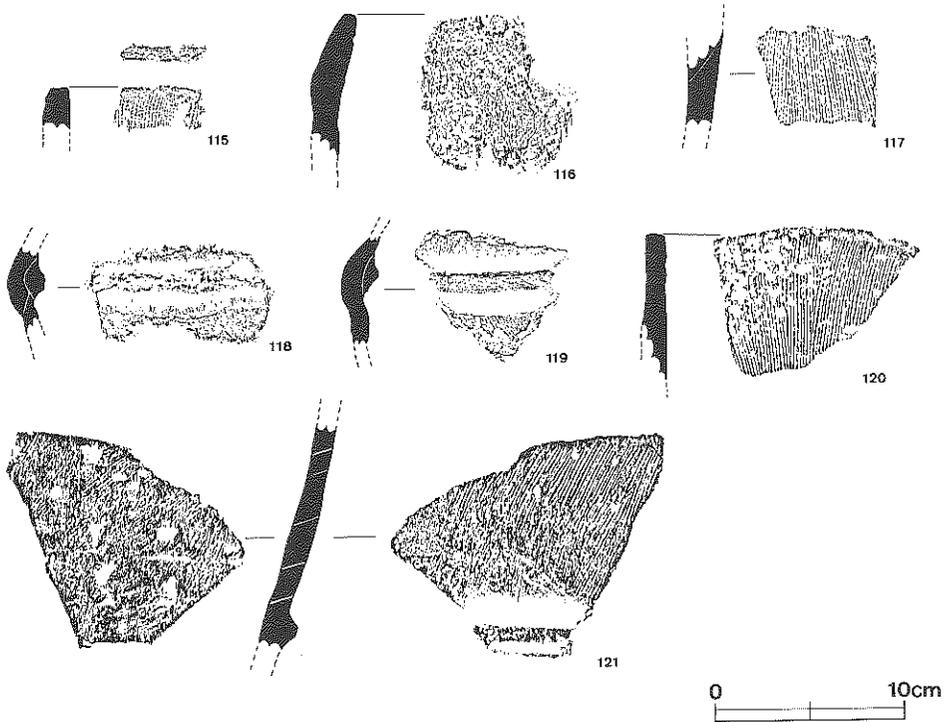
胎土 第43図115、117、120の胎土はおおむね精良だが、116、118、119、121は白色半透明（石英か）の2～5mm程の小礫や砂粒を多く含んでいる。

出土地区 115、117、120はⅡ類—bに似た色調、胎土、調整を示すため、普通円筒埴輪と識別することができないが、他の肌色のものは色調、胎土に特徴があるため、抽出することができた。以下にその成果を示す。

後円部の03—1では31%、前方部の03—2の墳頂部では約3%、03—2の段築平坦面上では1%、03—3では0%、造り出しの03—4では3%、それぞれ出土している。

形象埴輪 第44図122—124は形象埴輪の一部である。動物埴輪の脚部らしいが、その形態を知ることはできない。また平成3年度の外濠の調査では、家形埴輪かあるいは盾形埴輪の一部と見られる埴輪片が出土している。後者についてはあらためて報告するので、ここでは前者の報告のみを示すこととする。

成形 風化が進み、表面の剥落が激しいなど遺存状態が悪いために調整、粘土紐の幅等は観察できない。122、123は直径約7.4～7.6cm程の円筒形に作っている。底部内面は変形して内側にせり出している。124は直径約12cmの円筒形に作っている。底部内面はやはり変形して内側にせり出している。また外面には面取りを施している。



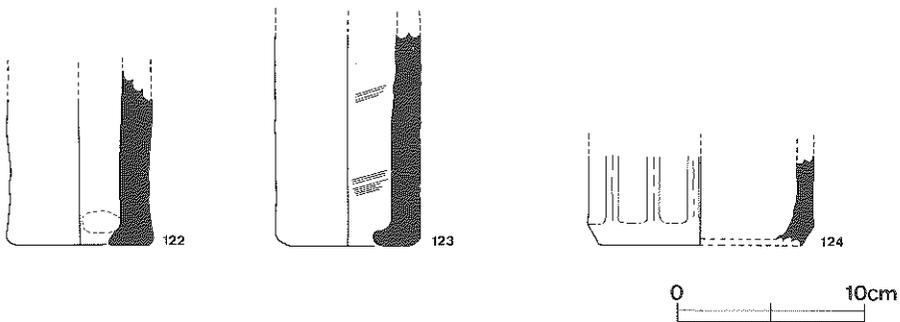
第43図 朝顔形埴輪実測図

調整 風化していてほとんど観察できないが、124は縦方向のナデを施している。また123の内側には部分的にヨコハケを施している。

焼成・胎土 色調は淡褐色である。焼成は不良でもろい。胎土はおおむね精良であるが、1～3mmの白色不透明の砂粒（長石か）を含む。

	新 旧	62	第11集—10	86	第11集—31
34	第15集—9	63	第15集—6	88	第15集—8
36	第11集—16	64	◇ —4	90	第11集—13
44	第15集—1、5	65	◇ —2	91	◇ —28
49	第11集—2	66	◇ —3	92	第13集—6
50	◇ —1	73	第13集—2	94	第11集—33
53	◇ —12	74	◇ —7	108	◇ —25
54	◇ —5	75	第11集—21	110	第15集—7
55	第13集—3	77	◇ —22	112	第11集—4
58	第11集—17	79	◇ —8	121	◇ —14
60	◇ —23	80	第15集—10		
61	◇ —3	82	第11集—9		

表1 埴輪新旧対照表



第44図 形象埴輪実測図

2 土 器

二子塚古墳の調査で出土した土器類には、須恵器・土師器・縄文土器・近世陶器がある。この内の大半は、昭和60年度の外濠調査において出土したもので、墳丘の調査では数点が出土したに過ぎない。以下、出土土器の様相について述べていきたい。

(須恵器)

須恵器には杯身・甕・壺がある。

杯身は2点を図示し得た。第45図125は、03—2トレンチから出土している。前方部墳頂の西側肩部付近で、互層に盛った盛土層の上面から出土した。この須恵器の出土した面から上層は、盛土の方法が異なっており、盛土のひとつの工程が終了した段階にまぎれ込んだものか、何らかの祭祀を行ったことが考えられる。したがって、この土器が古墳築造年代を示しているものと考えられる。たちあがりはほぼ垂直で、口縁端部には段を持つ。底部はやや丸みをおびる。口径10.7cm、器高5cm。約50%が残存している。^(註11)陶邑編年のTK23型式もしくはTK47型式に併行するものと思われる。126は周堤上の表採品である。短かく内傾するたちあがりを持つ。陶邑編年のTK209型式に併行するものである。

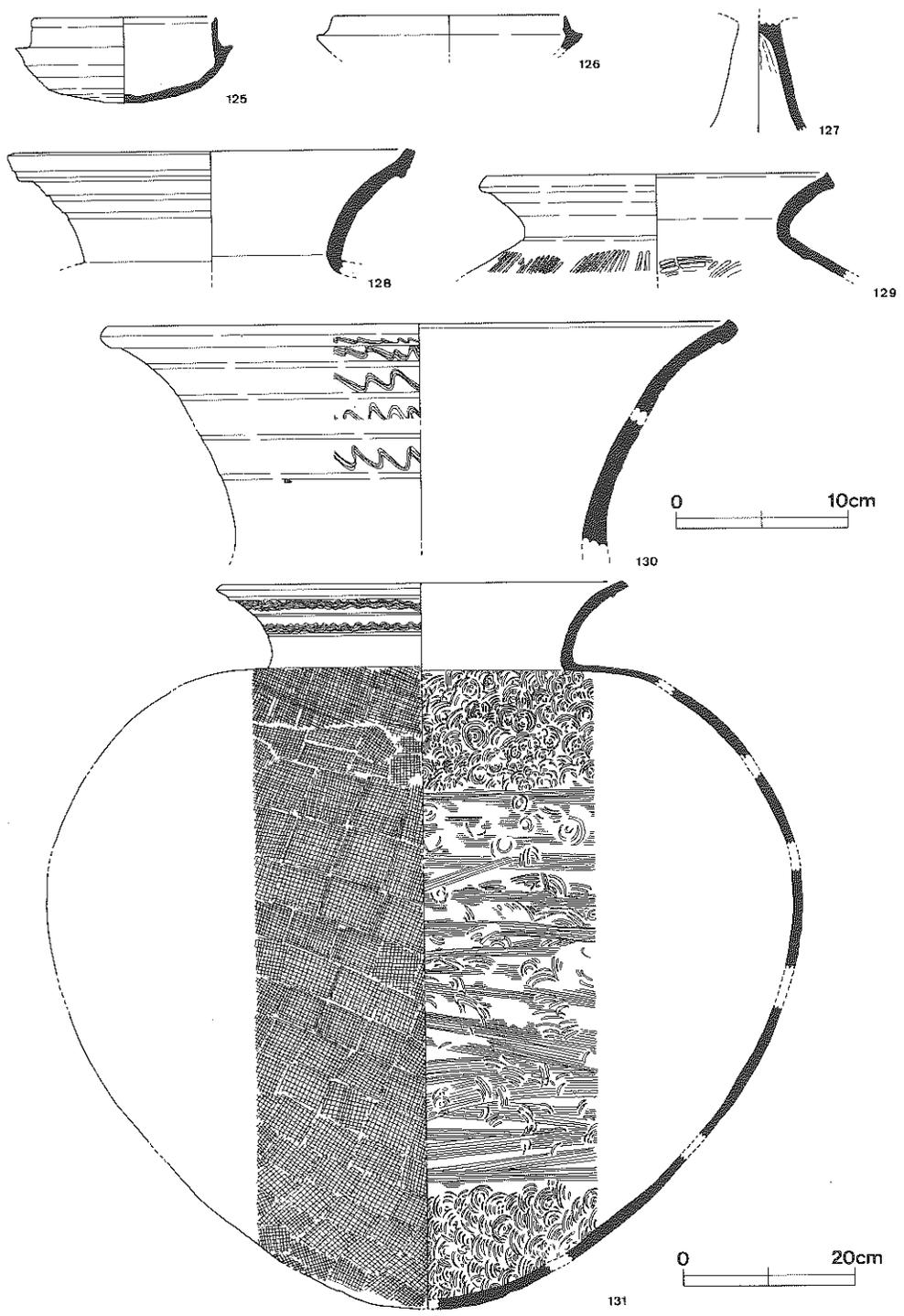
甕は6点を図示した。すべて昭和60年度の外濠の調査の際に出土したものである。第45図131は、大きく外反する口縁部を持ち、口縁端部の直下に1条の凸帯を持つ。頸部には2条の波状文と沈線を施す。体部外面は格子タタキ、内面は同心円文の当て具痕を残す。体部内面の中央は横方向のハケ調整を行ない。当て具痕を消している。この土器は全体の約6割程度が残るが、外濠外側斜面の濠底でまとまって出土しており、意識的に破壊・投棄された可能性がある。130は大きく外反する長い口縁部を持ち、口縁端部は肥厚する。口縁端部から頸部にかけて波状文と沈線を施す。128はゆるやかに外反する口縁部を持ち、口縁端部を内方に屈曲させて面を作っている。この面の下半に1条、頸部に2条の沈線を施す。129はくの字状に屈曲する口縁を持ち、口縁端部は面を持つ。第46図132はわずかに外反する口縁を持ち、口縁端部を外方に折り曲げて玉縁状にしている。頸部には刺突文を施す。

壺は3点を図示し得た。第46図133は壺蓋である。わずかに丸みのある天井部と、やや外方に広がる縁部からなる。頂部には宝珠形のつまみを持つ。134は口頸部中央から大きく外反し、口縁端部をわずかに内湾させる。口縁端部は平坦な面を持つ。136は長頸壺の体部であろう。

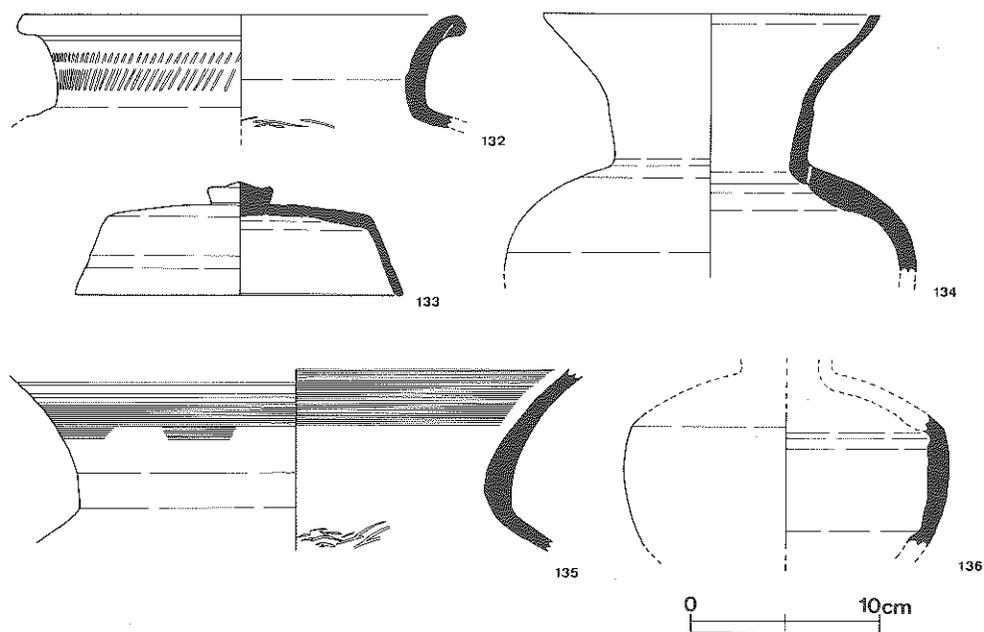
(土師器)

土師器には高杯・杯・中世の皿がある。

第45図127は前方部墳頂から出土した高杯で、脚部のみが出土している。内面にはしぼり



第45图 土器实测图 (須恵器・土師器)



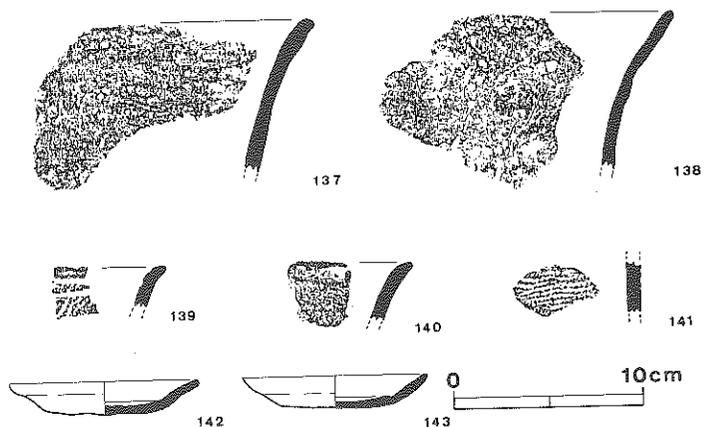
第46図 土器実測図（須恵器）

痕を残す。杯は図示できなかったが、内面にヘラミガキを施す。外濠から出土している。

土師器にはこのほかに皿が2点出土している。いずれも03—3トレンチの墳頂部小ピットから出土している。16世紀末頃のものと思われ、前方部墳頂において何らかの祭祀を行なったものであろう。

（縄文式土器）

周堤の01—2トレンチ南端の地山直上黒色土層から約20片の縄文式土器がまとまって出土



第47図 土器実測図（縄文土器・土師器）

した。器形は粗製深鉢が主である。細片の中には口縁部内面に沈線と縄文を施したもの（第47図139）、体部外面に縄文を施すものがある。時期的には縄文時代後期に比定されるものであろう。堤の盛土中に含まれた遺物の可能性が高い。

(小 結)

以上、土器の概要について述べてきた。全体的に土器の出土量が少なく、また確実に遺構に伴うものが少ないため、古墳の築造年代を決定するには若干困難な面がある。しかし前述したとおり、前方部から出土した須恵器の杯身が、古墳の年代を示すものと考えてよいものと思う。そしてこれは埴輪の年代観とも矛盾しない。この須恵器杯身が、陶邑編年のTK23型式もしくはTK47型式に併行することは先に述べた。このTK23型式・TK47型式については、西暦500年前後に比定する意見や、両型式とも5世紀代とする意見があり、実年代に関しては意見の別れるところである。現在のところいずれの意見も根拠は薄弱であり、ここでは型式名を述べるに留めたい。

その他の土器は、主に外濠から出土しているが、6世紀後半から7世紀に至る土器が多い。これらの土器は、古墳の追葬に関わるものもあろうが、それと共に古墳の南側にある寺界道遺跡との関連も考えたい。^(註12)

縄文式土器については、やはり寺界道遺跡において縄文時代晩期の遺構・遺物が検出されており、近隣に縄文時代後期の遺跡も存在しているものと思われる。

3 金属器・石器

(金属器)

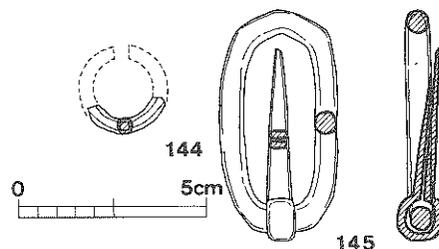
金属器は2点出土している。金環の破片と鉸具であるが、いずれも遺構に伴うものではなく、墳丘流出土や表土中からの出土である。

金環(第48図144)は、後円部東側斜面の62—2トレンチから出土している。全体のおよそ3分の1が残存している。断面隅丸方形の鉄芯に銅板を被覆し、アマルガム法により鍍金したものである。断面形態は円形で、直径4mmを測る。

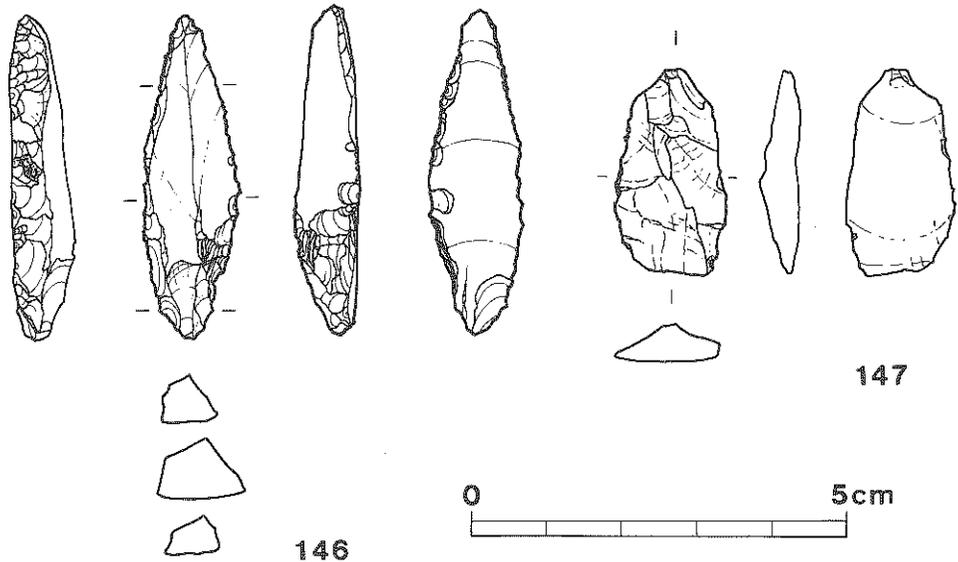
鉸具(145)は後円部03—1トレンチ表土中より出土した。環は、断面円形の鉄棒を用い、長さ5.7cm、幅3cmを測る。環の先端はわずかに三角形を呈し、刺金の溺まる基部は直線状になっている。刺金は両端の尖った鉄板の中央付近を輪にし、環と溺めている。刺金の長さは5.1cmを測る。

(石 器)

石器は、先土器時代のナイフ形石器と剝片がそれぞれ1点ずつ出土している。ナイフ形石器は、前方部03—2トレンチの墳丘盛土中から出土し、剝片は前方部墳頂で表採した。この剝片もナイフ形石器と同様に盛土中に含まれていた



第48図 金属器実測図



第49図 石器実測図

可能性が高い。

ナイフ形石器は、黒曜石を石材としている。石材は透明感のある黒色を呈し、石材中にはすじ状の不純物と一部に異種の砂粒を含む。器長43.2mm、器幅12.4mm、器厚8mmを測る。器面は風化作用を受けている。縦長剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器である。

剥片は、茶色を呈するチャートを石材としている。長さ27.6mm、幅14.8mm、厚さ4.6mmを測る。ナイフ形石器と同様に、縦長剥片を素材としている。

(小 結)

以上金属器と石器について述べてきた。金環については、石室の開口方向と考えられる後円部東側斜面から出土しており、また形態的にも古墳の副葬品であった可能性が高い。鉸具は刺金の形態が特徴的であり、現在のところ類例を知ることができなかった。このため、時期的には古墳より新しい段階のものである可能性も考えられ、この鉸具が古墳の副葬遺物か否かは判断できない。

ナイフ形石器は、南山城地域では類例が少なく、城陽市芝ヶ原遺跡と八幡市金右衛門垣内遺跡・美濃山荒坂遺跡の3例が知られるのみである。^(註13) また、黒曜石製のナイフ形石器は、近畿地方においては現在類例が知られていない。肉眼観察では、石材は信州系の黒曜石である可能性があり、^(註14) 石材の移動という面からも貴重な資料と言えよう。

(註)

- 註1. 「京滋バイパス関係遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第7冊、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、1987。
- 註2. 「寺界道遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集、宇治市教育委員会、1987。
- 註3. 「羽戸山遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第2冊、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、1982。
- 註4. 「宇治二子山古墳発掘調査報告」『宇治市文化財調査報告書』第2冊、宇治市教育委員会、1991。
- 註5. 「宇治遺跡群Ⅰ」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第11集、宇治市教育委員会、1988。
- 註6. 梅原末治「五箇庄二子塚古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第4冊、京都府、1923。
- 註7. 『鏡と古墳』一景初四年鏡と芝ヶ原古墳一、京都府立山城郷土資料館他、1987。
- 註8. 「久津川遺跡群発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第15集、城陽市教育委員会、1986。
- 註9. 註6文献。
- 註10. 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64巻第2号、1978。
- 註11. 田辺昭三『陶器古窯止群Ⅰ』、平安学園考古学クラブ、1966。
- 註12. 註2文献。
- 註13. 中川和哉「淀川流域の旧石器文化の一樣相」『京都府埋蔵文化財論集』第2集、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、1991。
- 註14. 鈴木忠司氏、中川和哉氏の教示による。

VII 考 察

1 墳丘の復元と築造企画

(墳丘の復元)

二子塚古墳は、河川氾濫による埋没や、後円部の削平により大きく原形を変更されている。また調査においても、河川堆積の厚い層に阻まれ、古墳の基底まで掘削することができなかった。このため正確に墳丘規模を復元することは困難と言わざるを得ないが、現在手許にある資料をもとに復元を試みてみたい。

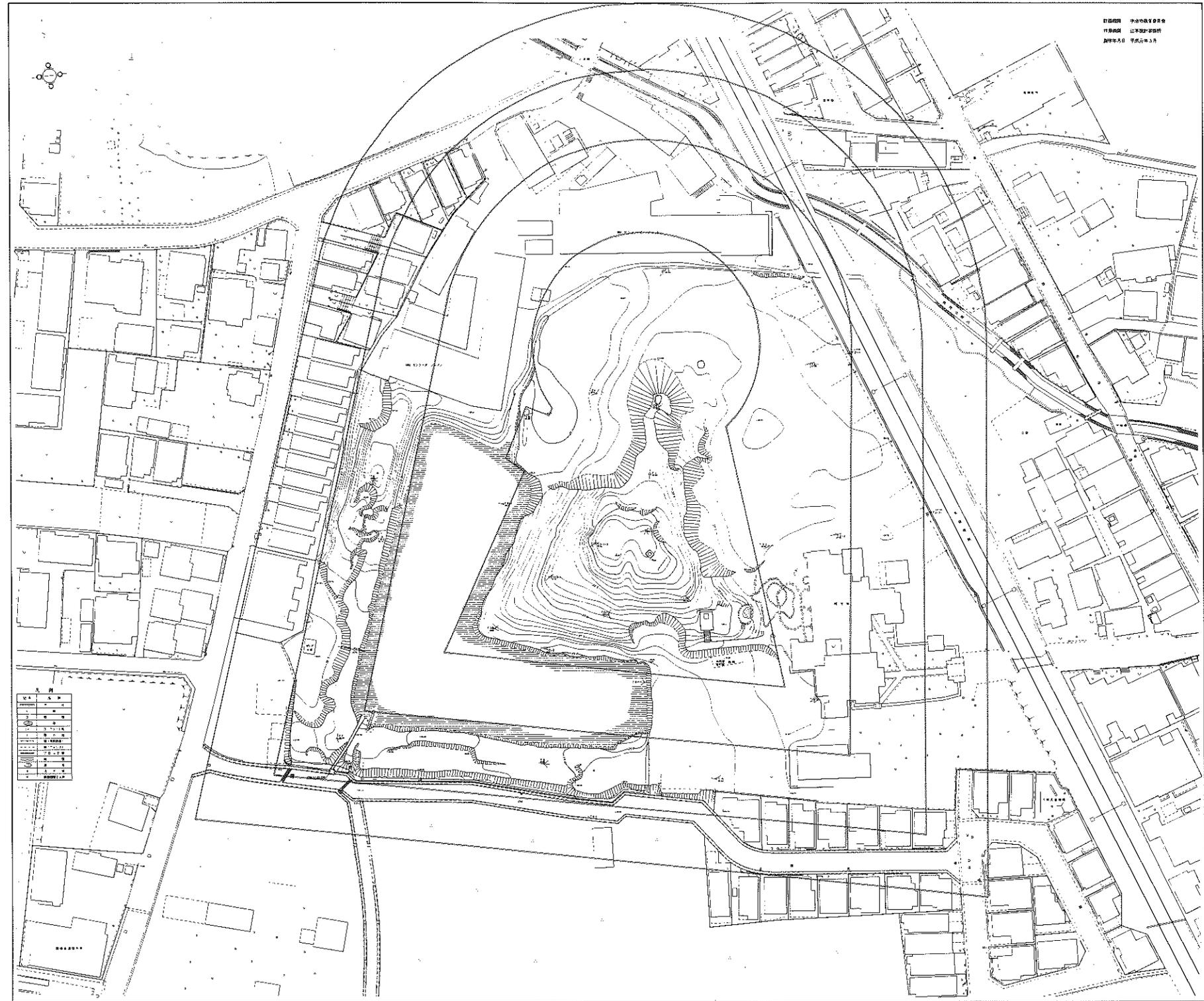
段築 調査によって明らかになった段築テラスは、前方部西側斜面のみである。このテラスの標高は約28.5mで、後円部基礎礫群掘方の上端のレベルとはほぼ一致する。このためこの標高で盛土作業の工程の区切りがあることはほぼ間違いないであろう。

さてこのテラスより下部の段築数であるが、基底の標高が明らかになっているのは、堤の外濠側部分だけである。この標高は約20mである。外濠の深さについては、城陽市車塚古墳などのように内濠より浅いものも多く、このことから判断すると墳丘の基底は標高20mかそれより低いレベルになるものと思われる。このレベルと調査で検出した段築テラスのレベル差は8.5m以上となり、他の前方後円墳などの例から見てももう1段のテラスを想定するのが自然であり、本墳は3段築成である可能性が高いと言える。

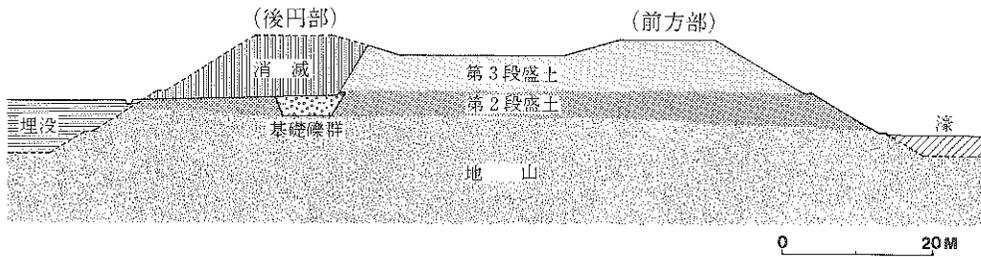
なお1段目テラスについては、本墳の調査の中で検出した地山の標高は23mから25.2mであり、この標高付近に1段目テラスがあるものと考えられる。しかし後円部62—2トレンチでは、標高23.9mから27mまで斜面を検出しているが、段築テラスを検出していない。また同じく後円部の03—1トレンチでも、標高23.4mから24.9mまで斜面を検出しているが、テラスを検出していない。このことから推測すると、1段目テラスは標高23m付近になるものと考えられる。これは1段目テラスの位置を、地山面の最も低い墳丘南西部に合わせ、墳丘をほぼ水平に築造することを企図したものかもしれない。

墳丘規模 後円部62—2トレンチでは、傾斜角38度の斜面を検出している。上述した段築の推測からすれば、2段目の斜面となる。後円部03—1トレンチで検出した斜面は、傾斜角約35度で、やはり2段目の斜面となる。この墳丘の傾斜で斜面を延長させると、後円部直径は62m程度と考えられる。

同様にして墳丘を復元すると、墳丘全長112m、前方部幅87m、前方部高16mとなる。また外濠までを含めた古墳全体では、堤の幅19m、外濠幅15m前後となり、その全長は218m



第50図 二子塚古墳推定復元図



第51図 二子塚古墳墳丘縦断面模式図

最大幅は202mとなる。しかし外濠については古墳の全周を巡るかどうかは不明であるため、この数字より小さくなる可能性はある。

(築造企画)

前方後円墳の築造企画については、先学による様々な視点からの研究が行なわれている。ここでは上田宏範氏と石部正志氏らのグループによる2つの方法論によって、二子塚古墳の築造企画を検討してみたい。

上田宏範氏の方法は、^(註1)前方後円墳主軸線と後円部円周とが交わる点をB・C、前方部稜線と主軸線の交わる点をP、主軸線上の前方部端をDとした場合、BC：CP：PDの3連比で古墳をあらわすものである。これに前項で復原した二子塚古墳の数値をあてはめると、62：10：40となり、ほぼ6：1：4の割合になる。この比率は上田氏が最も新しい段階に位置付けているE型式に属するのであろうか。

石部正志氏らの研究グループによる方法^(註2)は、後円部直径を8等分し、この8等分した1区画を「尋」で表現し、ここから前方部の区画数を割り出していくものである。これによれば二子塚古墳の後円部は1区5尋で1尋が155cmとなる。しかし前方部は約6.5区画となり、型式分類の中にうまくあてはまらない。

以上のように、2種類の方法論で築造企画の検討を試みた。上田氏の方法論では、6：1：4という比率になったが、上田氏の検討した古墳ではこの比率になるものがないようであり、前方部前長が長いという点でE型式の可能性が考えられた。また石部氏などの方法論では6.5区画となり、型式分類には合わなかった。ただ二子塚古墳が「剣菱形」とよばれる前方部を持ち、前方部中軸線付近が突出するならば、7区画の今城塚古墳などと同じグループに入るのかもしれない。

さて、それではかねてより二子塚古墳と強い関連が指摘されている今城塚古墳との比較を試みてみたい。

第52図は、今城塚古墳の実測図を二子塚古墳の縮尺より60%縮小し、重ね合わせたものである。まず墳丘については、今城塚古墳がかなり墳丘の破壊を受けているため明確ではない



第52図 二子塚古墳と今城塚古墳の比較（赤が二子塚古墳）

が、墳丘のラインはかなり類似しているように思える。しかし造り出しの位置など大きく異なる部分も認められる。周濠・堤・外濠については、今城塚古墳の方が後円部側が狭まっている。ただ前方部前面の堤と外濠の位置関係は類似している。

以上二子塚古墳と今城塚古墳との比較を試みたが、二子塚古墳の場合大部分が推定復元によるラインであり、今城塚古墳の場合、発掘調査によらない現況の測量図によるラインである。このため単純に比較するには問題が多いことは否めない。しかし、造り出しを除く墳丘のアウトラインについては、その類似性を指摘できるのではないかと考える。

（註）

註1. 上田宏範『前方後円墳』1979。

註2. 石部正志・田中英夫・宮川 渉・堀田啓一「畿内大型前方後円墳の築造企画について」『古代学研究』89、1979。

2 二子塚古墳の円筒埴輪について

(埴輪の時期の検討)

前述したとおり、二子塚古墳の埴輪はⅠ類からⅢ類—bまでの5型式に分類が可能である。Ⅰ類は外面調整が一次調整のタテハケの後に二次調整のヨコハケを施し、内面調整にはナデとハケを施す。タガの突出度は平均42であり、黒斑を有しない。従って川西編年のⅣ期、赤塚編年のⅡ期第2段階ないし第3段階に相当する。Ⅱ類は外面調整が一次調整のタテハケのみであり、内面はナデとハケを施す。またタガの突出度は平均25であり、断続ナデの上にナデを施す技法や底部調整が見られることなどから川西編年のⅤ期、赤塚編年のⅢ期第2段階に相当する。Ⅲ類は外面調整は粗いタテハケを施し、内面は主にナデを施す。またタガの突出度は25であり、底部調整も見られることから、川西編年のⅤ期、赤塚編年のⅢ期第2段階に相当する。

Ⅳ期とⅤ期の埴輪が共存する例は南山城地域では久津川芭蕉塚古墳に見られ、北山城では檜原の中期古墳である穀塚古墳に見られる。大和では高取町のイノラク5号墳でTK-47型式を伴ってヨコハケ主体の円筒埴輪に一部タテハケのみのものが混じる。河内では西墓山古墳、市野山古墳、葛井寺1号墳のようにⅣ期の古墳に見られると同時に、岡ミサンザイ古墳のようにⅤ期の古墳にも見られる。天野末喜、松村隆文両氏が古市古墳群で行った研究によるとⅣ期前半の西墓山古墳（一辺19m、方墳）のヨコハケとタテハケの比率は85：15である。Ⅳ期後半の市野山古墳（墳丘長230m、前方後円墳）のヨコハケとタテハケとタテナデの比率は65：32：3であり、葛井寺1号墳（径10m、円墳）では中型がヨコハケ、小型がタテハケであり、TK208型式を伴う。Ⅴ期の岡ミサンザイ古墳ではヨコハケとタテハケの比率が33：67となっている。

平成3年度の二子塚古墳の調査では原位置を保つ埴輪はなく、また破片も小さなものばかりで、古市古墳群のように個体数によって分析することができないため、破片数をⅠ類とⅡ・Ⅲ類の割合を百分率に表した。（表2）ヨコハケとタテハケの比率は76：24となる。これが即ち個体の割合に対応するとは考えていないが、およその傾向がつかめるのではないかと考える。平成3年度の調査では後円部からの出土は少なく、過去の調査の円筒埴輪がほとんどタテハケであることを考えると、タテハケの占める割合は3割を超えると考えられる。

Ⅰ類	76%	Ⅱ類	10%	Ⅲ類	8%	不明	6%
----	-----	----	-----	----	----	----	----

表2 平成3年度円筒埴輪出土比率

Ⅶ 考 察

これは市野山古墳の数値に近似し、またⅠ類のタガの突出度が平均42であることから、西墓山古墳と葛井寺1号墳の間に位置付けられる。従って単純に考えるならば二子塚古墳はⅣ期後半に位置付けられることとなる。しかしⅡ類、Ⅲ類はタガの退化が著しく、赤塚編年でもⅠ類とは少なくとも2段階新しく位置付けられる。先述した古市古墳群の研究では、底径で大型、中型、小型と分け、小型はⅣ期後半以降は必ずタテハケであるとしている。しかし二子塚古墳の埴輪で底径の分かるものは総て小型の範囲にとどまるため古市古墳群の加飾原理は単純にはあてはまらない。

(出土地区の検討)

平成3年度の調査では出土地区毎のそれぞれの型式の割合を算出することも行った。表3のグラフがその成果である。これから読み取れるのは、後円部ではⅠ類は出土していないということである。これは過去の調査とも符合する。そして前方部では墳頂部ではⅠ類が7割を占め、段築平坦面上では5割になっている。段築平坦面には墳頂から埴輪が転落している可能性が高い。従って段築平坦面上では本来Ⅱ・Ⅲ類が主に立て並べられていたのだろう。造り出し部でもⅠ類の出土が多い。また平成元年度の堤の調査では、内濠に転落した埴輪はⅡ・Ⅲ類であるが、62年度及び平成3年度の外濠の調査ではⅠ類が圧倒的に多い。

以上の事実から築造当初の円筒埴輪の配置を推定すると、後円部にはⅡ・Ⅲ類の埴輪を並べ、前方部墳頂部にはⅠ類と少量のⅡ・Ⅲ類を並べ、そして前方部段築上にはⅡ・Ⅲ類を主に並べた。また堤の上には二列に埴輪を並べ、内側にはⅡ・Ⅲ類を、外側にはⅠ類をそれぞれ並べたと考える。

(築造時期の検討)

以上の検討を踏まえて、築造時期を検討してみたい。

まず明らかにⅣ期とⅤ期の埴輪混在する状況を単純に時期差であると仮定すると、次の二つの仮説を立てることができる。

(1)主体部が横穴式石室であるので、Ⅴ期の時期に追葬を行ったと仮定して、その追葬時に新たに立てた。

(2)Ⅳ期に築造された古墳の後円部をⅣ期に再利用して横穴式石室を構築し、再び盛り土を行った。この時新たに埴輪を立てた。

また、この状況を工人集団の差であると仮定すると、次の仮説を立てることができる。

(3)Ⅳ期後半からⅤ期前半にかけては、工人集団によって技法が齊一でなく、Ⅳ期とⅤ期の埴輪が混在する。

(1)の仮説では一応埴輪の様相を合理的に解釈できるが、仮定の上に仮定を重ねており、説得力が弱い。また、前方部盛土直上から出土した須恵器杯身はTK23もしくは47型式であり、

青山2号墳からTK47型式の須恵器が出ていて横穴式石室が導入される事例が南山城での横穴式石室導入では最も古い例であるため、小型の古墳の導入に続いて大型古墳に横穴式石室が導入されるという横穴式石室導入の大勢に反することになる。

(2)では(1)のように仮説を重ねるきらいはあるが、(1)の石室に関する問題に一つの解答を与えている。こうした例は大和の石光山31、32号墳に見られる。31号墳は先行する32号墳の後円部主体部を破壊して横穴式石室を構築しているのである。しかし直径60mの大きな後円部の最上段を総て取り壊し、更に基礎礫群を設置して横穴式石室を構築し、再び後円部を築くことが實際上可能であろうかという疑問が残る。

では(3)はどうか。古市古墳群での研究でも分かるように、Ⅳ期後半からⅤ期にかけてはタテハケとヨコハケは混在する可能性が高い。しかし、TK23～47型式に築造時期を求め、この時期を両型式の混在期であるとする、(1)で指摘した横穴式石室の問題が残される。青山2号墳に先行して推定21mといわれる南山城最大の横穴式石室を築いたのであろうか。

三者三様に問題点を抱えているため、ここでは即断を避け、更なる考究を持つことにしたい。

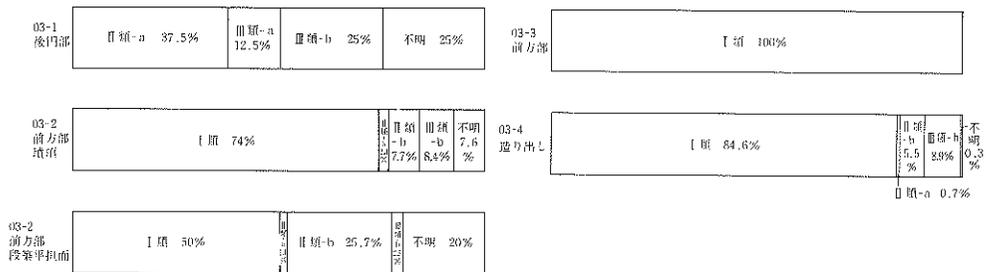


表3 出土地区別の各型式の比率

(註)
 註1. 天野末喜、松村隆文「埴輪の種類と編年1円筒埴輪—近畿」1992『古墳時代の研究』9 古墳Ⅲ埴輪 雄山閣。(タガの器壁からの高さを器壁との接合部の幅で除し、100を乗じて得た数値。)
 註2. 川西宏幸「円筒埴輪総論」1978『考古学雑誌』第64巻第2号
 註3. 赤塚次郎「円筒埴輪製作覚書」1979『古代学研究』第90号
 註4. この技法の出現をⅤ期の画期とする見解がある。鐘方正樹氏教示。
 註5. 前掲註1論文
 註6. 前掲註1論文より。底径40・30・20cm前後のものをそれぞれ大型・中型・小型とする。
 註7. 森正「近畿の横穴式石室地域論・京都」1990シンポジウム『横穴式石室を考える』発表要旨
 註8. 『五ヶ庄二子塚古墳昭和63年度発掘調査概報』1989宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第13集 宇治市教育委員会
 註9. 普通円筒埴輪のみの比率である。

3 五ヶ庄二子塚古墳と継体朝をめぐって

五ヶ庄二子塚古墳（以後、二子塚古墳）の当地での在り方をみる時、最も注意すべきは、忽然として本墳が出現する事態である。5世紀代、二子塚古墳出現を準備したと思われる規模の首長墓を持たない宇治地域に、6世紀を向かえると共に畿内有数規模を誇る後期前方後円墳、二子塚古墳が突如として築造されるのである。本墳の出現の有様は、一見、唐突の感を否めない。

ここでは、この点に注目しながら、二子塚古墳被葬者の性格について、若干の考察を試みたいと思う。

A、5世紀の山城地方

二子塚古墳が築造された6世紀初頭の状況を鮮明にするため、5世紀における山城地方の古墳動向を垣間見おきたい。

第54・55図は、山城地方の主要古墳の編年を示したものである。この図を見て明らかなように、5世紀代で優位なグループは、木津川右岸城陽市に展開する久津川グループと桂川右岸長岡京市に展開する長岡グループ、そして巨椋池北岸桃山丘陵に展開する桃山グループの3グループである。

久津川グループは、南山城盆地の北東部、木津川右岸域では最も平野が発達した城陽市平川を中心に展開する南山城地方最大の古墳群である。久津川グループの発展は、5世紀初頭の前方後円墳箱塚古墳（全長90m）を嚆矢として、丸塚古墳（全長80m）、山城最大規模の久津川車塚古墳（全長180m）そして芭蕉塚古墳（全長120m）へと5世紀を通じて大型前方後円墳が継続して築造され続け、当期では山城地方で最も安定した強力な首長権の存在が確認できる。この時期、他の南山城地方各グループは、前方後円墳・前方後方墳の築造を停止し、円墳や方墳に墳形を変化させる現象が認められる。このような現象は、久津川グループの南山城地方での覇権の確立の結果として一般的に認識される。すなわち、久津川グループによる南山城地方の政治的総合によって、他グループは強力な規制を受けたと思われるのである。そして、その覇権が最も強固に貫徹されたのは、久津川車塚古墳・芭蕉塚古墳が築造された5世紀中頃から後半にかけてであったといえる。

長岡グループは、山城盆地の南西端、長岡京跡南部に展開する古墳群であり、平地に定型化した前方後円墳が造られるのは、5世紀前半の今里車塚古墳（全長75m）からである。5世紀中頃には全長130mの前方後円墳恵解山古墳が築造される。恵解山古墳は、長岡京市・向日市を中心とする乙訓地方最大の古墳であるとともに、北山城地方最大の古墳でもある。南山城地方の久津川車塚古墳に対し、北山城地方を代表する地域首長墓といえる。しかし、

恵解山古墳以後には、目立った規模の古墳は築造されず、かわって桂川左岸、洛北嵯峨野に前方後円墳が築造されるようになる。長岡グループを中心とする北山城地方の覇権は、5世紀後半を向えることなく、秦氏が切り開いた嵯峨野へと移動をするのである。

従来、5世紀代の山城地方の地域勢力は、前述した久津川グループと長岡グループの2大勢力を核としていたと語られることが多かった。しかし北山城盆地南端、巨椋池を南に望む桃山丘陵にも大型前方後円墳が存在する。黄金塚1・2号墳を中心とする桃山グループである。但し、この2基の前方後円墳は、早くに未調査のままほとんど破壊されたため、具体的内容が知り得ない。古い地形図と、後円部が伊予親王巨幡墓として宮内庁によって管理されている2号墳の資料から、2号墳が4世紀末から5世紀初頭頃の全長120mを誇る前方後円墳で、1号墳は2号墳より新しい全長100m程の古墳であることが知られる。久津川グループ・長岡グループの首長墓と比べると、立地と周濠を持たない点での相違があるものの、規模的には、両グループの主要首長墓と充分比肩できるものである。桃山グループは、実体が良く知りえない面を差し引いても、充分注意に値するグループである。

このように、5世紀代の山城地方は、その前代の4世紀と比べると、地域ごとのまとまりが進み、大枠として南山城地方は久津川グループ、北山城地方は長岡グループ、桃山丘陵・山科盆地は桃山グループへとその主導権が統合されていたと見てよい。

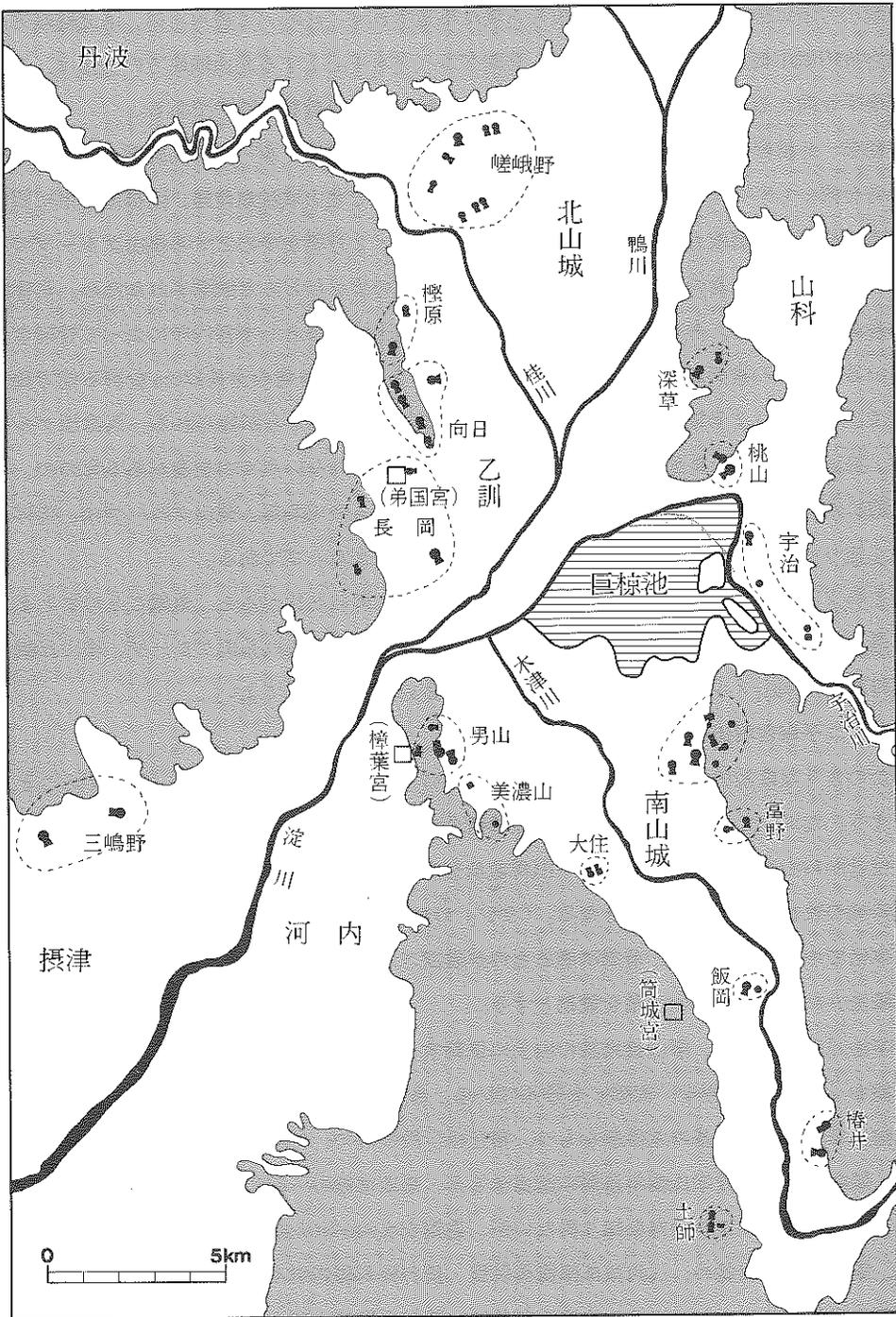
B、二子塚古墳出現前後の宇治

このような政治的状況下において、5世紀代の宇治はどうであったのか。瞥見することとしよう。なお、ここでいう「宇治」の地域概念は、国郡制下における宇治郡、すなわち宇治橋付近から山科盆地に至る範囲から山科盆地を除去した地域とする。いいかえれば、巨椋池東岸域の狭長な宇治市東部域となる。「ウジ」の地名起源となった所である。

宇治での古墳は、現在、前期に遡るものが確認されておらず、5世紀中頃から後半にかけて築造された宇治二子山古墳を最初とする。

宇治二子山古墳は、宇治橋東詰の山上に位置する2基の古墳の総称であり、南北に連なる北側を「北墳」、南側を「南墳」と呼んでいる。北墳は、直径40mの円墳で、粘土槨2基と木棺直葬1基の計3基の主体部をもつ。墳丘は二段築成で、外表施設として埴輪・葺石をもつ。埴輪は、川西宏幸氏編年Ⅲ期に該当するが、形象埴輪の一部に甕窯焼成品を含んでいる。副葬品は、盗掘により全容を知り得ないが、盗掘をまぬがれた最後に埋葬された主体部からは、銅鏡・玉類を始め、三角板革綴衝角付冑・長方板革綴短甲や鉄製武器類・農工具類など豊富な鉄製品が出土している。北墳の年代は、概ね5世紀中頃と判断できる。

南墳は、北墳に続いて築造された一辺34m程の方墳で、5世紀後半の年代が与えられる。主体部は、木棺直葬1基で、鋳留短甲2・鋳留衝角付冑1・挂甲1を始め付属武器や多量な



第53図 山城地方主要古墳分布図

鉄製武器・馬具などが副葬されていた。

宇治二子山古墳は、規模こそ中規模の円墳と方墳であるが、副葬品の質・量は大型前方後円墳の副葬品内容に匹敵するものであり、当期の宇治地域の首長墓として良いものである。

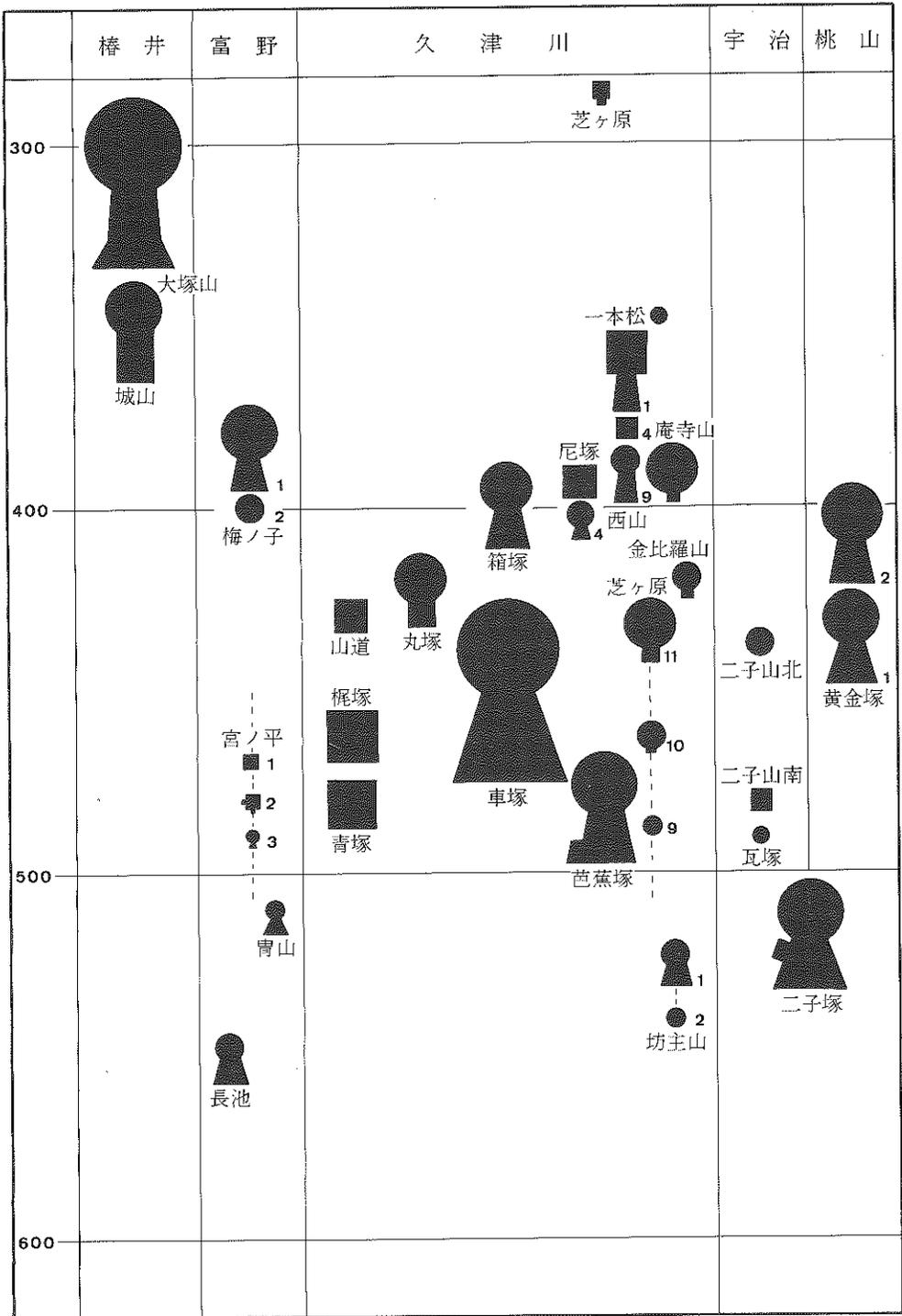
宇治二子山南墳が築かれた5世紀後半、北方1.5kmの岡本の平野に瓦塚古墳がほぼ時を同じくして築造されている。瓦塚古墳は、直径30mの円墳で、外表施設として埴輪・葺石を備えている。埴輪は、川西宏幸氏編年のⅣ期に該当する。主体部は、中心主体部の襟櫓と第2主体部の木棺直葬である。盗掘により副葬品の全容は知り得ないが、中心主体部からは金・銀の頭金具を付す玉杖形金銅製品を始め多量なガラス小玉そして馬具が、第2主体部からは長頸鎌が出土している。武器類を多量副葬した宇治二子山古墳と比べると、その内容に著しい差異を認めざるをえない。

現在、上述した古墳が宇治地域での5世紀代の主要古墳であり、いずれも30~40m級の中規模墳である。これらの古墳が築造された5世紀中頃から後半にかけては、宇治の南隣りに展開する久津川グループが久津川車塚古墳・芭蕉塚古墳を盟主として強大化した時代であり、宇治の諸古墳が久津川グループの強い影響力の下に置かれていた状況が看取できる。すなわち、宇治二子山古墳・瓦塚古墳がその豊かな副葬品内容に比べて、中規模の円墳ないし方墳の粋を踏み出すことができなかったのは、南山城地方の他グループと同様に、久津川グループによる支配体制が強固に貫徹されていた結果と把握できるのである。

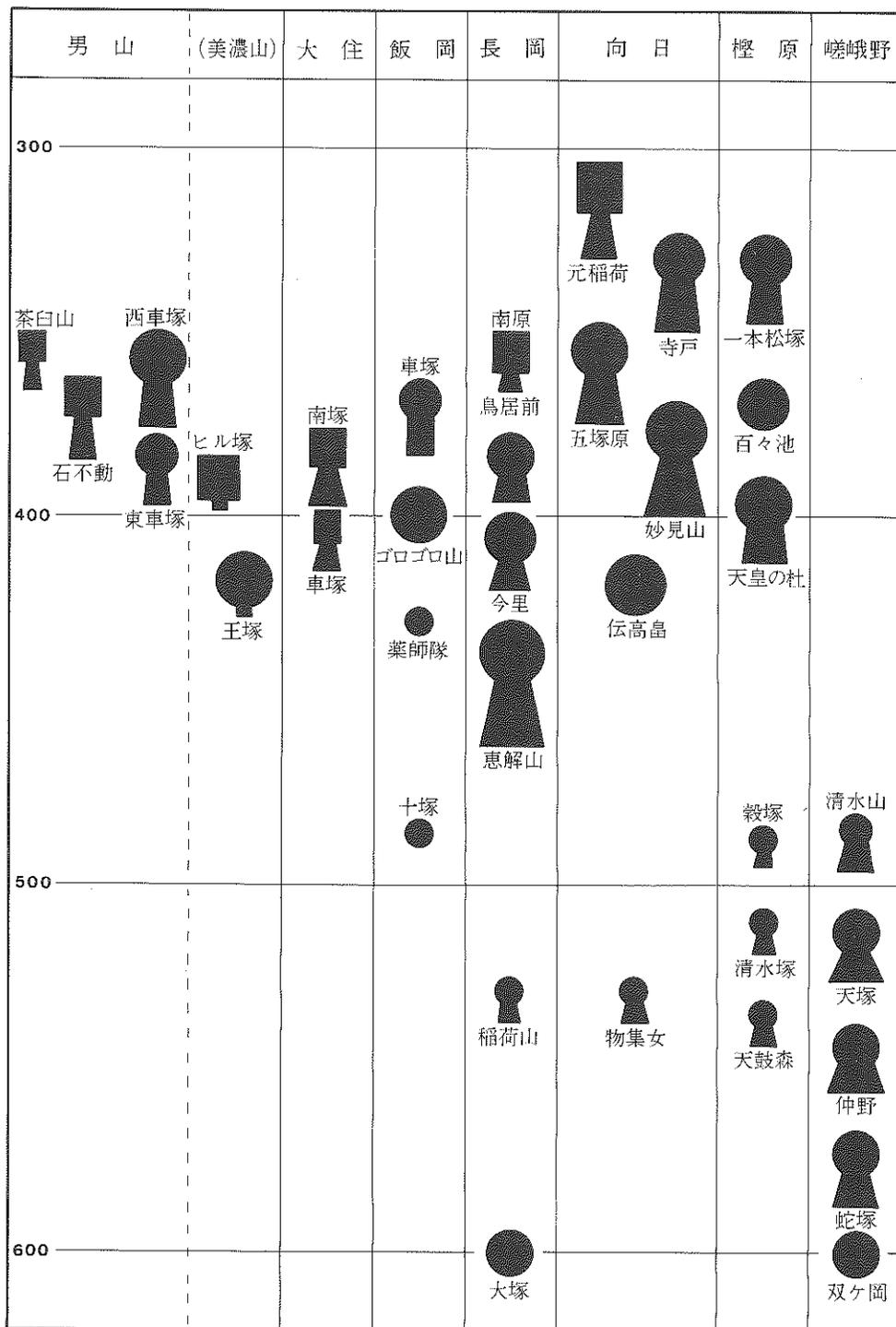
C、6世紀の山城地方と二子塚古墳

5世紀に南山城地方に強大な支配権を及ぼした久津川グループは、芭蕉塚古墳を最後に急速にその規模を縮小させ、6世紀前半では冑山古墳（全長25m）や坊主山1号墳（全長45m）などの小型前方後円墳に、わずかにその命脈を保つのみとなる。また、南山城地方他グループは久津川グループの覇権崩壊の後も、目立った規模の古墳を築造せず、6世紀に至っても5世紀の状況は維持されている。

このような状況の中で、大きく様変わりするのが宇治地域である。5世紀代では、中規模の円墳・方墳しか造りえなかったこの地域に、6世紀の幕開けと伴に墳丘全長112mを誇り二重周濠を具備する堂々たる前方後円墳、二子塚古墳が宇治地域北部に出現するのである。宇治での5世紀と6世紀との主要古墳の差は、余りにも大きい。また、二子塚古墳の築造とはほぼ軌を一にして、その東側丘陵上には小型円墳120基以上が密集する木幡古墳群が造墓活動を開始している。5世紀代、宇治地域が前述の首長墓以外の小型古墳をほとんど持たなかった状況を考えれば、二子塚古墳築造とともに始まる当地域の変容は、社会の基層部をも含めたものだったと思われる。そして、6世紀代山城地域最大規模を誇る二子塚古墳の築造と、隣接する久津川グループの崩壊とが、6世紀を境として見事に一致するのは、単なる偶然で



第54図 山城地方主要古墳編年図(1)



第55図 山城地方主要古墳編年図(2)

は決してなく、南山城地方の覇権が何らかの事情で急速に久津川グループから宇治へと移行したことを示すものであろう。

6世紀代、北山城地方では、長岡グループからその覇権が移行した嵯峨野グループが60～75m級の前方後円墳を継続して築造しており、安定した首長権がこの地に培われている。しかし、二子塚古墳とほぼ同時代と考えられる天塚古墳は全長70m程に過ぎず、6世紀前半での山城地方の地域支配は、宇治と嵯峨野が当地方を南北に分断していたとはいえ、宇治がより優位な状況にあったことは間違いない。

D、継体新王朝の成立と山城地方

このような古墳動向が認められる6世紀前半『記・紀』は注目すべき事件を載せている。継体王朝の成立である。

『日本書紀』は、武烈天皇没後、皇位継承者がなく皇統が絶えようとした異常事態を記す。そして、大伴金村らが応神天皇5世の孫オオド王を北陸から迎え入れ、この事態の收拾をはかったというのである。507年、オオド王は河内樟葉宮（大阪府枚方市）で即位する。継体天皇である。即位後、継体は大和政権の中枢である大和に直ちに入らず、山城地方に筒城宮（京都府田辺町）や弟国宮（京都府向日市）を次々と営み、20年の長きにわたってその居所としたのである。即位後の継体の行動も異常といわねばならない。継体が大和磐余玉穗宮に入るのは、没する5年前である。

継体朝については、継体自身の出自の信憑性を含めて、種々議論がある。ここでは、この問題に立ち入ることは止めるが、継体から新たに初まる王統がこの時成立したとするのが一般的な意見であろう。そして、大和政権内部の確執が継体の大和入りを20年も阻み続けた要因だったとされる。5世紀終り頃から6世紀にかけては、大王権の掃蕩をめぐる大和政権が大きく動揺していた時期だったといえるのであり、継体即位後しばらくの間も、その動揺は続くのである。

このように、久津川グループから二子塚古墳への南山城地方支配権の移行は、継体朝成立期と重複するのであって、南山城地方北西部・北山城地方南部・北河内地方は新王権動揺期の宮処として歴史に登場をするのである。

E、継体朝成立と二子塚古墳

二子塚古墳は、既に述べたように、継体の真陵とされる今城塚古墳（大阪府高槻市）と同様水をたたえた二重の濠をめぐるし、墳丘計画も今城塚古墳に極めて類似している。墳丘全長112mという規模は、5世紀代の大型古墳と比べると必ずしも大型前方後円墳の部類に入るわけではないものの、古墳の規模が縮小化を迎えた6世紀にあつては、山城地方で突出する規模を誇っている。二子塚古墳の規模の意味を明瞭にするため、同時期の大王墓との比較

を行なえば、二子塚古墳は今城塚古墳の3分の2規模となり、5世紀代山城最大の久津川車塚古墳が仁徳天皇陵古墳の約3分の1規模であったことを思えば、山城地方最高首長墓と大王墓との距離は、6世紀に至って急速に縮まったといえる。

このように、継体真陵の今城塚古墳と類似し、かつ大王墓と比肩しうる程の二子塚古墳が何故出現するかについては、その背景に継体朝成立という大和政権の変革が存在することを予測してまず間違いない。その事情を二子塚古墳の立地から少し考えてみたい。

二子塚古墳の位置する宇治市五ヶ庄は、宇治地域の最北部、山科盆地との接点にあたり、古く「木幡」と呼ばれた所でもある。古墳は、平野の西端に築かれており、その西方には北山城地方と南山城地方を分けた巨大な淡水湖「巨椋池」干拓地が広がっている。古墳は、この巨大な湖にその偉容を示すように造られており、墳頂からは巨椋池・山科盆地はもちろん、巨椋池を通して、乙訓地方や男山丘陵を一望のもとに見渡すことができる。すなわち、継体が宮を営んだ地帯は、十分に視界に入れることができる。

継体の擁立基盤が近江・越前・尾張を始めとする東国であったことは良く知られている。継体の本拠地が近江・越前であったのか畿内北摂津であったかの議論は別にしても、近江・越前は母方の本拠地であったし、尾張からは即位前に妃を娶っている。

二子塚古墳が強く意識する、巨椋池・山科盆地は、継体諸宮と彼の最大の支持基盤であった東国を結ぶ地帯である。古北陸道は、宇治・山科盆地を通り逢坂山から東国へと続いていた。宇治・山科はまさに東国への出口であり、東国からの入り口であった。

このような地理的条件が、継体朝成立期及びその後の王権動揺期において、継体の諸宮と彼の最大の支持基盤を結びつけておく死命線として、急速にクローズアップされたであろうことは充分に予測できるし、宇治・巨椋池・山科盆地の確保は、継体の王権安定にとって必須条件であったにちがいない。すなわち、継体朝成立前後における、宇治地域の重要性の高まりが、大和政権の動揺と相まって山城地方支配権の再編を誘発し、二子塚古墳が出現した可能性を考えたいのである。

一見、唐突に思える二子塚古墳の宇治での有様は、上述した可能性を踏まえて考えるならば、5世紀代にともに巨椋池を強く意識しながら山科盆地を支配領域とした桃山グループと宇治を支配領域とした宇治グループが統合される中で二子塚古墳を成立させたとするのも十分に可能であり、二子塚古墳の成立を期に、その東側に両地域最大の墓域木幡古墳群が造墓を開始するのは、この地域勢力統合の結果と思われる。そしてこの延長の中で宇治・山科が宇治郡として建郡されることとなった、と考えるのである。

6世紀初頭での継体朝成立という一大変革は、古代王権の画期であったばかりでなく、宇治にとっても新たな地域編成という地域史の中での画期であったにちがいない。

Ⅷ 総 括

(位 置)

二子塚古墳の所在する宇治市五ヶ庄は、宇治川右岸の微高地にあたる。古墳時代においては、西に巨椋池を臨み、東には北陸道が通る交通の要衝の地である。しかし二子塚古墳以前には大型古墳は築造されず、まさに突然に全長112mの二子塚古墳が築造されるのである。

(墳 丘)

ほぼ平坦な微高地に立地し、南に前方部を向けた三段築成の前方後円墳である。二重の周濠を持つ。墳丘全長112m、後円部径62m、前方部幅87m、前方部高16mを測る。外濠を含めた全長218m、最大幅は202mと復原することができる。

(外部施設)

墳丘表面は人頭大の葺石があり、墳頂部及び各段築テラスには円筒埴輪列が巡らされていたものと思われる。また前方部墳頂盗掘坑からは形象埴輪が出土しており、前方部墳頂の埴輪列の中には形象埴輪も並べられていたのであろう。また内濠及び外濠のいずれからも円筒埴輪が出土しており、堤の上には2列の円筒埴輪列があったものと思われる。そして外濠からは盾形埴輪と思われる形象埴輪が出土しており、堤の埴輪列には形象埴輪も含まれ、何らかの埴輪祭祀が行なわれている。

(埋葬施設)

埋葬施設は完全に破壊され、その具体的内容は知ることができない。しかし破壊時における梅原末治の報告や地元における聞き取り調査から、埋葬施設は横穴式石室であったと考えられる。そして調査によって長さ18m、幅9m、深さ2.8m以上の巨大な掘方を持つ基礎礫群を検出し、巨大な横穴式石室であったことが想像できる。

(築造年代と被葬者)

前方部墳頂盛土中から須恵器杯身が出土している。この須恵器は、陶邑編年のTK23型式もしくはTK47型式に比定でき、西暦500年を前後する時期に築造されたものと思われる。

この時期は、5世紀代を通じて造営されていた平川古墳群が終焉を迎える時期であり、また大王陵では河内の大古墳群が終焉を迎ようとする時期である。それまで大型古墳の築かれなかった地域に、突如として二子塚古墳が出現するのは、古墳時代の大きな歴史の転換と無縁のものではなく、むしろ積極的にその転換期に関わっていた権力者の姿が想像されるのである。

付載 1

二子塚古墳およびその周辺の古墳出土埴輪の蛍光X線分析

三 辻 利 一

1、はじめに

窯でしか焼成できない須恵器は窯跡を産地と考えることによって産地推定法の開発が可能となる。他方、窯跡が残っていない土器類については「産地」そのものが不鮮明であるため、「産地推定」という問題も少し後退する。

埴輪は古墳時代の前期では野焼きであり、後期になって窯で生産されるようになる。埴輪の窯生産は埴輪の大量生産につながると思われる。当然、この時期の埴輪の産地推定は可能である。しかし、筆者はいきなり埴輪の産地を問題にせず、一つの地域内で多数の古墳の埴輪を分析し、その結果を比較することによってどの古墳とどの古墳に同じ胎土の埴輪があるのか、埴輪胎土から古墳を分類してみようと考えた。これも埴輪の産地推定に結びつく基礎研究の一つである。このような埴輪の胎土研究の一環として、宇治市の二子塚古墳および、その周辺の古墳から出土した埴輪の蛍光X線分析の結果について報告する。

2、分析方法

埴輪資料は表面を研磨して付着汚物を除去したのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニール製のリングに入れ、約10トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ3～5mmの錠剤試料を作成した。

蛍光X線スペクトルの測定には理学電機製の波長分散型蛍光X線分析装置3270型機を使用した。分析値は測定された試料の蛍光X線の生強度を標準化試料の生強度で割った標準化値で表示された。標準化試料には岩石標準試料JG—1を使用した。

3、分析結果

二子塚古墳出土埴輪の分析値を表4にまとめてある。本来、これら埴輪の分類にはクラスター分析法が適用されるべきであるが、Rb-Sr分布図とNa因子の比較で明快に分類できたので、分布図上で分類を行った結果を示す。

I群の埴輪のRb-Sr分布を第56図に示す。比較的よくまとまって分布したので、これらを全部包含するようにしてI群領域を描いた。I群領域は長方形になっているが、I群のすべての埴輪を包含して、描き易いように描いただけで、長方形であることにとくに意味はない。したがって、この分布領域は定性的な意味しかもたないが、それでも、他の領域と比較する上にはきわめて有効である。

第57図にはII群の埴輪のRb-Sr分布図を示す。第56図のI群の場合と同様にしてII群領

域を描いてある。Ⅱ群の埴輪もよくまとまって分布しており、Ⅰ群の埴輪とは化学的特性が異なることがわかる。したがって、Ⅰ群とⅡ群は別の粘土を素材として作った埴輪であることは明白である。

第58図にはⅢ群の埴輪の Rb-Sr 分布図を示す。Ⅲ群の埴輪もよくまとまって分布しており、Ⅰ群ともⅡ群とも化学的特性は異なる。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ群は考古学的に肉眼観察によってそれぞれ分類されたものであるが、胎土分析の分類結果と完全に一致した。これら3群はそれぞれ別の粘土を素材にして作った埴輪であることが証明された訳である。第64図にはこれらの埴輪の Na 因子を比較してあるが、Na 因子でもこれら3群の埴輪は異なることがわかる。

第59図にはⅣ群の円筒埴輪と形象埴輪の Rb-Sr 分布図を示す。すべて、Ⅰ群の領域に分布することがわかる。ここで、Ⅳ群の埴輪胎土がⅠ群の埴輪胎土と同じであると速断してはいけない。第64図をみると、Na 因子ではⅣ群の埴輪はⅠ群の埴輪に対応しないことがわかる。

したがって、Rb、Sr 因子では類似しているものの、Ⅳ群の埴輪の胎土はⅠ群の埴輪の胎土とは異なる。この結果、二子塚古墳には少なくとも、4種類の胎土の埴輪があることが明らかとなった。また、形象埴輪の胎土は円筒埴輪の胎土と同じであることも立証された訳である。同じところで形象埴輪と円筒埴輪を作ったものと見られる。

第60図にはⅤ群の埴輪の Rb-Sr 分布図を示す。Ⅴ群の埴輪の胎土にはバラエティがある。Ⅰ群領域に分布することがわかる。第64図をみると、Ⅳ群は Na 因子でもⅠ群によく対応している。つまり、Ⅳ群は胎土からみるとⅠ群に他ならない。他方、Ⅵ群は Na 因子でⅢ群に対応しており、Ⅶ群もⅢ群の埴輪にほかならないことが判明した。

第62図にはⅧ群の埴輪の Rb-Sr 分布図を示す。すべて、Ⅰ群領域内に分布している。これらがⅠ群の埴輪と同質の胎土であるためには、Na 因子でも対応しなければならぬ。ところが、図4をみると、Ⅷ群の埴輪はⅠ群の埴輪には全く対応しないことがわかる。むしろ、Ⅳ群の埴輪によく対応する。つまりⅧ群の埴輪は胎土からみると、Ⅳ群の埴輪に他ならないことがわかる。

第63図にはⅨ群の埴輪の Rb-Sr 分布図を示す。Ⅰ群領域には分布するものの、Na 因子ではⅠ群に対応せず、Ⅶ群と同様、Ⅳ群の埴輪と同じ胎土をもつとみられる。

以上の結果、考古学的肉眼観察では9種類に分類されていた埴輪は蛍光X線分析では4種類にしか過ぎないことが判明した。しかも、考古学的分類と蛍光X線分析の分類が一致する場合が多く、他の地域でも同様のことがしばしばみつけられている。

二子塚古墳の4種類の埴輪のうち、Ⅱ群、Ⅲ群にはK、Rb量が多い。花崗岩類やその上に分布する土壌の分析データから、このような化学的特性をもつ土は宇治市周辺から大津市へかけての地域に広がっていると推定される。したがって、地元、宇治市周辺で作られた可

能性が高い。他方 Rb 量が少ない I、IV 群は大阪層群の粘土のもつ特性である。このうち、Na 量の少ない I 群は高槻市の新池窯群の製品である可能性をもつ。

次に、二子塚古墳の周辺にある古墳出土埴輪の分析値を表 5 に示す。

第 65 図には瓦塚古墳出土埴輪の Rb-Sr 分布図を示す。すべて、二子塚古墳の I 群の領域に分布することがわかる。第 69 図には、周辺の古墳の埴輪の Na 因子を比較してある。ここで注目すべき点はタテハケとヨコハケで Na 因子が明確に異なることである。タテハケには Na 量が多く、二子塚古墳のどの埴輪にも対応しない。他方、ヨコハケには Na 量がより少なく、二子塚古墳の IV 群の埴輪に類似した化学的特性をもつ。ただし、タテハケの中 1 点、ヨコハケと同じ胎土をもつものがある。このことは一体、何を意味するのであろうか。

第 66 図には瓦塚古墳の須恵質の埴輪の Rb-Sr 分布図を示す。やはり、二子塚古墳の I 群領域に分布している。また、第 69 図の Na 因子ではヨコハケによく対応している。ヨコハケと須恵質の埴輪の胎土は同じであり、同じ粘土を使って作られたとみられる。須恵質埴輪のうち、1 点は第 66 図で二子塚 I 群領域を少しずれているが、これは Na 因子でも他のものから大きくずれていることが図 11 でわかる。つまり、瓦塚古墳の埴輪胎土は 2 種類であり、一つはタテハケ型、他はヨコハケ、須恵質型である。しかも、互いに相手型の胎土をもつ埴輪が小数ではあるが見いだされている点が注目される。しかも、両者とも Rb-Sr 分布図では同じ領域に分布する。これらのことは瓦塚古墳の 2 種類の埴輪は同じ地域内で作られた可能性があることを示唆する。

第 67 図には二子山古墳の埴輪の Rb-Sr 分布図を示す。よくまとまって分布している。ところが、考古学的観察では A、B、C、D 群の 4 種類に分類される。しかし、第 69 図の Na 因子でも、これら 4 群には差違はなく、二子山古墳の埴輪の胎土は 1 種類であることが明らかとなった。二子塚古墳の II 群の埴輪と類似した化学的特性をもち、宇治市周辺で作られた可能性がある。

第 68 図には庵寺山古墳の埴輪の Rb-Sr 分布図を示す。ここで、これまでにみられなかった新しいタイプの埴輪胎土が登場する。一応、庵寺山領域としておいた。表 2 からわかるように、これらの埴輪には K、Rb 量が比較的少なく、逆に、Ca、Sr、Na 量が多い。この特性は大阪層群の粘土の化学的特性ではない。葛城・金剛山を構成する花崗岩類に由来する粘土で作られたと推定される。このタイプの埴輪は古市古墳群によくみられる。というよりも、古市古墳群の埴輪そのものとみられる。したがって、明らかに外部地域からの搬入品である。ここで注目されるのは、すべてが搬入品ではないということである。2 点、庵寺山領域をずれる埴輪がある。これら 2 点には Na 量も少ない。二子山古墳の埴輪に類似した化学的特性をもつ。この 2 点は大阪層群系の粘土を素材にしているとみられる。周辺の古墳では古市的

な特性をもつ埴輪が数多く出土する点で庵寺山古墳が注目される。また、二子塚古墳、瓦塚古墳の埴輪胎土も二子塚古墳のものにぴったりとは一致しないのは同一場所で作られた製品ではないことを物語る。このことは年代差によるのかもしれない。つまり、これらの古墳の築いた年代が違い、したがって、埴輪を作った年代も、また、粘土採集した場所も異なると考えられよう。

周辺の古墳の埴輪の胎土が1～2種であるのに対し、二子塚古墳の埴輪の胎土が4種類もあった点も注意される。

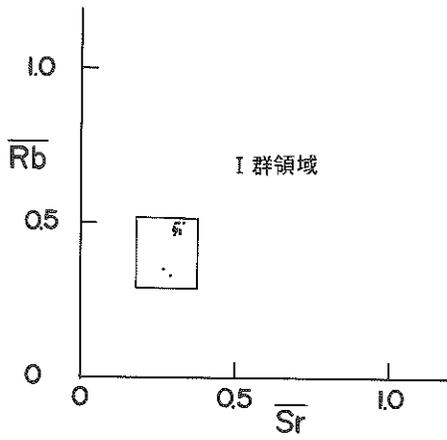
以上に述べてきたことは古墳の性格と密接に関係するものと思われる。考古学的知見と通わせて、統合的に考察されるとき、興味ある問題が提示されるかもしれない。

(編者注)

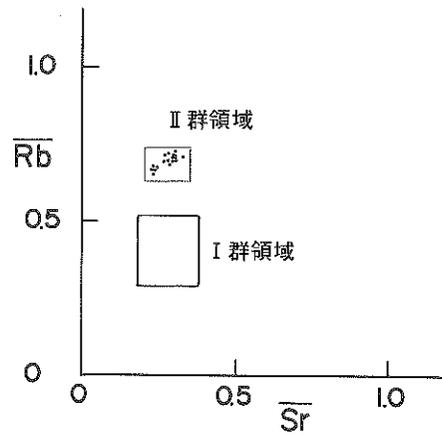
文章中のⅠ群からⅨ群は、本書中の円筒埴輪の分類と下記のように対応する。

Ⅰ群……03—2 トレンチⅡ類—a	Ⅵ群……03—4 トレンチⅡ類—a
Ⅱ群……03—2 トレンチⅡ類—b	Ⅶ群……03—4 トレンチⅢ類
Ⅲ群……03—2 トレンチⅢ類	Ⅷ群……03—4 トレンチⅠ類
Ⅳ群……03—2 トレンチⅠ類	Ⅸ群……03—3 トレンチⅠ類
Ⅴ群……03—4 トレンチⅠⅠ類—b	

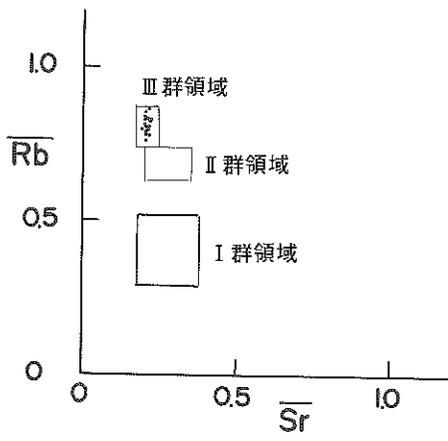
上記のように、9つに分類された各群は、埴輪の型式分類をさらに出土トレンチごとに分類しているため、胎土が4種類に分類される点は考古学的手法による埴輪の分類とほぼ一致する。Ⅴ群の資料において数値のばらつきがあった点については、すべてが破片資料であるため、Ⅱ類—bに分類した資料の中には資料調査の段階で微妙な個体があり、本来的には他の型式に分類すべき資料が混入した可能性がある。



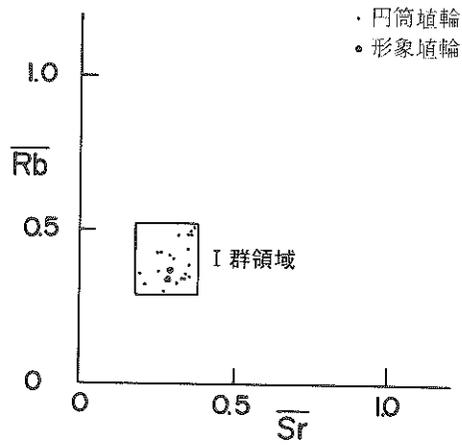
第56図 I 群植輪の Rb-Sr 分布図



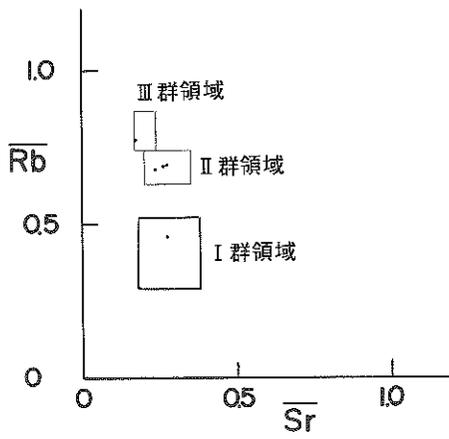
第57図 II 群植輪の Rb-Sr 分布図



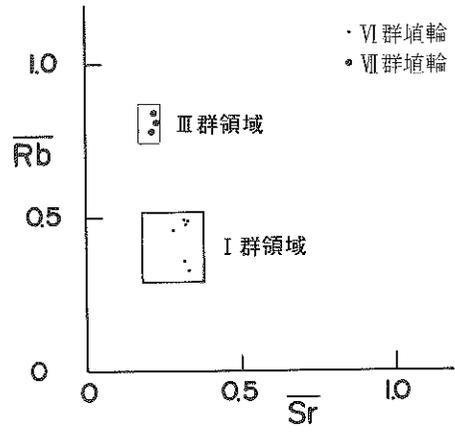
第58図 III 群植輪の Rb-Sr 分布図



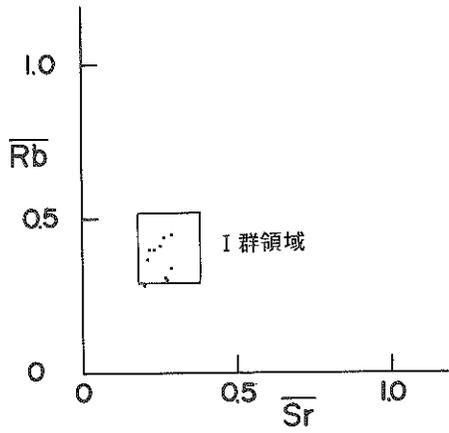
第59図 IV 群植輪の Rb-Sr 分布図



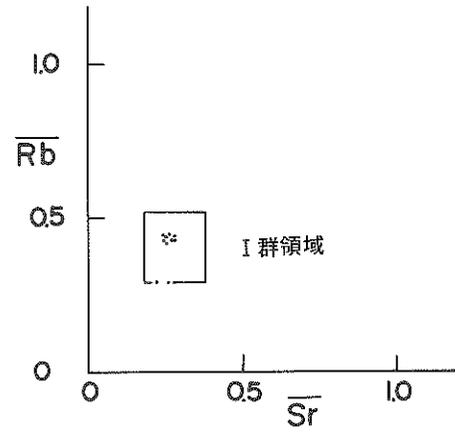
第60図 V 群植輪の Rb-Sr 分布図



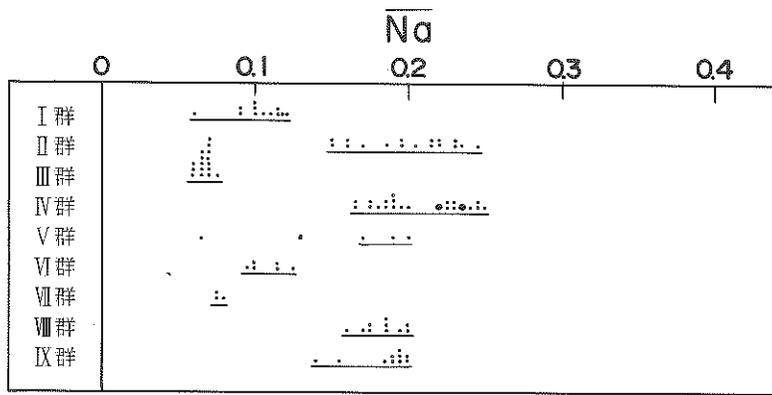
第61図 VI・VII 群植輪の Rb-Sr 分布図



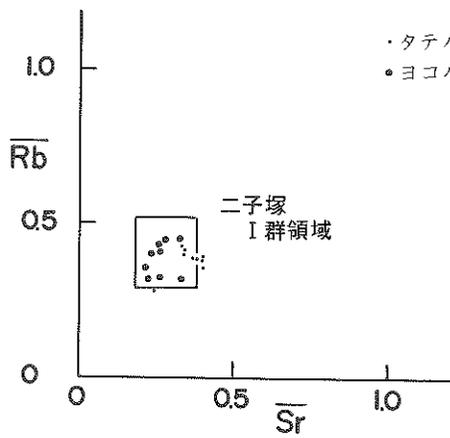
第62図 VIII 群植輪の Rb-Sr 分布図



第63図 IX 群植輪の Rb-Sr 分布図

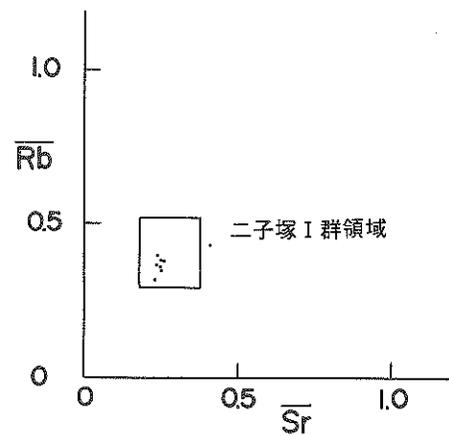


第64図 二子塚古墳出土埴輪のNa因子

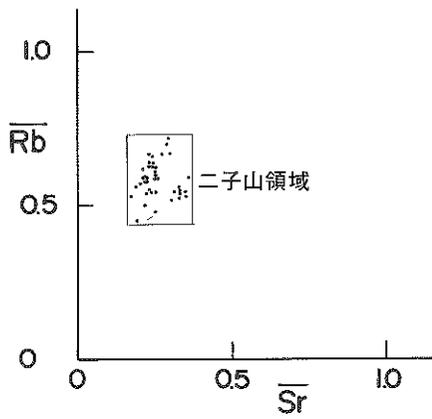


第65図 瓦塚古墳出土埴輪のRb-Sr分布図

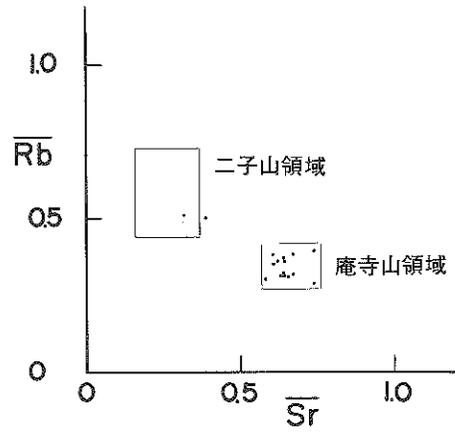
・タテハケ
 ・ヨコハケ



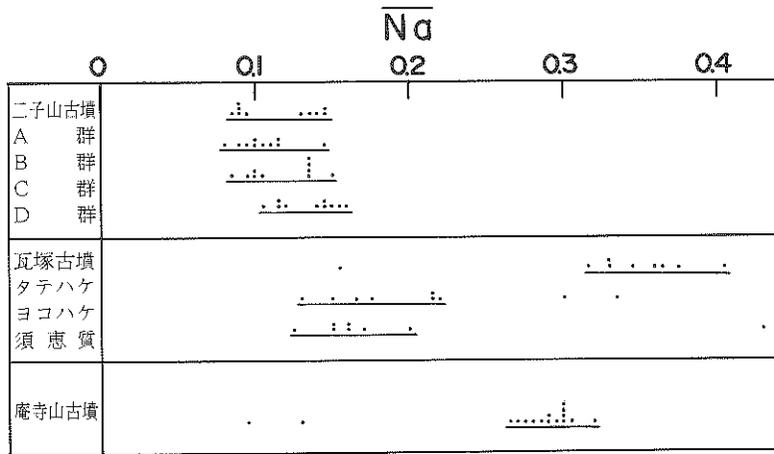
第66図 瓦塚古墳出土須恵質埴輪のRb-Sr分布図



第67図 二子山古墳出土埴輪の Rb-Sr 分布図



第68図 庵寺山古墳出土の Rb-Sr 分布図



第69図 周辺の古墳出土埴輪の Na 因子

表4 二子塚古墳出土埴輪の分析値

分類	資料番号	K	Ca	Rb	Sr	Na	分類	資料番号	K	Ca	Rb	Sr	Na	
I群	2919	0.429	0.089	0.480	0.306	0.113	III群	2962	0.567	0.047	0.810	0.209	0.068	
	2920	0.436	0.085	0.475	0.322	0.099		2963	0.585	0.044	0.859	0.209	0.071	
	2921	0.287	0.090	0.352	0.265	0.060		IV群	2964	0.418	0.179	0.363	0.341	0.177
	2922	0.432	0.080	0.487	0.301	0.118	2965		0.469	0.106	0.431	0.251	0.195	
	2923	0.422	0.085	0.483	0.308	0.105	2966		0.460	0.149	0.417	0.292	0.225	
	2924	0.449	0.097	0.500	0.326	0.120	2967		0.514	0.206	0.444	0.348	0.230	
	2925	0.422	0.092	0.484	0.301	0.116	2968		0.351	0.159	0.301	0.265	0.166	
	2926	0.429	0.089	0.496	0.307	0.113	2969		0.394	0.118	0.358	0.192	0.163	
	2927	0.428	0.096	0.499	0.322	0.102	2970		0.470	0.151	0.412	0.298	0.226	
	2928	0.412	0.088	0.474	0.304	0.101	2971		0.408	0.178	0.345	0.339	0.174	
2929	0.375	0.108	0.469	0.321	0.092	2972	0.515		0.178	0.496	0.363	0.238		
2930	0.303	0.101	0.334	0.289	0.089	2973	0.442		0.144	0.329	0.307	0.201		
II群	2931	0.588	0.093	0.702	0.288	0.222	2974	0.427	0.187	0.385	0.348	0.184		
	2932	0.583	0.078	0.697	0.260	0.193	2975	0.469	0.102	0.431	0.257	0.191		
	2933	0.586	0.087	0.703	0.276	0.194	2976	0.475	0.108	0.321	0.207	0.181		
	2934	0.582	0.062	0.669	0.220	0.148	2977	0.513	0.171	0.493	0.350	0.249		
	2935	0.591	0.078	0.716	0.268	0.186	2978	0.508	0.173	0.491	0.355	0.243		
	2936	0.575	0.060	0.669	0.233	0.159	2979	0.413	0.186	0.345	0.334	0.185		
	2937	0.589	0.094	0.704	0.293	0.219	2980	0.529	0.175	0.512	0.370	0.246		
	2938	0.582	0.102	0.711	0.301	0.234	2981	0.503	0.146	0.485	0.318	0.232		
	2939	0.568	0.064	0.677	0.237	0.170	2982	0.412	0.185	0.352	0.352	0.191		
	2940	0.587	0.091	0.706	0.301	0.215	2983	0.454	0.135	0.370	0.253	0.192		
III群	2941	0.574	0.099	0.707	0.295	0.229	2984	0.482	0.076	0.372	0.291	0.133		
	2942	0.594	0.111	0.714	0.326	0.245	2985	0.442	0.074	0.344	0.283	0.120		
	2943	0.577	0.060	0.682	0.226	0.151	V群	2986	0.468	0.095	0.463	0.269	0.131	
	2944	0.577	0.064	0.647	0.226	0.159		2987	0.577	0.080	0.686	0.269	0.192	
	2945	0.577	0.087	0.721	0.276	0.207		2988	0.590	0.079	0.689	0.272	0.198	
	2946	0.596	0.097	0.726	0.299	0.231	2989	0.587	0.064	0.676	0.235	0.169		
	2947	0.583	0.092	0.690	0.281	0.218	2990	0.581	0.019	0.769	0.170	0.063		
	III群	2948	0.559	0.037	0.809	0.200	0.058	VI群	2991	0.318	0.111	0.353	0.318	0.096
		2949	0.569	0.040	0.832	0.199	0.065		2992	0.441	0.094	0.489	0.331	0.123
		2950	0.563	0.042	0.794	0.202	0.064		2993	0.405	0.086	0.477	0.321	0.098
2951		0.572	0.034	0.797	0.194	0.059	2994	0.438	0.070	0.458	0.282	0.116		
2952		0.568	0.043	0.778	0.211	0.065	2995	0.433	0.093	0.487	0.320	0.116		
2953		0.572	0.043	0.760	0.203	0.073	2996	0.325	0.117	0.331	0.326	0.100		
2954		0.573	0.040	0.822	0.212	0.060	VII群	2997	0.584	0.050	0.806	0.229	0.075	
2955		0.587	0.042	0.806	0.211	0.069		2998	0.571	0.045	0.843	0.219	0.080	
2956		0.574	0.044	0.800	0.211	0.068		2999	0.586	0.043	0.784	0.216	0.073	
2957		0.562	0.043	0.783	0.199	0.069	VIII群	3000	0.466	0.094	0.404	0.227	0.176	
2958	0.575	0.038	0.846	0.202	0.063	3001		0.381	0.166	0.339	0.285	0.185		
2959	0.578	0.040	0.828	0.215	0.068	3002		0.468	0.097	0.399	0.224	0.184		
2960	0.571	0.046	0.834	0.209	0.072	3003		0.505	0.131	0.448	0.287	0.200		
2961	0.577	0.041	0.827	0.202	0.064	3004	0.465	0.102	0.412	0.249	0.195			

分類	資料 番号	K	Ca	Rb	Sr	Na		分類	資料 番号	K	Ca	Rb	Sr	Na
Ⅶ群	3005	0.464	0.100	0.283	0.204	0.177		Ⅷ群	3013	0.404	0.110	0.292	0.218	0.141
	3006	0.348	0.158	0.306	0.265	0.170			3014	0.481	0.129	0.430	0.272	0.199
	3007	0.479	0.106	0.442	0.257	0.200			3015	0.508	0.122	0.427	0.275	0.195
	3008	0.413	0.121	0.365	0.211	0.186			3016	0.474	0.108	0.422	0.254	0.186
	3009	0.342	0.160	0.296	0.270	0.162			3017	0.463	0.100	0.426	0.245	0.189
Ⅷ群	3010	0.484	0.100	0.436	0.248	0.194			3018	0.469	0.099	0.437	0.246	0.189
	3011	0.500	0.133	0.437	0.277	0.194			3019	0.340	0.157	0.292	0.262	0.155
	3012	0.476	0.105	0.445	0.263	0.199								

表5 二子塚古墳周辺の古墳出土埴輪の分析値

				K	Ca	Rb	Sr	Na
瓦塚古墳	3020	タテハケ		0.414	0.137	0.425	0.330	0.330
〃	3021	〃		0.417	0.106	0.355	0.396	0.362
〃	3022	〃		0.436	0.125	0.391	0.366	0.377
〃	3023	〃		0.419	0.173	0.418	0.336	0.331
〃	3024	〃		0.426	0.084	0.398	0.339	0.407
〃	3025	〃		0.301	0.098	0.283	0.241	0.156
〃	3026	〃		0.420	0.106	0.389	0.379	0.317
〃	3027	〃		0.455	0.130	0.378	0.398	0.345
〃	3028	〃		0.453	0.120	0.393	0.399	0.363
〃	3029	ヨコハケ		0.294	0.082	0.332	0.259	0.164
〃	3030	〃		0.304	0.063	0.358	0.212	0.151
〃	3031	〃		0.328	0.067	0.407	0.260	0.216
〃	3032	〃		0.382	0.119	0.321	0.328	0.336
〃	3033	〃		0.339	0.068	0.432	0.262	0.217
〃	3034	〃		0.274	0.077	0.316	0.221	0.128
〃	3035	〃		0.455	0.079	0.449	0.328	0.298
〃	3036	〃		0.318	0.066	0.404	0.234	0.176
〃	3037	〃		0.342	0.069	0.454	0.277	0.219
〃	3038	ヨコハケ	須恵質	0.293	0.063	0.367	0.243	0.170
〃	3039	〃	〃	0.298	0.073	0.381	0.264	0.159
〃	3040	〃	〃	0.260	0.074	0.324	0.231	0.127
〃	3041	〃	〃	0.291	0.089	0.381	0.249	0.148
〃	3042	〃	〃	0.284	0.093	0.351	0.248	0.152
〃	3043	〃	〃	0.330	0.064	0.399	0.242	0.198
〃	3044	〃	〃	0.296	0.066	0.364	0.245	0.161
〃	3045	〃	〃	0.442	0.110	0.432	0.406	0.429
二子山古墳	3046	タテハケ→ ヨコハケ	No A	0.539	0.081	0.539	0.247	0.146
〃	3047	〃	〃	0.465	0.074	0.549	0.330	0.090
〃	3048	〃	〃	0.526	0.069	0.542	0.224	0.141
〃	3049	〃	〃	0.558	0.076	0.482	0.247	0.129
〃	3050	〃	〃	0.564	0.092	0.627	0.252	0.147
〃	3051	〃	〃	0.492	0.075	0.545	0.345	0.089
〃	3052	〃	〃	0.548	0.068	0.543	0.239	0.133
〃	3053	〃	〃	0.460	0.076	0.543	0.328	0.084
〃	3054	〃	〃	0.447	0.076	0.534	0.331	0.092
〃	3055	〃	〃	0.447	0.075	0.545	0.312	0.091
〃	3056	タテハケ→ナデ	No B	0.485	0.069	0.603	0.254	0.117
〃	3057	〃	〃	0.460	0.048	0.454	0.192	0.081
〃	3058	〃	〃	0.805	0.010	0.526	0.171	0.099
〃	3059	〃	〃	0.499	0.061	0.589	0.218	0.105
〃	3060	〃	〃	0.504	0.050	0.565	0.185	0.094
〃	3061	〃	〃	0.479	0.067	0.555	0.325	0.088

				K	Ca	Rb	Sr	Na
二子山古墳	3062	〃	〃	0.510	0.061	0.573	0.200	0.108
〃	3063	〃	〃	0.514	0.055	0.593	0.210	0.101
〃	3064	〃	〃	0.501	0.067	0.584	0.219	0.113
〃	3065	〃	〃	0.570	0.062	0.673	0.228	0.147
〃	3066	タテハケのみ	No C	0.540	0.065	0.627	0.240	0.137
〃	3067	〃	〃	0.506	0.064	0.583	0.216	0.136
〃	3068	〃	〃	0.463	0.057	0.700	0.292	0.097
〃	3069	〃	〃	0.475	0.064	0.515	0.311	0.084
〃	3070	〃	〃	0.563	0.069	0.640	0.243	0.149
〃	3071	〃	〃	0.469	0.089	0.534	0.351	0.105
〃	3072	〃	〃	0.543	0.048	0.621	0.207	0.100
〃	3073	〃	〃	0.577	0.059	0.644	0.228	0.133
〃	3074	〃	〃	0.491	0.054	0.672	0.299	0.098
〃	3075	〃	〃	0.543	0.063	0.618	0.247	0.135
〃	3076	ナデのみ	No D	0.458	0.066	0.499	0.216	0.114
〃	3077	〃	〃	0.478	0.065	0.589	0.211	0.103
〃	3078	〃	〃	0.476	0.132	0.594	0.361	0.146
〃	3079	〃	〃	0.535	0.062	0.632	0.229	0.143
〃	3080	〃	〃	0.568	0.072	0.591	0.246	0.154
〃	3081	〃	〃	0.569	0.085	0.720	0.289	0.158
〃	3082	〃	〃	0.489	0.065	0.553	0.234	0.119
〃	3083	〃	〃	0.523	0.090	0.671	0.270	0.148
〃	3084	〃	〃	0.461	0.080	0.591	0.249	0.114
〃	3085	〃	〃	0.558	0.068	0.666	0.244	0.143
庵寺山古墳	3086			0.299	0.265	0.311	0.627	0.284
〃	3087			0.290	0.273	0.351	0.607	0.278
〃	3088			0.295	0.246	0.379	0.605	0.271
〃	3089			0.291	0.308	0.311	0.656	0.305
〃	3090			0.282	0.281	0.363	0.645	0.288
〃	3091			0.314	0.291	0.392	0.738	0.299
〃	3092			0.298	0.302	0.313	0.640	0.302
〃	3093			0.298	0.269	0.356	0.623	0.279
〃	3094			0.271	0.261	0.302	0.579	0.267
〃	3095			0.290	0.300	0.324	0.670	0.303
〃	3096			0.300	0.309	0.287	0.740	0.321
〃	3097			0.365	0.108	0.514	0.315	0.096
〃	3098			0.288	0.299	0.307	0.644	0.295
〃	3099			0.302	0.271	0.379	0.672	0.303
〃	3100			0.372	0.178	0.502	0.393	0.131
〃	3101			0.292	0.276	0.376	0.643	0.291

宇治二子塚古墳の葺石の石材

横山 明 生

1991年度の発掘調査によって葺石が40個ではあるが検出された。極めて限られた時間でもあり肉眼観察により調査を行なった。

測定項目 岩石種・大きさ・円磨度

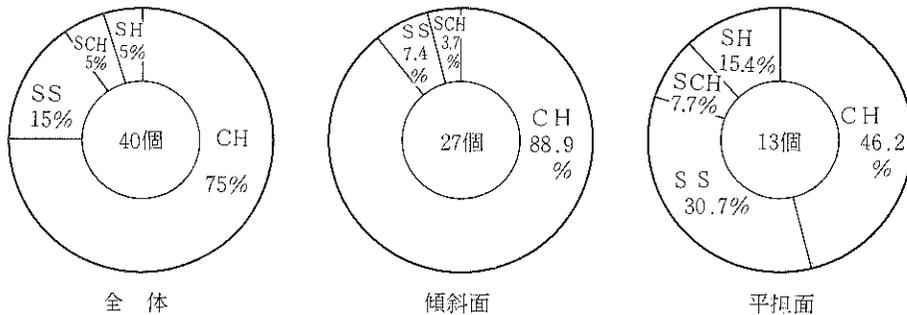
測定方法 岩石種名の決定は肉眼観察により決定した。大きさについては出土状況において測れる限りでの長軸を測定した。円磨度については、Krumbein 1941年による礫の円磨度段階表と照合して決めた。葺石の石材 今回の発掘調査により検出された葺石は全体としては、チャートが75%。砂岩が15%を占めて他に輝緑凝灰岩等が認められる。

傾斜面ではチャートが88.9%と高率であるのに対し、平坦面ではチャートが46.2%であり砂岩が30.7%と多くなり、チャートの割合がはっきりと異なる。

大きさについては、平坦面に遺存する長軸30cmの砂岩が最大である。傾斜面・平坦面とも長軸15cm~20cmが40%程を占めている。

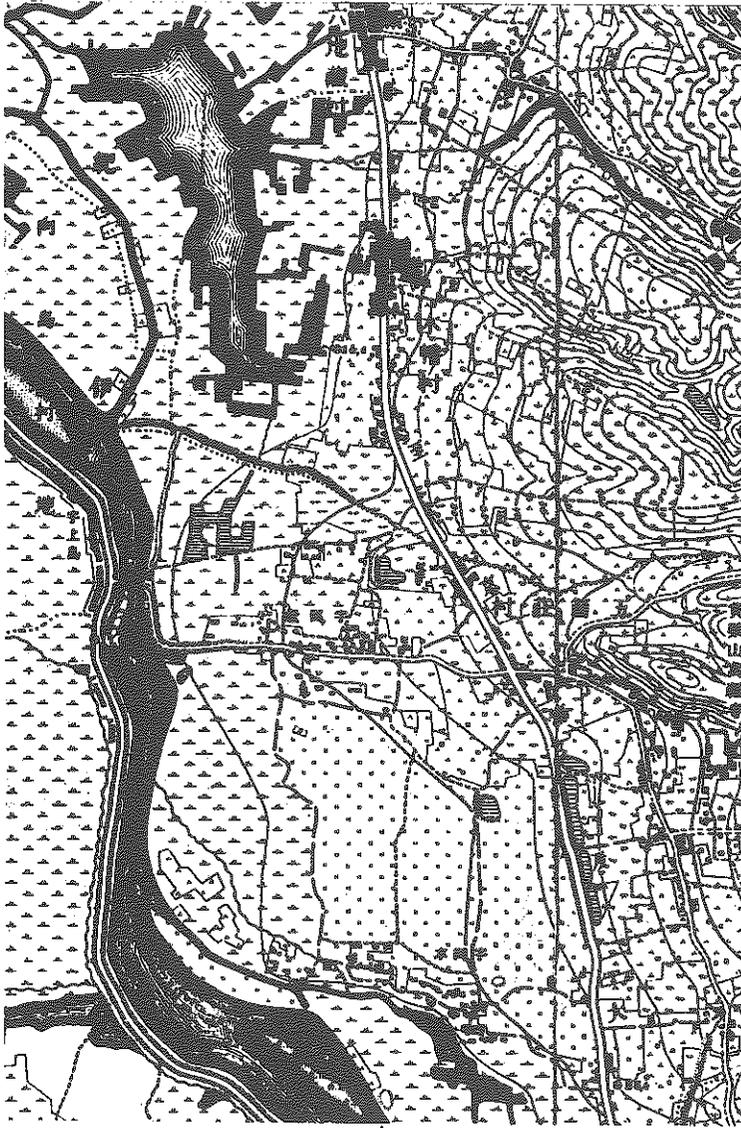
円磨度については、0.6以上0.8未満が50%程を占めて0.5以上0.6未満が続いて多い。これは岩石種を問わず、傾斜面・平坦面とも同様である。

以上のことから、付近の河川・地層中に存在する礫が二子塚古墳で調査した葺石に認められる。このことにより、本墳の付近の礫を使用していることが理解できる。資料数が少ないが、傾斜面と平坦面では岩石種の割合が異なることは、留意に値できるだろう。



CH：チャート SS：砂岩 SCH：輝緑凝灰岩 SH：頁岩か粘板岩

第70図 二子塚古墳葺石の岩石種

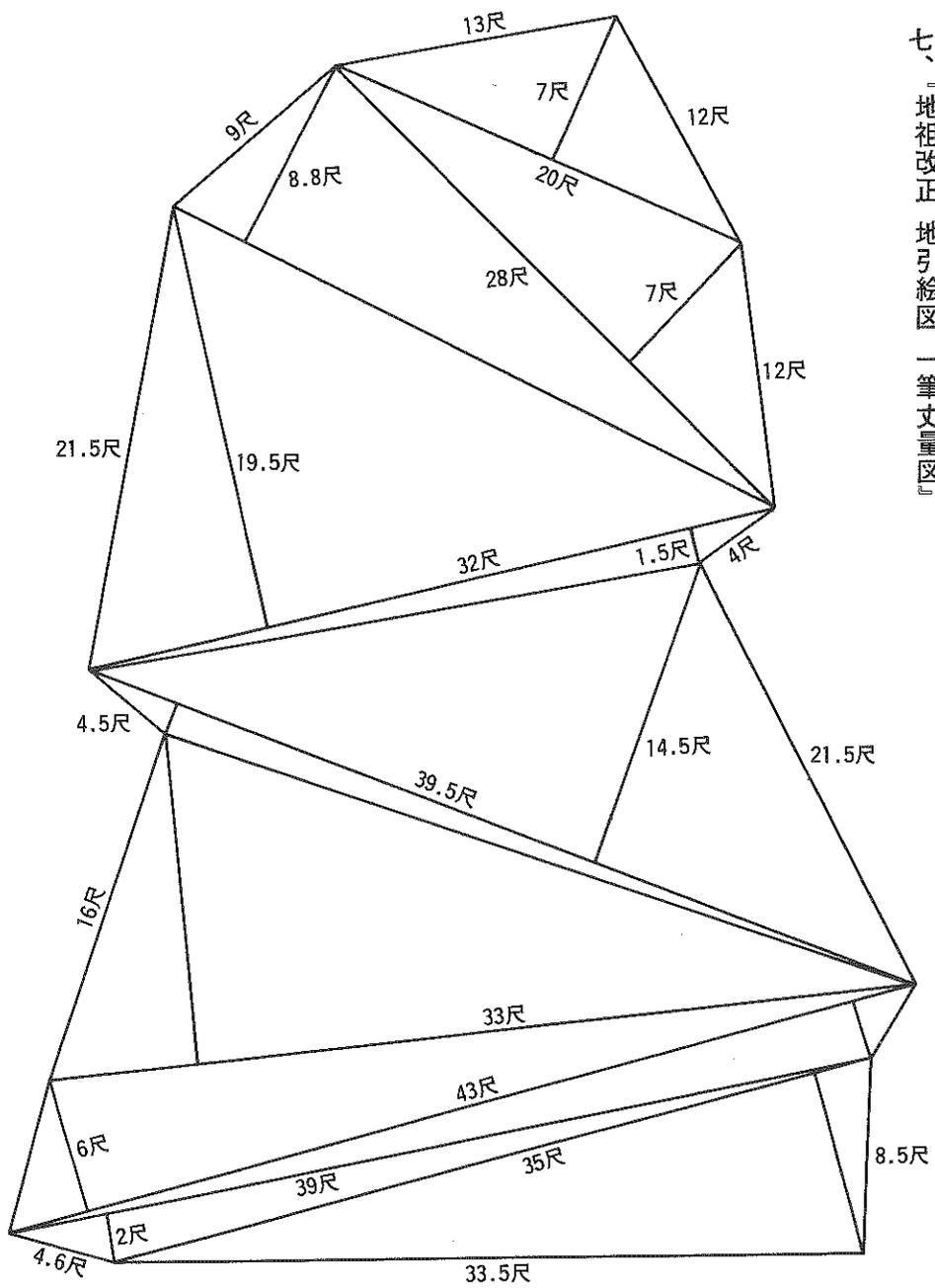


八、『二万分の一版製図』

(明治二十一年測量)

「この測量に二子塚古墳は、L字形に残る濠とその外側の堤が表現されている。但し堤は、濠を越えさらに北側へとのび、かつては、現状より良好に堤が残っていたことが理解できる。」

七、『地祖改正 地引絵圖 一筆丈量圖』



墳ノ内部ノ構造ハ上記後圓部ニ埋没セル大石其ノ一部ヲナスベキコト容易ニ相察セラレシ處ニテ、恐ラク石室ノ天井石ニ相當ルベキヲ考ヘシメシモ既ニ、破壊セラレタル部分アリ、且ツ當時殘存ノモノヲ配列整齊ヲ缺キテ其ノ構造ヲ明ニナシ難カリキ。依リテ試ミニ發掘ノ事ニ關與セル西方寺住職ニ就イテ札セルニ、後圓中央ノ土砂ノ採掘ニ當リ、基底部ニ近ク小石ヲ積ミ重ネタル室アリ、上部ヲ覆フニ大石ヲ以テシ、マタ周圍ニモ大石ヲ置ケル構造部分ヲ見タリ、今マ存スル大石ハ其ノ一部ナリト告ゲタリ。尤モコノ室ハ發見ノ當初既ニ原形ヲ損セルノ形迹アリテ其ノ詳細ヲ究メ能ハザリシト云ヘバ、今マ室ノ形式ノ如何ヲ確ムルニ途ナシ。タダシ遺存ノ用石ノ大サヨリシ、マタンノ位置ノ比較的深ク、後圓封土遺存部ノ西側ニ同ジ大石ノナホニ三見ユルニ參のスル時ハ石室ノ構造ノ大規模ナリシ事實ヲ認ムベク、此ノ點ニテハ普通我ガ古墳墓制ノ後期ニ盛行セリト云ハル、圓塚ノ横穴式石室近キモノナルヲ感ジタリ。記シテ參考ニ供ス。

遺物ニ就イテハ如上後圓部ノ際注意ヲ加ヘタリト云フモ僅ニ一個ノ異形埴輪片ヲ獲タルノ外、石室ノ部分ヨリハ何等ノ發見物ナカリシト。蓋シ上述ノ狀態ヨリシテ、本墳ノ主躰ハ早く盜掘ニ遇ヒ、上部ノ凹所ノ如キ當時天井石ノ落下等ノ結果生ゼシモノニ外ナラザルベキカ。右ノ埴輪片ハ西方寺住職ヨリ京都帝國大學ニ寄贈シテ今マ文學部陳列館ニ藏ス。圖版第三十五ノ三ニ示スハ其ノ寫眞ニシテ、徑七寸ノ圓筒ノ上部括レテ該部ニ太キ突帶アリ、コレヨリ上部再ビセバマリテ更ニ一帯ヲ繞ラシ器蓋ヲナセルモノ、現存高サ約八寸五分ニシテ上ヲ缺ク。而シテ圓筒部ニハ上邊ニ近ク徑一寸五分ノ二孔ヲ貫通セリ。形狀ヨリ察スルニ埴輪偶人ノ下部ナルコトホゞ疑ナシ。タゞ其ノ主要部佚失セルヲ憾トナス。

之ヲ要スルニ本ニ子塚ハ其ノ制前方後圓墳ノ整美ナル類ニ屬シ、上代有力者ノ與城タルコトヲ示セルモ、今マ破壊セラレテ少ナカラズ其ノ面目ヲ失ヘルノ狀ニアリ。既チコ、ニ概要ヲ録シテ、其ノ保存ノ法ノ加ヘラレン事ヲ期待ス。若シソレ塚ノ營造年代等ニ至リテハ墳ノ主躰ヲ破壞セラレ副葬品ノ徵スベキモノナキ現狀ニアリテハ、タゞ外形ヨリソノ恐ラク我ガ墓制ノ最盛期ニ當ルベキヲ推測スルニ過ギザルナリ。

俊頼髓腦 おほつかなたれとかたらんふたこつか

は、その杜やしらは新留らん きんすけ

四、『山城名跡巡行志』第六 宝曆四年（一七五四）

○二子塚 フタゴツカ 在岡屋 宇治街道路傍 西方寺南西 俊頼朝臣ノ歌

オカヤ 岡屋名在二宇治街道西二古街道也 詠和歌

五、『京都府史蹟勝地調査會報告』第四冊 大正十二年（転載）

第六 五箇荘二子塚古墳

二子塚古墳ハ宇治郡宇治村大字五箇庄西方寺ノ境内ニアリ、堂ノ背後ニ位置ス。南面ノ大ナル前方後圓墳ニシテ、其ノ存在ハ早ク、水戸彰考館ニ藏スル山科郷古圖ノ六條六里下堤里ニ特筆セラレ、マタ台記久安六年ノ條ニモ其ノ名見エテ古クヨリ著名ナルモノ、今モナホ隆然タル封土ヲ遺存シテ府下ニ於ケル宏火ナル墳壘ノ一ヲナス。タゞ大正三四年ノ交後圓部ノ土砂ヲ採掘セル結果、此ノ部イタク破壊セラレテ、完形ヲ存スル部分ガ後ニ岡屋關白近衛兼經ノ墓ヲ營メル前方部ノミニ限ラル、ニ至レルヲ遺憾トス。今マ委員ガ破壊ノ當時實地ニ就テ見聞セシ處ニ本キ、其ノ形状ヲ録スルニ、宇治川東方ノ沖積臺地ニ營造セル墳壘ハ前後ノ長徑一町ヲ超ヘ、前方部ハ其ノ西南ノ二面ニナホ渾ヲ遺存シテ、本來ノ頗ル完備セル墓制ナルヲ察セシム。後圓部ハ委員ノ同古墳ヲ訪ヘル大正四年五月ニハ既ニ土砂採掘ノ爲ニ其ノ大半ヲ失ヒ、僅ニ西半部ノ切斷面ヲ見得ルニ過ギザリシガ、其ノ示ス處、基底ト思ハル、部分ヨリノ高サ數間アリ、上部ニ大ナル凹所ヲ存シ、マタ凹所ノ下方ニ當リテ稍深位ニ大石三四ノ埋没シテ墳の主躰ノ一部タルヲ思ハシメタリ。而シテ此ノ封土ノ破壊部ニハ埴輪圓筒ノ破片散在シ、マタ礫石ノ遺存スルモノ多カリシヨリシテ當初葺石ノアリシコトヲ肯定シ得タリ。

一、『殿曆』（筆者 藤原忠実）

康和五年（一一〇三）七月

廿四日、辛天晴、夜中許夕立、丑剋許着衣冠、御前遲參間、中宮權大夫談（藤原能實）（中略）二子暮程車軸打、其間鬢遲々、渡宇治橋間、前駟・隨身下馬、余昇放車、渡橋後懸牛、（後略）

二、『台記』（筆者 藤原賴長）

久安六年（一一五〇）九月

廿六日己亥、雞鳴後參西殿禪閣、居處、頃之、乘輿出御、余乘車從之、兼長、同車棹船渡河、於東岸、禪閣移車、余連車、此間降雨、比至二子陵邊天曙、過此陵、未至櫃川、見禪閣御車、右邊有一鹿、再見之、忽然不見、奇問僕從、各答不見、疑春日明神守禪閣歟、辰時入洛、（後略）

三、『山城名勝志』卷第十七 正徳元年（一一七一）

○二子陵按岡屋村東方寺、禪院、水西有陵園、丘二相並是二子陵歟

台記云久安六年九月二十六日雞鳴後參西殿禪閣、居所頃之乘輿出御余乘車從之兼長、同車棹船渡河於東岸禪閣移車余連車此間降雨比至二子陵邊天曙過此陵未至櫃川見禪閣御車右邊有一鹿再見之忽然不見奇問僕從各答不見疑春日明神守禪閣歟辰時入洛

千種云俊秘抄連歌部山城二子つか おに柳 伏見 宇治殿

資
料